

---

# 東方神異譚

triptych

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方神異譚

### 【Nコード】

N1810T

### 【作者名】

triptych

### 【あらすじ】

交通事故をきっかけにして神（笑）により東方project世界の過去へ送られた一人の男の物語。ちなみに原作知識なんて持ってません。一応バグチート物……？

半年以内に一区切りつけられるよう頑張りたいと思ってます。

## 第一話 終わりにして始まり

都会では大きな、しかし地価の安い田舎ではやや大きい程度に認識される和風の家。

その南に構えられた2メートルほどの門の木戸を開けて出てきたのは、空色のTシャツに黒のスラックス姿の男性だった。

成人したばかりの彼を外見で評価するならば、せいぜいが平々凡々。

中肉中背に黒髪茶眼。その顔も特にマイナスされるような特徴こそ無いが、特筆すべきような長所も無い。

あえていうなら、ひげや前腕の体毛の薄さと黄色人種にしては白肌から実年齢より若干若く見られる所だろうか。

道路に立った彼は東に向いて直視するにはやや眩しい日光を目蓋の上から感じ取り、指先を組み合わせた手を上げて大きく伸びをする。

次いで門からやや東にある赤茶けた車庫の前に立ち、茶色く端々が錆びたシャッターを金属の軋む音と共に上げた。

その内から朝日にさらけ出されたのは、半年ほど前に納車されたばかりの白いワゴン車。

そのドアに手を掛けると同時、車のキーとなるリモコンの電波を受信したオートロックシステムが大きくガチャリ、という音を鳴らして車の鍵を開ける。

それは当たり前前の事象であり、しかし天文学的確立ですら在りえない事だった。

なぜなら、この時間軸を除いた全ての可能性世界に存在する彼は、この瞬間車のドアを開けることが出来なかったのだ。

真実無限である平行世界の中にあつて、しかしたった一つの例外である彼だけが、鍵を開け、エンジンをかけるスイッチを起動させることが出来た。

そのキーの電池は、日付が変わる時間には既に切れていたにも関わらず。

起こり得ない筈の出来事。世界に発生した明らかでないレギュラーに、しかし気付いた存在はない。いる訳が無い。

だが、この瞬間、この世界は定められたレールから脱線してしまっただ。

男性は異常を知る由もなくギアをノーマルに入れ、そのまま大学へと車を走らせる。

彼が異変を感じたのは、それから10分27秒後。

前の車は百数十メートル先の一時停車線で停止しており、対向車もない片田舎の二車線道路。

道の両脇には夕方からの客をメインとした飲食店とその駐車場、及び中古車が並んだ無人つばい営業所があるのみ。

左脇の路側帯を歩く小学生と、その横の白線上を走る自転車に乗った高校生を確認した彼は車を右に寄せつつブレーキを踏んで減速を始める。

とりわけ急ぐ必要も無いし、そもそも信号の多い一般道において時速を10や20上げたところで殆ど意味は無い。

だから、彼は間違いなく安全運転をしていたし、体調にも違和感など存在していなかった。

何がどうまかり間違ってしまったのか、それに答えられる者はいない。

それはこの次の瞬間も、そして地球人類が滅ぶ瞬間に至るまでそうだった。

だから、次の瞬間彼が唐突に意識を喪失したのも、その数秒後ワゴン車が路側帯に乗り上げたのも、そして彼がこの世界から消滅してしまっただ事すらも、純粹に事故であるといえよう。

翌日の新聞の地方欄。その事故は大きく取り上げられた。  
その被害を要約するならば、

死亡者数2。

重傷者数1。

軽傷者数3。

行方不明者数1。

ワゴン車の所有者であった成人男性の失踪は、さしたる手がかり  
の無いまま迷宮入りとなる。

余談ではあるが。

その後、西暦2137年。

122年前に起きた事故によってこの世界が喪失したたった一人  
の人間の持つ因果。

その取るに足りない重みこそが次元宇宙の破綻の原因であると解  
明された時、もはや滅びに抗う術など存在しなかった。

## 第一話 終わりにして始まり（後書き）

ノリで書いた。後悔はしていない。出来る限り反省はします。

## 第二話 神（笑）

コワレタ。

意識を取り戻した瞬間、“彼”という存在は確かに崩壊した。

全方向から、いや、そもそも三次元上のベクトルで考える事そのものが間違いである異質異端理解不能表現法皆無な情報が彼の感覚器を通さず“彼”という存在そのもの”に流し込まれたのだ。

少なくとも、世界から放り出された彼の存在する位置を表現することなど人間には不可能だ。

次元そのものからして異なる『ソコ』に放り出された彼は、肉体も、精神も、在り方も、存在の起源終末全てが崩される。

破壊された“彼”は、『ソコ』の理に隷従させられ変化を繰り返す。

変えられる。替えられる。還られる。

如何なる理由によるものかは理解できないが、数多の変化を繰り返した“彼”は、偶然か必然か表面上は元通りの姿を取り戻した。

カタチを取り戻した以上、精神もまたそれに準じて再構築される。時間という概念があるかどうか不明な『ソコ』の理の下、“彼”は確かに変化を終えたのだ。

当然ながら、元通りでは無い。

あくまで取り戻したのは原型のみ。

余分なモノを無理矢理織り交ぜられた“彼”は、必然元の存在か

らかけ離れた異質に成り果てる。

しかし、曲がりなりにも人間を模した以上、その精神も人間に近しいカタチを取り戻す。

“彼”が意識を得て始めて認識したのは、浮いているようでその実落下し続けているような奇妙な浮遊感だ。

その身に触れる物質は無く、代わりに木々がそよめきあう様な音に取り囲まれた。

開いた眼に映るのは金属光沢を持つ原色の線の群れ。

全ての色が明暗を常時変化させながら、無数の線はプール一面に溢れかえるミミズのように入り混じりのた打ち回っている。

その異質な光景を目の当たりにして“彼”が感じたのは、どうしようもなく絶望を想起させる疎外感。

あの原色の中に融け混ざりたいという欲求に駆られるも、自らにその欲求を満たす術が無いことをも理解している“彼”は諦めと共に強張らせていた体を弛緩させた。

だが、その光景もやがては変化する。

擬音で表すなら、グジュリ、という音が適切であろう。

視界がもつと単純な造形に変化する。

子供の塗り絵のような境が酷く歪に蠢く二次元世界。

髪は赤、体は黄色、やけに横長な顔らしき部分の中央で開閉する歯が剥き出しの黒い線で出来た口。そして凹凸を繰り返しながら周囲を取り囲む青。

平面世界の人間モドキは、コマ送りのように蠢いている。

それは原色の群れから浮き出てきたように見えて、その実“彼”の内側より乖離したものだ。

故に

やあ、僕<sup>ボク</sup>

歯軋りをしながら回転するラクガキの口から滲み出したのは、“彼”自身に還る言葉に他ならない。

説明が必要かな？

問いかけながら、そのヒトガタは肘と膝を左右逆に回転させ始める。

分かっているとは思うけど、ボクは神（笑）だ

そして“彼”がヒトガタに返事をする必要は無い。このヒトガタは“彼”から溢れ出した存在であり、“彼”が理解している事柄を言葉というカタチに置き換えて認識させる翻訳機でしかない。

だから、この会話はヒトガタの一人ごとに終始するのが当然であり、“彼”は一切の疑問を挟む余地なくその事実を認識しなます。

かつこわらい。かつこかり。どっちでもいいけど、とにかくボクは全能でもなければ全知でもない。ただ僕<sup>ボク</sup>の中にある概念で最も類似するから、ボクは神と名乗ろう

擦り合わされる歯から滲み出た蟻のようなカタチの言葉が、列を成して次々と“彼”の右目から体内に侵入する。

しかし、“彼”が感じたのは異物感ではなく充足感。

この問答は“彼”の中の情報の整理であり、還ってきた情報を目に見えるカタチで再配置する行為に他ならない。

間違えたジグソーパズルの欠片を取り替えるようなものだ。

情報と認識が上手くかみ合い、“彼”はより正しく在る事を可能とする。

僕は神の内側に飛び込んだ。そして僕は正しく消化、吸収され、今廃棄されようとしている真つ最中さ

カタチとなった言葉が再配置されるにつれ、“彼”は現状をより正しく認識する。

そう、『ソコ』は神という概念に近いナニカの中。

より完成された存在の内に入った異物はその調和を乱さぬよう処理され、害悪となる要因と共に排出される。

白血球による異物の捕食、分解、排出。“彼”の存在していた世界の生物に当てはめると、それが一番適切な表現であろう。

疎外感を感じるのも当然だ。“彼”は異物扱いとはいえ、『ソコ』の内側に在籍したのだ。分離し廃棄される不要物と成り果てたならば、先程の疎外感にも説明がつく。

正確に言うのなら、こうして話しているボクは神であったものの残滓。そしてこれから行く先はここではない所。次元としては上に行くか下に行くか識らないけれど、そこは僕が安定していられる所であるのも間違いない

その言葉が“彼”に配置されると共に、視界に映る平面が渦を巻いたように螺旋状に歪む。

次いで周囲の全てが金属光沢を放つと同時に、全てが雲散霧消した。人間の五感では知覚できないナニカは“彼”の表面に吸着する。

“彼”を覆う膜が無くなった。

それは、『ソコ』との決別の証。

すなわち、異次元への到着である。

変化は劇的であった。

視界には古い日本家屋に近似する建物と10ばかりの人間そっくりな化物。

辺りを満たす洗練された大気は肌に、身を縛る重力は土を踏みしめる足に、化物の放つ理解不能な言語によって構成された声と僅かな風が織り成す音は耳によって受け入れられる。

思い出すことは適わねど、それは確かに“彼”が生まれ出でた世界に酷似した環境であった。

わざわざ《酷似した》などと表現したのは、“彼”が既視感と共に僅かな違和感を捉えたためだ。

幾人もの化物がいる。

知識はそれらを人間であると肯定しているのに、感覚はそれらがかつて“彼”で在ったモノと同類ではないと断じている。

そもそも、“彼”が識っている大気はここまで澄んでいなかった。土という物を石より無機質に感じなかった。

そもそも、世界はここまで『生』が欠乏してなどいなかったのだから。

それでも、理解できるものはある。

彼を遠巻きに見る者達の表情は驚愕と困惑に彩られ、囁き合う彼らの小さな声には怯えがあった。

やがて槍や弓、そして木製のライフルに似た銃を持った男達が現れ、“彼”を一斉に包囲すると同時に元から居た者達がその場から走り去る。

「！！」

そして、武装した者達の一人が銃を構えながら大声で威嚇してきたのだが、その言語を理解できない“彼”には当然その意図など判る筈も無い。

「日本語、分かります？ Can you speak Japanese?」

とりあえず“彼”が知る言語が通じるか試してみた。文化はどう見ても彼の母国よりであるが、英語も使ってみる。特に意味は無いが。

「？、？」

「……やっぱり通じないか」

返ってきたのは知らない言語。

大体世界からして違うのだ。見た目がどれほど似ていようとも、決してそれは同一ではない。

救いがあるとすれば、ここが“彼”の起源世界と次元がほぼ同じ位階にある事だろうか。

世界が違おうと、理の差が小さいならば共存できる可能性は皆無ではない。

簡単に意思疎通ができないのはひどく不安で不便ではあるが、それでもジェスチャーぐらいは通じるだろう。

(とりあえず、名前から、かな?)

右手を胸に当て、“彼”は自らの名前を名乗ろうとして

「僕は　　!？」

ここでよじやく、“彼”は自分の名前が思い出せないことに気が付いた。

当然のようにあるはずの名前が、歴史が、記憶が、記録が致命的

に破損している。

出てこない。思い出せない。そもそも無い。

当たり前に有る筈の物が無い恐怖に頭から血の気が引いた。

足が強張り膝が震えだす。

地を踏みしめている感触があやふやになる。

もはや“彼”に目の前の男達など構っている余裕は無かった。

震える手で頭を掻きむしり、必死に心を支える支柱を自らの中に求め続ける。

だが、頭の中に響くのは悲鳴じみた金きり音。知識を配置しなす以前の記憶は形を成さない。

当然だ。“彼”に知識は合っても歴史は無い。

“彼”の知る由も無いことだが、元の世界との因果線が断たれた時点で既に“彼”は自身を成していた歴史から断絶されたのだ。

再構築する段階で精神は元に似たカタチを取り戻し、その一環として知識も原型に限りなく近く再生された。

だが、この段階で彼の精神の土台は紡いできた歴史から『ソコ』の理に置き換えられている。

故に、起源世界に戻る術を持たない“彼”には断ち切られた縁を繋ぐことはできず、“彼”の記憶は再構築されなまま混ぜっ返された情報の破片となった。

どこか遠くで放電音が響く。

構っている余裕は無い。

目の前に赤く鈍い光を放つ槍の穂先が突きつけられた。

鬱陶しいので木で出来た柄を苛立ちまぎれに両手で掴み、膝でへし折る。

幾つもの武器が突きつけられた。

自分が分からない以上に怖いとは思わない。

ふと、顔の違和感に気がつく。

目の前には一人の少女。

次の瞬間には目の回りを布のようなものでこすられ、ようやく自分が涙を流していた事を知る。

一通り顔を拭い終わると、少女は小さく微笑み両手で“彼”の手をそつとつつむ。

その温もりと笑みに支えられ、どうにか“彼”は体の強張りを解いて鼻をすする。

すると少女はどこか楽しげに笑い、そつと自らの顔を指差した。

「  
×××」

名前のようだが、そもそも“彼”には発音自体できそうになかった。

### 第三話 怪物薬師

端的に言つと、少女は怪物だった。

「なにか失礼な事考えてない？」

「いえ、何も」

少女の名は八意永琳。本名は別にあるのだが、それは“彼”の言語では発音できないために今では永琳と自ら名乗り始めた。

初めて会ったときは外見年齢十代前半で銀髪碧眼の美少女だった。そのときからずっと彼女は赤と青の二色で構成された衣服を着用している。服のデザインは頻繁に変わるが、永琳曰く流行の最先端らしい。

聡明、を乗り越して人の領域を盛大に踏み外している程の頭脳明晰。得意としているのは薬学らしいが、その異常なまでの才はあらゆる局面において彼女の絶対性を約束している。

それは交渉の場においても同様で、彼女は相手の思考を完全に読んだ上でその表情、口調、雰囲気、仕草、動作を完全な計算によって演出する。

彼女との出会いを思い出す。“彼”は終始彼女の手の平の上で踊らされた。

かつての出会いを思い出したためか、ややジト目で永琳を見る“彼”に永琳は笑みを崩して苦笑を浮かべる。

「あら、心外ね。私は悠の前では自然体でいる積もりなのだけど」「それ、人を生物兵器扱いする人間の言う事じゃないよね」

悠。それが“彼”に与えられた名前。

かつて錯乱状態にあった悠を彼女は瞬く間に落ち着かせ、身振り手ぶりで保護する意を伝え、彼女は悠を家に招き、その翌日悠を幽閉した。

以後、悠は彼女以外の人間と一度も会うことなく、パスワード付きのロックのかかった区画に閉じ込められている。

ちなみにパスワードの入力画面はホログラムウインドウのくせに、区画の出入り口は外見は木製の引き戸である。彼女が言うには力づくで破壊する事は悠には不可能らしいが。

彼女の異常性を悠が理解したのは、幽閉されてから間もなくの事だ。

悠に名前を付けた彼女は名詞、動詞、形容詞と脅威のスピードで悠の言語を習得し、その日の内にマスターし、その上それを僅か一年足らずでコミュニティに広めたという。

そして悠が使っていた言語には、言語そのものに力が宿っているらしい。その有用性により、永琳主導の下コミュニティの文化レベルは軒並み向上したと聞いた。

そこで悠はお役ごめんかと思いきや、それから永琳は頻繁に悠に会いに来た。

悠が持っている知識から、悠は永琳の属するコミュニティに比べると遙かに科学技術の進歩が遅れたコミュニティに属していた可能性が高いと判断されている。

だが、悠の知識の中には永琳でさえ仮説すら打ち立てられない、しかし確かに存在する法則が含まれていた。

おそらくは神（笑）によって流し込まれた情報の一部であろう。それを悠が自覚してしまわないように、永琳は何気ない会話の中でそれらの情報を取り出しているのだという。

ちなみに、悠が一度も外に出してもらえず永琳以外の人間に会えないのは、悠がこの次元外の異法則を内に秘めているためだ。

正しく扱う限りでは問題など起こらないが、接し方を間違えると世界が異次元の法則で塗り潰される危険性があると永琳は楽しそう

に評していた。

だからこそ、悠は殺害も排除もされないまま隔離という処分になったのであった。

だが、悠は知っている。

永琳は本物の天才だ。その知識と思考は常人の及ぶところではない。

故に世界は既知に溢れていた永琳にとって、悠の内には彼女を魅了するほどに大量の未知が眠っていた。

時々実験と称して携帯型荷電粒子銃で撃たれたり様々な薬物を飲まされた事もある。

もつともそれらが悠を害したことは一度たりとも無い。注射器の針でさえ悠に刺さることはなかった。

とはいえ、悠が能動的に行動する限りでは人間を超えた行動をする事は不可能らしい。

永琳のように宙に浮いたり靈力による強化や術を使うことは生涯不可能だと断言すらされた。

ただ、当初悠が化物扱いした者達の大半が身体能力は悠と変わらない人間であり、能力持ちは少数だとか。

この地やこの人間たちに悠が違和感を覚えたのは、異世界

悠の生まれた世界とは同次元上の並列世界であると永琳は推測している。だからではなく、このコミュニティには『穢れ』が少ないためらしい。

永琳曰く、『穢れ』とは物質や生命から永遠を奪い、寿命をもたらずモノらしい。

このコミュニティはその『穢れ』から逃げつづけているという。そのため現在の土地には穢れが少なく、おかげでこの地に住む者の寿命は長く食べ物も腐りにくい。

しかし、生存競争の上に誕生した人間という生き物が『穢れ』を持たない筈が無い。完全に『穢れ』が無い世界にでも移住しない限り、いずれ彼らは寿命を迎え、死ぬという運命から逃れられない。

そのことに関しては、アホらしいというのが悠の率直な感想だった。寿命を持たないと言う事は不変を意味する。不変であるとは、すなわちただ在るだけのモノに成り果てるということだ。

ただ存在するだけ。死なない代わりに生きてもいなくなる。変化し成長する事を失ってしまえば、生きる事の幸福をも失う。悠は生きたいと思いついに死にたくないと願う生き物だ。死んだも同然となる事で生き続けるという考えを受け入れられる筈が無い。

そして、そんな悠の考え方こそ永琳には理解できない。

当然だ。彼女も『穢れ』を減じ生命の在り方から逸脱した以上、生き方を共感することなどではしない。彼女はそのまま、『穢れ』を持つ者を見下しながら存在し続けるのだろう。

そんな彼女が悠と嬉々として会話するのは、悠が『穢れ』を周囲に与えないことも理由に挙げられる。

悠は変化を肯定する生き物だ。当然『穢れ』を内包しているはずなのだが、悠に老いる気配は全く無い。永琳にも納得のいく仮説が立てられない、悠が異質である証の一端である。

だが、悠の身体は他者による害を無効化し、老いる心配もなく、その上餓死することも無い（実験として栄養価0の食事を一年程出していったらしい）。そんな存在に生存競争の必要など無く、すなわち周囲に『穢れ』が発生する心配も無い。

結果、変化の無い環境にある悠が時の経過を意識するのは、いつの間にか永琳の外見が十代後半に成長していたことに気付いた時だった。

尋ねてみると、彼女と出会ってから優に二十年は経過していたらしい。驚いた悠に彼女が送ったのは、

「鈍感ね」

という辛辣極まりない一言だった。同時に初めて彼女の心底呆れた表情を見た。無論、嬉しくなどなかった。

あらためて与えられた部屋を見回す。

木に見える物質でできた部屋。木目は飾りで実際にはもつと丈夫らしい。室温は一定。明るさは十二段階で操作可能。

床に敷かれた布団一式。常に人肌ほどに温かい。熱が籠りすぎる事も無く、快眠を約束してくれる。

衣服を入れる箆筒。汚れない服が詰まっている。永琳がたまに中身を入れ替える。

水がめと桃を始めとする果物が載せられた机。水は尽きることなく、果物は傷んだためしが無い。

蓋付きのゴミ箱。底が無い。

運動器具。暇な時に使う。あまり筋肉は付かなかつた。体質らしい。

他に娯楽要素は無い。余計な知識を与えたくないのか永琳に却下された。

「……良くて檻の中の実験動物？」

「そこまで酷い扱いをした覚えは無いわ。退屈しないように暇を見つけてはこうして訪ねているもの」

素知らぬ顔で永琳が質問を否定する。悪意は無いと信じたいところだが、そもそも永琳の本心など見極めようがない。

が、信頼関係を築きたいならば自分から相手を信じるのが鉄則である。永琳が怪しい素振りを見せるのは疑われるよう誘導している場合だけだが、それ以外のときは基本信用する姿勢を崩さない。

「まあ、暇なのは慣れたけど……」

暇に苦しんだのは最初だけだった。強くならない代わりに弱体化しにくい体、時間間隔の麻痺する環境、加えて悠には記憶が無い。今より良い環境を知らない以上、何もしないことにさえ慣れれば特に不満は生まれない。

何より、終わらないものなど無いのだ。急がずともいつかは時の流れに翻弄される日々がやってくる。

ただ、不満があるとすれば

「生きている実感ってどんな感じだったかなあ」

「死が重いからこそ生きている事は尊い、だったかしら？」

「まあ、ね。存在の価値は失ってみないと分からない。だけど、だからこそ生きるとは尊い。失った事の無い僕が言うのはおかしいかもしれないけど、これは絶対のルールだと思うよ」

「それこそ愚かというものよ。失う前に価値を見出しているからこそ、失わずに済むように前もって行動できるものでしょうに」

こうしたすれ違いはしょっちゅうだ。永琳の言い分では価値に最初から気付かない内は下賤であるらしいのだが、悠から見ればそれは始終失うことに怯え続けているだけ。

手の中の物を落とさないようにする事と、失う事を受け入れて新たな物に手を伸ばす事。後戻りのきかない世界で停滞と前進の選択その正しさを定める事は出来ない。選択した者にとって、自らの選んだ道こそが正しい物となるのだから。

だが、

「だけど、このままじゃこの土地も『穢れ』てしまう、だっけ？」

「ええ。私達にも『穢れ』はある。これだけ人がいれば、足るを知ることの無い愚かな者もでる。彼らはより豊かである事を求めて『穢れ』を生む。かといって彼らを排除しようとするれば、そのせいで私達にまで『穢れ』が生じてしまう」

「だから『穢れ』の少ない者だけで『穢れ』の無い世界を目指す、と」

「ええ。幸い名家の者は皆『穢れ』が少ない。足るを知っているからね。でも他の権力を狙う者はその欲望により『穢れ』を生じている。連れて行くことは出来ないわ」

困ったように言う永琳の表情は言葉に反して穏やかだ。実際『穢れ』の無い世界を探しているのは他の名家で、彼女自身は専ら今を保つために尽力しているらしい。足るを知っているからこそ、現状に満足しているのだろう。

しかし、ほんの一瞬永琳の顔が曇った。彼女をして不安足らしめる事態があるらしい。

「まだ問題があるの？」

「……ええ。きっと誰にも解決できない問題がね」

ジト目で悠を見据える永琳からはありありとした不満が読み取れる。

外において、永琳の評価は『完璧』であるらしい。そんな彼女が悪感情を零すのは悠に対してだけだと自嘲混じりに言っていた事を思い出す。

「僕が悪いの？」

「別にそれが悪であるとは言わない。だけど、もし『穢れ』の無い世界が見つかったとして、あなたは一緒に来てくれるかしら」

「いや、行かない」

「でしょうね」

変化のうちに幸福を見出す悠にとって不変の世界に幽閉される事など死と同義だ。悠に身の心配をする必要が無い以上、永琳たちの

旅立ちは無遠の決別の時である。

「確かにあなたを無理矢理連れて行くことは出来ない。だけど私達の技術をあなたに理解されるわけにはいかない」

「……ちなみに、付いて行った場合は？」

「あなたの常識に合わせた文化レベルの区画で暮らしてもらおう。今とは比べ物にならない待遇を保障してあげる」

そう言う永琳の口調にはしかし説得しようという気概は籠っていない。最初から諦めているのだろう。もし彼女にそれが可能だったのなら、既に悠は趣旨を根本から変えられていたはずである。

当然の答えとして悠は静かに首を横に振り、永琳はこれ見よがしにため息をつく。

「いつそのまま押し倒した方がいいかしら」

「やめてくれ」

「……冗談よ」

不自然に間を空けて永琳が前言を撤回する。

だが、悠には彼女が半分以上本気であったように思えてならない。悠は永琳が言うところ堅物である。少なくとも貞操観念については譲れないところがあるのは間違いない。

一度でも流されてしまえば、気が付けば籍を入れられていたという未来が待っている。そうなれば、悠に浄土の地への永住を拒む事はできない。

「でも、幾つも縁談持ちかけられてうつとうしいのも事実なの」

「ああ、大変なんだ　　待つて、僕が存在って秘匿されてなかった？」

「ええ。ここには私しか入れないし、公的にはあの時の侵入者は追

放処分にされていることになっているわね」

結局、悠と関係が有ろうが無かろうが永琳に縁談が持ちかけられる事に変わりはないのである。

そのことについて尋ねてみると、彼女は男なら軒並み落とせそうな流し目で小さく微笑んで答えた。

「ああ。ここで恋人と密会しているって噂を流したから、縁談の数は大分減ったのよ」

悠はいつの間にか虫除けとして使われていたらしい。

それをまんざらでなく思ってしまう辺り、悠は自分で思っていた以上に彼女へかなり心を開いていたようだった。

なるほど、これなら求婚する男が多いのも頷けるといふものだ。

少なくとも彼女に本気で愛された男が生涯幸せである事は間違い無い。

もっとも、彼女が本気になれるほどの男は今だ存在しないようだが。

悠はおそらく他よりはマシ程度の扱いだろう。彼女が本気でアプローチをかけてきたならば、悠など既に陥落している。

「ちなみにここへ無断侵入して玉砕した人間は昨日で四十人目よ」  
「なにそれ怖い」

げに恐ろしきは男の嫉妬か、はたまた外からの侵入すら許さぬこの檻か。永琳がいなくなったら悠は星の終わりまでここに幽閉されたままかもしれない。

永琳を超える頭脳の持ち主など存在するわけが無いと悠は半ば確信している。その永琳が悠では自力で脱出できないと断じたのだ。これで外からの干渉も不可能となると、もはや脱出の糸口など無い。

そこでこちらの不安を察したのか、永琳は悠の頭をその温かな掌で撫で始めた。

「心配する必要は無いわ。悠はいつかここを出て行く。あなたにとつても、世界にとつても安全に」

「世界にとつても？」

「ええ。特定の条件下において、あなたは世界を滅ぼしうる。けどそれは条件が揃った時の話。間違った扱いをされない限り、あなたは影響力が凡人を超える事は無い」

永琳が言う以上はそうなのだろう。その特定の条件を永琳が正しく理解しているのであれば、今後その条件が揃う事は無いに等しい。彼女ならば既に対処を済ませているだろうし、彼女の計算を超える者など現れる筈が無いのだから。

悠は頭を撫でられる感触にこそばゆさを感じながら目を細める。

この地を去る、その時に想いをはせながら。

ちなみに、悠を幽閉するこの建物に侵入を試みた人間の三割は女性であったらしい。その事を聞いた悠が永琳に労わりの言葉をかけたところ、逆にひどく哀れまれたのは完全な余談である。

## 第四話 幼年期の終焉

カチ、カチ、カチ、カチ

硬質な物が打ち合わされるような音が響く部屋で、悠は壁に取り付けられた半球状の機械を眺めていた。

その機械は表面が透明であり、その内側では大小幾つもの金属板が縦横無尽に回転している。

音の出所である機械の名は時計<sup>とけい</sup>。永琳作の、悠の知る時計<sup>とけい</sup>に最も近い物であるらしい。

正直なところ音以外は違和感しか感じない。その音だって何故鳴るのか理解できない。そもそも時間という概念が必要とされないこの檻の中では時計など無用の長物だ。

この機械は悠が気まぐれで永琳に作って貰った物であったが、その気まぐれは思わぬ変化を悠にもたらした。

時計は時間を区切る。悠はこの時計によって時間の流れを意識できたのだ。

機械の縁に沿ってゆっくり走る桃色の光が円を描き、次いで光の円がまた端から徐々に消えていく。これが三回ほど繰り返された頃、永琳がやって来る。

また、永琳はこの時計から正確な時間を読み取ることが可能で、ある程度時間が経つと帰ってしまう。

いつの間にか時間が経ち、不意に永琳が来て帰っていく。そんな変化の無い生活に比べ、時間に区切られた日々は悠に生きている実感を与えていた。

時に追われ、立ち止まる事も許されず前に進み続ける。

始まりがあり、終わりがあり、その終わりからまた始まる。

そして、待ちわびるのも、一人ではなくなる喜びも、再び孤独に陥る不安と寂しさも、その全てが変化であり生きている証だ。

永琳には悠が何故そうやって自ら悩み苦しむ事を招くのか理解できないらしい。

だが、決して楽だけでは生きていけないのが人間だ。楽のみでは楽を楽と認識できなくなる。苦を識って初めて楽を識ることが出来る。そして苦楽在ってこそその人生だ。

悠はもう人間ではないが、精神の在り方は限りなく人間に近いと自称している。

だからこそ、時の流れを感じられないかつてになど戻りたくなどない、というのが悠の考えだ。

悠を殺すことは悠自身にも不可能だが、それ故にただ在るだけの在り方など悠にとっては死に等しい。いや、むしろ死よりも恐ろしく感じられる。

ただ、永琳達も無機物と同じになる事を望んでいるわけではないらしい。

永琳達は寿命をもたらす『穢れ』が無い世界で限りなく永遠に近い存在になりたいのであって、不変の存在になりたいわけではないのだ。

たとえ永琳達が『穢れ』の無い世界に行っても、永琳達の内にも『穢れ』は在る。それはたとえ希釈されてしまっても確かに存在しており、恐ろしくゆっくりとではあるが老化は進むらしい。完全な永遠など今はまだ作れないそうだ。

もつとも、完全な永遠は不変と同義。路傍の石と同じ在り方に賛同出来る永琳達は、悠には気が触れているようにしか思えない。

いや、むしろ

「まともじゃないからこそ技術を発展できた……？」

「……いきなりご挨拶ね」

悠の呟きにいつの間にか後ろに立っていた永琳が突っ込む。いき

なり失礼な事を言われたせいか、不機嫌気味だった。

「や、こんばんは。弁解の余地はありますか？」

「ええ、機会はあげましょう。それと、こんにちは」

いつもと異なり、外は昼であるらしい。時計を見ると、いつも永琳が来るタイミングとはかなりずれていた。

だが、用件を聞く前に弁明する必要がある。悠の肉体は無敵だが、心は容易く抉れるのだ。

「いや、永琳達は他とは隔絶した技術を持っているんでしょ？ 例えば妖怪対策の兵器が普通の人間の手に渡ったらどうなると思う？」  
「妖怪を全滅させた後、人間同士で滅ぼしあうんじゃないかしら」

『穢れ』が少ないためか数こそ少ないが、外には妖怪という人間の敵対者が存在するらしい。戦力的には大した事は無いらしいが、殺してしまえば『穢れ』が生まれる。

妖怪退治は罪人の仕事だが、それも軽くあしらう程度で殺しはしない。そこまで徹底しても、やはり『穢れ』が生まれてしまうのだという。

だが、他のコミュニティーに属する人間は違う。生を脅かす妖怪と殺し合い、時に人間同士ですら殺し合うのだ。その在り方に悠は共感できるものの、永琳達の目には余りに愚かな生き方をしているようにしか映らないらしい。

「だから、普通の人間は高い技術を持ってない。永琳達はその力を使わない特殊な在り方だからこそ技術を発展させられた。それは偶然じゃなくて必然……だったら面白いな、と」

「なるほどね。世界、あるいはそれに準ずる何かが自衛のために精神の段階に応じて技術の発展を抑制している。確かに面白い考え方

ね

「意味は無いけどね。どこまで考えても単なる妄想の中から出られないから」

事実である。事象がどんな意味を与えられようと、所詮こじつけに過ぎない。見る者によって変わるのが真実というものだ。

「……無駄に頭が回るようになったわね」

「や、永琳と話していたら誰でもそうなるよ」

実際、永琳と対等に会話したければ思考速度を上げるしかないのである。新たな知識を手に入れることは出来ないが、思考は経験で改善出来る。特に時計を貰ってから、何もしない時間を様々な考察に当てていたので悠の思考速度は高い。

ちなみに、無駄という永琳の言い方はもちろん嫌味である。悠を放置はできないが、賢しくなられるのも困るようだ。

「それで、いつもより早く来たのはどうして？」

「引越しの準備が終わったの」

引っ越し。それは『穢れ』が未だ存在しない地への移住計画の事だ。

その浄土を見つけた月夜見なる人物と、その親族または余程信頼の置ける者のみに移り住むことになる。

そして、それは同時に悠と永琳の永遠の決別を意味する。

ただでさえ少ない『穢れ』を失ってしまえば、永琳は今より更に変質するだろう。そうなればもはや二人の見解が一致する事はあるまい。むしろ、彼女が今まで悠に付き合っていたられた事の方が異常なのだ。

「で、別れの挨拶に来たの？」

「ええ。私達がいなくなつて人が自滅した後、残された技術を消し去つたらあなたを解放してあげる」

この地に残された人間は全滅する。それが永琳の未来予測である。悠が独り言を呟いていたのもこの事について考察していたためだ。この地に『穢れ』が蔓延すると、この地の人間は悠と似た在り方に变化する。その結果どうなるかなど、実物を知らない悠に予測することは不可能だ。そのため永琳の描いた未来図を確定事項とした上でその理由を考えてみたのだ。

外からこの地の民が滅ぼされるのは考え難い。なぜならこの地の民の技術は『穢れ』を持つ人間も妖怪も圧倒するほどのものであるという。ならば滅亡の原因は外ではなく内に在る。

一つは寿命の短縮による自然的な滅亡。もしこれが正しいとすると、それは悠が解放された時には既に『穢れ』を持つ人間が滅亡している事を意味する。さらに、人間が絶滅はその恐怖より生まれた妖怪の消滅をも意味する。

しかし、意思疎通の出来る存在がない世界というのはつまらない。よつて、悠はもう一つ理由を考え出した。

それが内乱。この地の民同士の間による自滅である。

『穢れ』を持つ人間は同族同士でも殺し合う。ならばこの地に『穢れ』が蔓延したとき同じ様になる可能性がある。

内乱による勝者なき結末。もしそうなれば人間も妖怪も絶滅しない内に悠は外に出られる。悠にとっては都合のいい終わり方だ。他を巻き込まずにこの地の民だけが静かに滅ぶのを期待する。

「じゃ、さようなら」

「うん。ばいばい」

あつさりとした別れの挨拶。だが、永琳が考え実行した以上これが最適な終わり方なのだろう。

彼女からしてみれば悠を放置することに対して危機感その他諸々を抱くことになるだろうし、悠もこれまで自分に付き合ってくれた永琳に思うところが無いわけでは無い。

だが、二人の生き方は重ならない。悠が生きることを諦めるか永琳が『穢れ』に染まらない限り、二人の接触は温和なもの成りはしないだろう。

二度と会わないことを互いに願う以上、後腐れ無くあつさり別れるのが一番だ。

永琳は振り返ることなく部屋を出て行き、悠は再び時計に向かい合う。

無数の思索を繰り返しながら、悠は時計の光が円を描いては消えるのを見届けた。

カッチ カッチ カッチ カッチ

永琳との接触が無くなり、変化を失った悠の世界は時間という概念を喪失する。

時計の円環を見届けるのは昼と夜の数を数える行為と大差ない。

しかも基準を他の誰かと共有していない以上、時間という概念は悠にとってまるで意味を成さない。

当然だ。もはや悠の世界に変化するものは残されておらず、外から定期的な変化が訪れるわけでもないのだから。

悠の世界で時間が再び意味を持ったのは、彼が再び生の実感を得

たのは、憶えられなくなるまで数えるつもりだった光の輪が九回消え去り、光が30度ほどの弧を描いた時の事だった。

#### 第四話 幼年期の終焉（後書き）

ノリを最優先にして推敲は最低限。

こつこつ書き方は楽だけど、最終的な出来はイマイチになりそうな予感。

## 第五話 未知との遭遇（前書き）

この路線でいいのか頭の中で組んだプロットを振り返り中。もしかしたら改訂の可能性在り。

## 第五話 未知との遭遇

悠の世界の崩壊は、一秒にも満たない間に崩壊した。

視界を埋め尽くした白光に目が眩む。

視界を潰されると同時に悠は虚空に落ちた浮遊感に包まれ、次いで背を強かに打ち付けられた。

「~~~~~っ!？」

砂のこすれる音を認識した次の瞬間、鈍痛に身悶える。

悠は確かに今まで怪我をした事など無いが、痛覚が全く無いわけでもない。条件は理解できないが、とにかく悠は一定以上のダメージを無効化、または大幅に軽減できる。

しかし、悠の記憶においてこの時の痛みはそれまでで最大のものだった。

元々痛みとは慣れる事が無いものなのだが、それでも痛みを経験することには意味はある。

強い痛みを知っているために弱い痛みに耐える事が出来る場合がある。経験を持たないために僅かな痛みにも耐えられない事もある。

悠の場合は、まさに後者の典型的な例だといえる。

今まで感じたことの無い痛みに悶え、左側面を下に寝転がった悠の目が混乱の中徐々にピントを合わせ始め 視界に収めた光景に悠は痛みすら忘れた。

そこには、何も残されていなかったのだ。

立ち上がって周囲を見回す。

部屋もその内に在った筈の物も全て失われ、代わりに残されたの

は視界いっぱい白く粗い砂。

あまりにも突然の変化に、真上にあつた陽が遙か彼方の山に差し掛かるまで悠はその場に立ち尽くした。

青い空と傾いた太陽。辛うじてできた影により急な傾斜に取り囲まれていることが分かり、ここがすり鉢状のくぼ地である事を悟る。悠が立っていたのはくぼ地の中央、最も深い場所だった。

人が自滅した後、残された技術を消し去つたら

「……おお」

不意に永琳の言葉がリフレインし、ようやく現状を理解する。

おそらく悠はこの地に残された文明の消去に巻き込まれたのだ。いや、位置から察するに悠の居た檻を中心に何らかの破壊を行なったのだろう。

現に、かつての文明の名残など何一つとして残っていない。

たまたまなのかそれとも狙つての事なのか、身に纏う衣類も元々この世界に出現した時に身につけていた物だった。

ただ、靴は閉じ込められる際に脱いでいたため、現在の悠は素足である。

見渡す限り砂しか無いため、埋もれてしまったのだとすれば靴を探す事など徒労でしかあるまい。

更に言えば、足裏の床が残っていない事から、ただ触れているだけでは無事に済まないらしい。

自らの不可解さを改めて思い知りながら、悠はかすんで見える遠い山々の中で最も色が濃い すなわち最も近いであろう山を目標に歩き始めた。

空が僅かに色を変化させたためだ。おそらくそれは夕焼けの前兆。つまり、陽が沈むまでそれほど長くない。

陽が暮れてしまえば山が見えなくなる。辛うじて輪郭をつかめたとしても、目標の山の見分けがつかなくなるのは嫌だった。

当てがある訳でもないのだが、悠はどうでもいい事に拘る性分だったらしい。

自嘲と共に小さく鼻を鳴らして前に進む。長く憧れた外の世界を。

傾斜を上りきり、地面が白以外の色を持ち始め、植物を見かけ始めるまで丸二日。

森に踏み込んでから山を見失い、雨に打たれて濡れ鼠となるまでおそらくは三日ほど。

それから先の日数は数えていない。

わざわざ乾かすために進むのを止めることが億劫になるほど頻繁に雨が降り、歩けなくなるほどの地震が二度ほど発生し、さらには喋る獣に出くわした辺りでそんな事はどうでもよくなったのだ。

「ああ、ついてないついてない」

「そこまで嫌そうに言わなくても」

「そう思っなら尻尾を離しておくれよう」

「やだ」

「ああ、本当についてないー」

三本ある尾の中央の一本を握られてうなだれているのは白く短い毛に身を包んだ悠よりやや小柄な四足の獣。

「掴んでいるのは当然悠。」

睡眠を取らなくても良い事に気付いた悠が夜の森をさまよっていたところを、いきなりこの獣が真上から落ちてきたのだ。

生暖かい物に頭を包まれて悲鳴を上げた悠は、恐慌状態のまま転んでしまう。

そこで今度は獣のほうに驚いたらしい。噛み砕く筈だった人間の

頭蓋に牙が通らないどころか顎に加えた力が何の反発もなく消失したのだから当然だろう。

そこで悠の倒れこんだ方向が運悪く獣にとって背に当たる方向だった。虚を突かれた獣はそのまま悠と共にぬかるんだ地に転がり、更に狂乱した悠に抱きつかれる事となる。

そこから更に獣にとって理解不可能な事が起きた。拘束から逃れべく身をよじり暴れようとしたのだが、身動きが取れない。獣の胸に回された腕にも、押し付けられた身体にも力が加えられなかったのだ。

足から地に力を加え、その反作用によって地を駆けていた獣にとってこれは未知の現象だ。なにせ、力を加えても一切の手ごたえが無く、ただ触れるだけにとどまってしまっているのだから。

もちろん獣は悠だけではなく接触しているぬかるんだ土にも力を加えていた。しかし結局は同じだ。身体を捻り悠の腕から逃れようとしても、土との反作用で生まれた力は悠の腕に加えた時点で無となるのだから。

結局獣は抵抗を許されないまま拘束され、至近から悠の叫び声を散々聞かされてしまう。悠がやや冷静になってしがみ付くのを止める頃には、獣はもう抵抗を諦めていた。

逆に獣にとつて幸いだったのは、悠が非力であった事だろう。人並みの力はあるのだが、逆に言えばそれは人並みでしかない。獣から見れば取るに足りないものだ。

そのおかげで獣も悠に振り回されることはなく、動けない獣に悠がしがみ付きわめき散らすのみの結果となった。

そしてやや冷静になった悠が自らの異常性を思い出し獣の尾を掴んで決着は着く。獣は嫌がり暴れようとするも尾を掴む手に抵抗できず、悠と同じ言葉で許しを請い始める。

そこで今度は悠が驚いた。獣が話す事も、そもそもそこまでの知能を持っているという事も、悠からすれば異常にしか感じない。ついでに言えば、その声色が永琳よりやや高くあどけないものであつ

たのが更に違和感を煽る。

そもそも悠の言葉を広げたのは永琳だ。彼女もわざわざ人を喰う獣に言葉を教えたりしないだろう。

聞けば獣は人間に祀られた神に住んでいた地を追われたのだと言う。そして人間を喰い殺す内、いつしか人間の言葉を話せるようになったらしい。

尤も、言葉を理解できても知恵までは付かなかったようだ。聞けば何度も人間を襲っては神に追われ、いつしか人間が足を踏み入れない森の奥地に追いやられたのだとか。

そして、今夜久々に見た人間を狩ろうとして、現在に至るのである。

「まさか食べられない人間がいるなんて思わなかった」

「むしろ僕には君が神とやらに殺されずに済んでる事が驚きなんだけど」

神、というのは色々なカタチをしているそうだが、その全てがとも怖い力を持っている存在だそうなの。

「神ってどんな風に怖いのか？」

「くわ〜っ!!! って感じ？」

尻尾を握られたまま横になって背を丸めている獣が大きく吼えて擬音語で表現した。

同時に暗い森の中で光る赤い瞳と獣臭い口の匂いが異様に恐怖心を煽る。理性で大丈夫だと言い聞かせても、本能が怯えてしまうのだ。怖いものは怖い。至言である。

「もうあなたは襲わないから逃がしておくれよう」

「んー……………やだ」

「ひどい」

獣がうなだれる。だが悠にとっては久しぶりの会話相手なのだ。永琳と別れたのがどれほど前なのか分からないが、何にせよ随分昔である事は分かる。解放するなら使えるだけ使ってからにするべきだ。

「用済みになったら食べようかな」  
「私を食べるの!？」

驚いた獣は跳ね起きて逃げようと踏ん張る。だが、それは無意味な抵抗だ。尾を掴む手に力が伝わらずに消滅するため、暴れるだけ疲労するのみである。

悠の手に噛み付こうとする獣を空いた片手で牽制し、その間に獣の利用法を考える。

少なくとも食用には出来ない。そもそも悠では獣を殺すまでに多大な労力がかかるし、生肉を食べるなど論外だ。刃物と火を調達できたら別の話だが。

「あはは、食べない食べない」  
「ほんと?」  
「うん、ホント」

悠の言葉を信じた獣は再びうずくまる。実際、今のところ悠に飲食の必要は発生していない。食欲が無いわけではないのだが、それが強くなった事はない。雨水に口を湿らせるのも、満足感こそ得られるものの必要性は感じていなかった。

自分が生きているといえるのか今一自信が持てなくなってきたが、自分はそういう生き物なのだと自身に言い聞かせる。きつと生きるために必要なものが人間とは違うのだ、と。

「ねえ」

「なにー？」

「お願い聞いてくれるなら、この手を離してあげる」

「おねがい？」

「うん。人間が住んでいるところまで案内してくれない？」

獣はそのお願いを聞いて、唸りながら掴まれていない尾を振り始める。

が、すぐに尾は力を失いだらりと垂れ下がった。

「むりー」

「どうして？」

「人間のことなんて知らないよう」

森に住むようになって長いのか、それとも相当頭が弱いのか。どちらにせよこの獣から大した情報は得られそうに無い事だけは分かった。

「じゃあ、他に人間の言葉を使う生き物はこの森にいる？」

「知らない。だって全部エサだもん」

獣がこの森における食物連鎖の頂点のようだ。ならば滅多に人間が来ないこの地に人語を解する存在は期待できない。

そう結論付けると悠の興味はこの獣を追いやった神なる存在に移る。

少なくとも神（笑）とは別物だろう。あんなモノがわざわざ人間を助けるなど考えられない。完全であるものは自己完結しており自分以外を必要としないのだ。

となると、神が人間を助けたのならば神も人間を必要とする存在

である可能性が高い。

人間と親しくなれば襲われる可能性も低くなるだろうし、そもそも悠に神の力が通じない可能性も十分にある。

無謀を冒さないよう慎重になる必要はあるだろうが、この好奇心を殺す必要までではない。

「よし、神に会いに行こう！」

「え？」

ぼかんとする獣を余所に、悠は木々の葉の合間から見える白い月を見上げ、今後どう行動するかを考える。

まず人間を見つける事から始め、神についての情報を集めなければならぬだろう。

しゃがみこんだ体勢から立ち上がり、歩き出そうとして

「キャンー!!」

尾を引つ張られた獣が悲鳴を上げた。当然ながら悠に獣を引きずるだけの力は無いため悠の足も止まらざるを得ない。

「何で引っぱるのー!?!」

「え？ 付いて来てくれないの？」

「私はいやー!」

じたばたする獣にため息をつく。神が怖いのか悠から解放されたのか。獣の単純さからおそらくは後者。

獣が足をつく度に泥が散ってくる。ぬかるんだ土の上に転がったため既に泥だらけの身ではあるが、それでも更に泥を跳ねられるのはいただけない。仕方なく獣を交易品にするプランを諦める。

だが、せつかく捕らえたのだ。何かに役立てないと勿体無い。

「じゃあ、水場に案内してくれたら手を離してあげる」

「うう……ほんとにほんと？」

「ホントだよ。泥だらけで気持ち悪いからね。水で洗いたいんだ」

「水浴び私もするー」

余程の考え無しなのか、既に獣の意識は水浴びをする事に向いていた。白かった毛は泥だらけになっており確かに汚い。気にしていないのかと思っていたのだが、獣にとっても泥にまみれたままなのは不快らしい。

獣の先導で森の中を歩き出す。歩調が合わずに幾度となく獣の尾を引っばってしまう事になったのはご愛嬌というものだろう。

「ねえ」

「ング……なにー？」

大小様々な石に囲まれた川で衣類をすすぎ、裸族となった悠が大きな石の上で川魚を食べている獣に呼びかける。獣は咀嚼していた最後の魚を飲み込んで悠に振り向いた。

「僕の名前は悠。君の名前は？」

「ないよー」

あっけらかんと、前足を突き出し伸びをしながら獣が答える。自分以外の全ては敵がエサだったのだろう。もしくは同族はいても人語は通じないのかもしれない。

「じゃあ、僕が名前を付けてもいい？」

「もらえるならもらおう」

足を折り曲げ伏せた獣が暢気そうな声を上げた。だが尾が勢いよく振られている辺り、嬉しいのかもしれない。

素敵な名前を付けてあげたい、と獣を眺める事数秒。

「ましろ」

するりと口から言葉が紡がれた。

「ましろ？」

「うん。真っ白だからましろ」

「ましろ、まっしろ、ましろ」

水浴びの影響で毛が寝てしまい、細くなった尾がペタン、ぺたんと石の上で跳ねる。気に入ってくれたようだ。

本当は濡れた白い毛並みが月の光に照らされて神秘的だったからなのだが、何となくそれを言うのは気恥ずかしかった。

つい頬を搔いて小川の方を向く。

川の幅は悠を縦に十五人分ぐらい。雨の後だから川幅が増しているのだろうが、ましろ曰くここよりまだ大きい川があるらしい。

だが、石に囲まれて木々の無いこの川を上流に歩いていけば、とありえず目の前にある小山を登ることは出来るだろう。

ましろの行動範囲に人間が暮らしていないとなると、山を一つ二つ越えねば人間には出会えまい。

目標があり、道が出来れば行動に迷いも無くなるのが道理だ。大きく空気を吸い込んで息を溜め、気合を入れる。

「ましろ」

「んー、なにー？」

濡れた衣類を身に着けながら名前を呼ぶと、伏せたまま尾だけを動かしていたましろがのんびりとした声を上げる。

声だけを聞けば幼げな女性というイメージだろうか。人間の子供とどちらが頭が悪いのか比べてみたくなる。人間のコミュニケーションを見つけたら子供と遊んでみるのもいいかもしれない。

そんなことを思いながら、ましろの乗っている石に近付いてその横に寝そべった。

ましろももう今夜は狩りをする気が無いのか、伏せた状態から身を横たえて背を丸める。

共に眠る者がいるのがとても楽しい事を、悠はこの日初めて知った。

**第五話 未知との遭遇（後書き）**

次回、あのキャラが意外な形で登場する……？

第六話 運命との邂逅（前書き）

おまけ付き。ただし質は保証しない。

## 第六話 運命との邂逅

どこまでも無垢なつづらな瞳。

愛くるしい事極まりない容姿。

大きく開かれた目から推測される感情は関心であろうか。

初めて目にするその存在にどうしようもなく自分が惹かれていることを自覚する。

この存在の下にいたい。そんな想いが急速に肥大する。

その時、悠は運命と出会った。

ましろと別れ、川べりを歩き出してから目的を果たすまでに越えた山の数は二十を下らない。

四つ目の山を踏破したところで麓に村を見つけるも、そこに住む人間の文化に悠は衝撃を受けた。

稚拙な田園と乱雑に植えられた稲の苗。

肌が痒くなりそうな布で出来た簡素な服を着た人々。

草で出来た屋根に入口らしき穴が開いた住処。

永琳のいたコミュニティが他とは文化レベルに開きがあることは聞かされていたが、ここまでとなると比べる事すらおこがましい。

呆然とする悠を余所に、村の人々は突如現れた異端者への警戒を頭にする。

女子供は視界から失せ、代わりに粗末な作りの槍や錆びの浮いた青い剣を持つ男達が悠の前に並ぶ。

彼らは武器こそ向けてはこないが、その態度からは強い警戒と恐れを感じ取れた。

武装した人間にどう声をかけていいものか途方に暮れる悠と、獣避けの低い柵を乗り越えて入ってきた余所者が何の行動も起こさない事に焦れる男達。

その緊張状態は、赤い服を着た老人が男達の後ろから現れた事で破られる。

適度に距離を置いたまま老人と幾つかのやり取りをする内に、悠はある程度状況を理解した。

老人はこの村の長老であり、この国においては染めた衣を纏う事が身分の高い者である事を意味するらしい。

悠の服は空色のTシャツと黒のスラックス。確かにこの外見ではこの村 いや、この村を傘下にする国の内において異端である事は疑いようが無い。

見た事も無い染色を施された服を着、しかし共の一人も連れずに入口ではなく柵を超えて侵入して来る無作法者をどう判断してよいか男達も困っていたらしい。

とりあえず悠は異国から来た旅の身であると自己紹介しておいた。この村に害を与える気は無いと言う事を理解してもらい、警戒が薄れたところでこの国の祀る神について聞いてみる。

すると、この国の王こそが神であり、その神は幾多もの神々を束ねる存在だという。

この村からやや離れた祠にも王に従えられた神が宿っており、供

物さえ捧げれば人間を守ってくれるが一度怒ると様々な祟りをもたらすのだそう。

ただ、長老ですら王について詳しいことは知っておらず、これ以上の情報はより中央に近い村に行かないと手に入らないようだ。

とりあえずここより地位の高い村への道を聞き、丁寧に礼と騒がせた謝罪をして今度はきちんと入口から出て行く。

当然ながらこの村を守る神とやりに接触はしない。物理的な攻撃や植物毒などは恐れる必要は無いのだが、カタチの無い祟りが悠に影響を及ぼせるかどうか未知数であるからだ。

それから回った村の数は二桁に上る。村の門番をしている人間に尋ねれば大体の用が済んだので村の内まで入る必要は無く、祟り神も祀られている場所さえ避ければ向こうから接触してくる事もなかった。

途中、森や山などで巨大な獣に襲われる事はあったが、その全てが悠に触れた段階で停止してしまい、目や鼻を殴りつけることでたやすく追い払えた。

そして雪の季節を越え、険しい山々を越えたところでようやく悠は求めていた機会を手に入れた。

王の住まう領域に人間がみだりに入ることは許されず、しかし春と収穫後の秋に神官に率いられた村人が供物を捧げるためにこの時だけ禁域に足を踏み入れる。

王は村に住む神官にすら姿を見せる事は無く、この時期に神の使役である大きな蛙に案内させて社に供物を届けさせるのだという。

だから、悠は冬の間からこの機会を狙っていた。

禁域に立ち入る以上、王の目は村人達に向いている筈である。

だから時期を同じくして村人達とは逆方向から禁域に入り、儀式を盗み見て王の姿を見定める。

配下の神々が祟りを起こすのは確かだが、王自身が祟りを起こしたという話は聞いていない。

たとえ見つかったとしても、王が強大な力を持つのであれば、迂遠な方法である祟りではなくもつと直接的な攻撃を仕掛けてくるだろう。

永琳の手によって悠に霊力による攻撃や術は効かない事が実証されている。一度攻撃を無力化して見せた上で臣従の意を示せば弁明の余地程度は貰えるだろう。

もとより神を知ることが悠の目的だ。知識を満足するまで集めたならば、もうこの国に用はない。この作戦の成否に関わらず、作戦実行後この国から逃げ出せばいいのだ。

そんな考えは、事態が都合の良すぎる展開を迎えた事で御破算となる。

悠が社と思しき建物の下に辿り着いたのは儀式の翌日。大きな蔵のような建物は社と呼ぶには違和感が大きすぎたが、禁域にそれらしい建物は他に無い。

既に村人は残っておらず、蔵の前には藁で編まれた大きな筵があるばかり。おそらくそこに載せられていたであろう供物は社の中に収められた後のようだ。

社の周りの森に潜んでいた悠は今度は社の裏に回る。

そこには酒が入っているであろう桶の横に木杓子を握って寝こけている少女の姿が在った。

驚いたのはその十歳ほどの女兒のような容姿とこの地の人間にはあり得ない金の髪。ではなく、明らかにこの国の技術では作れないようなその衣装にである。

白く裾の長い服の上からこの国では作れない筈の青い衣を纏っている。さらには近くに布製らしい大きなライトブラウンの帽子が鎮

座していた。

幸いになことに、悠は素足で少女の周囲は柔らかそうな草が広がっている。足音を殺すのは簡単だった。

少女のに近付いて更に驚く。彼女の服も、地に置いてある帽子も、村人の服のような格子状の網目が見えないのだ。

おそらく、至近距離でようやく見えるほど細い繊維で編まれた布によってこれらは作られている。それを可能とするのは永琳達のように発達した技術が必要だろう。

そのとき、帽子に変化が起きた。

つば広の四角い帽子、その上縁両端にある球い物体が動く。

それは目であった。

目蓋を開いたそこに現れたのは、無垢でつぶらな一對の瞳。

それと目を合わせた瞬間、悠の心にとつともない衝撃が走った。

これを運命と言わずして何があるう。

呆然とする帽子。感動のあまりに我を忘れた悠。運命の出会いはこうして成った。

その一瞬であったようにもとても永い間であったようにも思えるような邂逅の時間。

その終わりは、

「貴様、何者だ」

背後からかけられた、怒りを押し殺した冷たく低い声によってもたらされる。

振り向いた先に立っていたのは先程の少女。

だが、その身に纏う雰囲気は尋常なものではない。

溢れ出る絶対的な自信。堂々と立つその威容。

神。

全ての人間を睥睨するモノ。

彼女はまさしくそれであった。

「答える。貴様は何だ」

貫禄、とはこういうものを指すのだろう。

その声には、聞いた者を有無を言わさず従わせる絶対者としての威厳が含まれていた。

「この国の外より来た、一介の旅の者にございます」

「私の言葉を理解していないようだな。お前は何だと聞いているの」

「！」

戦慄する。この少女はただ見ただけで悠を人間では無いと看破したのだ。

「……かつては人間であったかもしれないモノ、人間ではないナニ力である事しか、私自身も知りません」

「ふん。それで、その人外がこの諏訪の王に何をしようとしていた」

問いただすその言葉を理解するのにかかった時間は数秒。悠は少女と帽子を結ぶ線上から立ち退き、こちらを睨みつけている帽子へと土下座する。

「まさか、こちらがこの国の王であらせられるモレヤ様とは……。申し訳ありません。あまりの愛くるしさに頭を下げる事も忘れて御尊顔に見入っております」

「……違う。この国の王は私だ。その帽子は私の一部。それとモレヤではなく洩矢だ」

少女は呆れたようにため息をつき、帽子を拾って頭の上に載せ、流れるように自然な動作で悠を指差し

光が爆ぜた。

視界が光に塗り潰され、眩んだ目でおぼろげながら捉えたのは洩矢神が目を見開いて驚いている姿。

双方何が起こったのか分からないまま立ち尽くし、先に己を取り戻したのは洩矢神の方だった。

背後に飛び退きながら周囲に幾つもの巨大な光弾を浮かべ射出する。その全てが悠を捉え 触れた瞬間消滅した。

次いで洩矢神が拳を突き出した形で悠の目の前に現れる。いや、おそらく高速で殴りかかり、拳の威力を無にされたのだ。

事ここに至り、悠もようやく自分が攻撃されているのだと気付く。反動も何も無く己の肉体にかけられた力が消失するという現象が如何程の衝撃を与えたのか、洩矢神は停止したまま呆然としていた。とつさに悠はその腕を掴む。洩矢神は離れようともがいたりもう一方の手で悠の顔面に拳を突き入れて抵抗するのだが、その一切が無意味に終わる。

「お前は、一体何なんだ……!？」

「いや、ホントに何なんだろう」

顔を引きつらせた洩矢神に思わず素の言葉で本音を洩らす。だが、自分がどういった存在であるのかなど悠自身にも分からないのだからしょうがない。

抵抗の無意味を悟ったか洩矢神が大人しくなり、悠も交戦の意志が無いことを示すために両手を挙げて後ろに下がる。

「お前は、何をしにここに来た？」

ぼつりと洩矢神が呟く。その言葉には初めの時ほど力が籠っ

ない。疑問がふと漏れた、といったところだろうか。

「神とは何なのか知りたい。僕の目的はそれだけです」  
「……………は？」

洩矢神はその答えに虚を突かれたように口を丸くし 悠の腰を  
掴むと強く揺さぶり始めた。

「いやいやいやいや、それだけ!？」  
「うん」

本当にそれだけなのだ。他意は無い。

それが伝わったのか、揺さぶる手を離し洩矢神は若干恨めしげに  
悠を見る。

「それで、何を聞きたいの？」

「えっと、洩矢様は」

「諏訪子だ」

「何をって……………え？」

洩矢神の名を呼んだ直後、ふてくされたようにそっぽを向きなが  
ら彼女は悠の言葉を断つ。

「洩矢諏訪子。私の名前だ。私に勝つたのに様付けなんて、嫌味の  
積り？」

「いや、勝ってません。僕、攻撃できないですから」

「……………は？ え、ええ!？」

今度こそパニックに陥った洩矢神、もとい諏訪子。口をパクパク  
開閉しながら自分の手とこちらの顔を交互に見る。

「なんでも、『最弱の無敵』だそうです」

「は……？」

「攻撃が効かないから無敵、だけど攻撃できないから最弱。昔そう知り合いに言われました」

「……私、騙された？」

諏訪子が苦そうな顔をする。

だが別に悠は騙していない。ただ諏訪子が勝手に勘違いしただけだ。

「それで、諏訪子は普段何をしているの？」

「色々だ。私はミシヤグジ達を束ねる神だから出来る事はいっぱいある。雨を降らせたり、妖怪を退治したり、安産を約束したり、豊作をもたらしたり、他の神と戦ったり、罪を犯した人間を祟ったり」

ミシヤグジというのは諏訪子、つまり諏訪の王が使役する祟り神達の呼び名だ。それぞれが国のあちこちで祀られているが、それを束ねる諏訪子なら確かにさまざまな事が出来るだろう。

「じゃあ、何で神は人間を助けるんです？」

「そりゃ、供物を捧げさせる為さ。人間は神に生かされている。なら神にその感謝を示すのも当たり前前だろう？」

その言葉にふと違和感を抱く。永琳がその事に言及していなかったからだ。彼女の話からは、神に敬意こそ持っているものの、人間は自分の力だけでも生きていけるように感じられた。

まあ、聞いても不機嫌にさせるだけだろうから言わないが。

そこで、ふと諏訪子がTシャツの脇を引っ張っているのに気がついた。

「……名前」

「え？」

「あなたの名前は？」

そこで、ようやく自分が名乗っていないことを思い出す。  
右手を胸に、頭を下げて一礼する。

「悠。それが僕の名前です」

それを聞いた諏訪子はゆう、ユウ……と小さく呟いた後、小さく  
頷き、勝気な笑みを向けてくる。

「じゃあ、ユウ。あんた今日から私の部下ね」

「へ？」

その話がどこから湧いて出てきたのか理解できない。  
だがこちらの困惑に気付かないのか無視しているのか、諏訪子は  
腰に手を当ててふんぞり返る。

「私が直接姿を見せるとどうしても舐められるし、ミシヤグジを夢  
枕に立たせても難しい事は伝えられないからね。昔みたいに人間を  
生贄にささげられても正直扱いに困るし」

「いや、何で僕が諏訪子の部下になるの？」

用が済んだらこの国から逃げ出す事を決めていた悠にはまさに青  
天の霹靂だ。

思わず聞き返したところ、諏訪子は目を鋭くした。

「嫌なの？」

言外に断ることを許さない、という意志が込められた語気の強い言葉だった。

少しだけ、その申し出を受けた場合の事を考えてみる。

追われる様にして国を出るよりは充分マシな選択肢である事は間違いない。傍にいる事でより神という存在の実情を掴む事も出来るだろう。

そこまで考えて、それが悠にとってどれ程魅力的な提案であるかを理解する。

既に視線は諏訪子の頭の上に固定されていた。

「時々その帽子に触らせてくれるなら」

「別にいいよ。でも、あげないから」

そつと諏訪子 の頭に載せられた帽子をそつと撫でる。

触れられて閉じた帽子の目がまんざらでも無さそうに見えたのは、諏訪子の表情を見る限り間違いは無いだろう。

この日、悠に初めての家族が出来た。



OMAKE 初期プロットのまま進めていたら

禁域の社。その裏にある木々に囲まれた空き地。

その光景はあまりにも直視し難いものだった。

倒れ伏す金髪の少女。なぜか獣耳のカチューシャを着けており、その傍に狐色に焦げた帽子が転がっている。

それらの横で、三頭身の奇妙なヒトガタが自身より大きな桶を抱え上げて中身を飲んでいた。

白いセーターのような上着。

紫のスカートの内から伸びているのは捧のような足。

手足は丸く、頭には獣耳。

その生物は空になった桶を放り投げて雄たけびを上げる。

「イエス、ウィー、キャン！」

意味が分からない。

分からないのだが、アレがどういう存在であるのかをおぼろげながら悠は識っていた。

あれはこの世界で生まれたモノではない。

アレは異質にして異端。

世界の外から侵蝕し、影響を及ぼしたものを汚染する、世界意志すら撥ね退ける化物。

アレがモレヤ神の筈が無い。

倒れ伏した年端のいかぬ少女こそがモレヤ神なのか、それともモレヤ神といつの間にか摩り替わっていたのか。

どちらにせよ、アレを放置するという選択肢だけは無い。

「で、そこな少年。いつまで隠れている積もりかしらにゃいが、あたしにはお見通しだぜ」

さらに、こちらを向いた生物が球体状の手から人差し指(らしい物)を生やし、クイクイと挑発する。

ここまでされたなら、隠れたままでいる訳にもいかない。

木々の合間から社裏の草むらに歩み出す。

勝算なんてお目出度い物はない。あるのはあのような生物の前に倒れ伏し、なおも尊厳を踏みにじられた少女への憐憫だ。

「ふむ……60点。悪くはにゃいが美形ってわけでもにゃい。少年、出直して来い」

「何でお前なんかダメ出しされなきゃいけないんだ」

怒りのボルテージが上がる。ついでにドスの聞いた声が出た。元より容赦などする気はなかったが、どうやら敵はより残虐な戦いを求めていたようだ。

「だが、美形だからモテる訳じゃない。素地は悪くないし。少年、ネコミミ着けてみない？ 似合ってたら仲間にし・て・や・る・ぜ？」

「断る」

戯言には耳を貸さず、十歩で接敵できる距離まで詰める。人間が敵うとは思えない奇怪な獣に襲われた時も、目や口内という生き物共通の弱点は存在した。肘や膝関節があるようには見えないが、一応は人型だ。人間と同じ弱点を持っていると信じたい。

「む、もはや聞く耳を完全にシャットダウン。だが少年。勝負の前に、せめて名乗りぐらい上げようぜ？」

「悠。ただのヒトデナシだ」

半身に身構えながら端的に答え、倒れ伏した少女を視界に入れてその生を確認する。

とうか、ここまで近付いてようやく分かったのだが少女は小さく嗚咽を漏らしていた。余程アレに負けて猫耳を着けられたのがショックだったらしい。

負けたらあなる、というのが否応にも理解させられた。

「よかるう！ 我が名はネコアルク！ キャット27祖が一匹にしてこのグレートキャッツシュラインの主なり！！ いざ、にくきゅく、ファイッ！」

ブサイク猫　　もといネコアルクが叫ぶと同時、悠は横に跳び退いた。

次の瞬間、悠がいた場所を化け猫が頭や腕、胴体などをばらばらにしてジェット噴射で加速しながら通り過ぎていく。

「……………は？」

そして後方ではらばらになった身体が再び元通りに組み上がり、振り向いた生物は膜に映った映像が揺れるように体を波打たせ始める。

訳が分からない。ただ分かるのは、目の前の存在が自分より遙かに理不尽な存在である事だけだ。

そして、対応が遅れた。

予想外だったのは、目の前の色モノが頭脳戦を得意としていたことだ。あまりにも理解不能かつ変態的な動きは悠から足を動かす事を忘れさせ

「チャンス！ オプティックブラスト！！」

次の瞬間、怪猫の目から放たれた光線に飲み込まれた。

諏訪王国を統べる王にしてミシヤグジを統べる土着神の頂点、モレヤ神こと洩矢諏訪子は目の前の光景に忘我した。

やって来た少年が人間ではない事は明らかだった。

なぜなら、人間は全て諏訪子を畏怖し、崇める存在である。それ

が諏訪子を畏れない時点でそれはもはや人間の範疇から逸脱している。

だが、理解不能の異常識存在であるあの生物が自らを一撃で撃ち負かした怪光線を浴び、その上で立っている少年は一体何なのか。決まっている。少年が自分で言った通りの“人でなし”だ。

ネコと称する事自体が猫への侮辱であるような気味の悪い生き物は、その後も予想など出来る筈のない理不尽な攻撃を繰り返す。

ある時は足を引っ込め服の中から火を噴いて飛び

ある時は空中で進行方向から九十度真横に方向転換し

ある時は七人に分裂し

そして今、少年を取り囲むように地面から現れた石の輪の内から巨大な怪猫が上半身を突き出し少年を高く弾き飛ばした。

しかし、墜落し倒れ伏した少年は歯を食いしばって立ち上がる。分らない。

何故立ち上がることが出来るのか。

何故あのような化物に再び挑めるのか。

何故あんな理不尽に晒されてなお心が折れずにいられるのか。

少年の前にいた筈の（自称）ネコ精霊は少年の真後ろに瞬間移動し、振り向いた少年をその短い腕で遙か上空に殴り飛ばす。

やめてくれ。

気がつけば祈っていた。

もう立つな。

少年は健闘した。神である諏訪子を一撃で降した怪物の猛攻を受けてなお生きているのだから。

もう充分だろう。

たとえアレの前に屈する事がどれ程辛く苦しいものであるとしても、生きている事の方が遥かに大切なものの筈だ。

だが、少年は再び立ち上がる。

その時、確かに諏訪子と彼の視線は交錯した。

「悪い。仇は討てそうに無い」

それは小さい自嘲の言葉。

だが、それはいかなる崇拜の言葉よりも諏訪子の胸を満たした。少年は後方に火を噴きながら加速する生物の体当たりを受けて体をくの字に曲げ

しかし、倒れこむ事を否定し踏みとどまる。

そして水月に突き刺さった自称ネコの頭を掴み、その頭でピクピク動く弱点ネコノミミに噛り付いた。

この次の瞬間、悲鳴が諏訪王国の大地を物理的に揺るがす事になる。

その正体不明の波動は高天原にまで届き、太陽の光が本来の明る

さを取り戻したのは四つの夜を越えた後だったという逸話すら残っている。

こうして、運命の出会いが終わる。

この戦いに勝者はいない。

諏訪子が目を覚ました時、目にしたのは倒れ伏す悠と薙ぎ倒された木々、そして倒壊した自らの住処であった。

この後、悠は諏訪子に拾われ部下になるも、諏訪王国はネコ精霊を名乗る妖怪に幾度も崩壊の憂き目に遭わされたという。  
どんどはれ。

## 第六話 運命との邂逅（後書き）

もともとOMAKEの方のプロットで書いていたのですが、流石にアレを東方に入れたら幻想郷が壊滅しかねないので没に。でもプロット改訂前の方が書いていて面白かったのは否めない。

第七話 東風谷秘譚（前書き）

今回OMAKEはありません。

## 第七話 東風谷秘譚

悠が諏訪子の下で暮らすようになって、諏訪王国は転機を迎えた。まずは農耕。

ミシャグジを引き連れた悠が洩矢神の使いとして諏訪子と人間の架け橋となり、諏訪子の要望を細かに伝えられるようになった後、豊穰の年が続いた。

この原因は、諏訪子がより多くの酒を求めたからだ。

酒の原料となるのは蒸して発酵させた米である。

当然、酒を増やそうとすれば食料として最低限の量よりも遙かに多くの米が必要になる。

悠の要請により諏訪子がミシャグジ達に命じ、人間の祈りに応じてミシャグジ達が神徳を授け、豊作を約束する。

大量の米から大量の酒が造られ、それで諏訪子がミシャグジ達と宴会をする。

そして気分を良くしたミシャグジ達は人間へ加護を与える事に積極的になり、更に豊作の年が続き、より多くの酒が造られるという好循環が生まれたのだ。

さらに食料の確保と崇りの軽減により人口が増えた。

増えた人口は労働力の増加につながり、それは更なる作物の生産力を増加させる。

それを諏訪子に説き伏せた悠はミシャグジの中でも子を授ける事を可能とさせるモノ達による人口増加計画を実行した。

これにより人間の安産祈願が増え、諏訪子達の信仰は更に強まることになる。

さらに、人間の生活にゆとりが生まれる事は文化の発展にも繋がる。

それは同時に酒の質の向上にも貢献し、諏訪子をより満足させる結果となった。

だが、豊かになればなるほど生まれる影も大きくなる。  
すなわち 戦争。

諏訪王国内では、悠の知恵と文化の向上によって備蓄技術が急激に進歩する。具体的にいうと高床式倉庫の発明だ。

それに加えて悠の指示による貧しい村への貸付が行なわれ、国内の餓死者は激減した。

となると、問題となるのが他の国々である。

この時代、食料が確保できなければ他の村から奪う事は当たり前だった。

当然ながら諏訪王国は周囲からの侵略を度々受け、諏訪子達のような神も他国の神や祖霊達と戦う頻度が増えた。

これにより軍事力の増強が進み、遂に従来の青銅より遥かに強力な鉄製の武器が開発される。

鉄の武器は権力の象徴となり、諏訪子に捧げられた剣は神々さえも容易く切り伏せる神器となった。

この過程によりミシヤグジ達と諏訪子は軍神としての側面も強まり、ただでさえ厄介な祟り神はもはや土着神の中でも最恐の存在へと上り詰める。

その結果自ら諏訪王国へと降る村、国が増え、それは国の規模の拡大と信仰の更なる増大という結果を生んだ。

無論神霊の負担も増える事になるが、もはや崇拜となった信仰はそれでもなお余裕を生むほどの力を諏訪子達にもたらず事となる。

だが、王国の変化は諏訪子に大きな影響を与えていた。

「あー……、うー……」

「何してるんだ、諏訪子？」

社のそばに造られた小屋。その中で土鍋をかき混ぜながら、悠は板間で転がる諏訪子に声をかける。

「見て分からない？」

「……ごめん、分からない」

五秒ほどで思考を放棄。返事をするに諏訪子是不機嫌そうに頬を膨らませる。

「暇なんだよ、私は」

「ならば少しは家事を覚えろよ」

冬を迎えて周辺の国との戦も一段落した今、諏訪子がやらなければならぬ事は無い。

元は蛙を象った神である諏訪子は冬になると不活性化する。当然冬に行なわれる神事など無い。

「冬眠しなくなっただけマシじゃん。それに家事は下僕の仕事」

冬眠、と言うが仮死状態になって川の中にいる訳ではない。

ミシャグジとはカタチ無きモノへの畏怖より生まれた存在。その多くは依り代となった石や樹木の特性を帯びている。

諏訪子はこれらの中で冬でも活動に支障の無い無機物系のミシヤグジに国を任せ、春まで惰眠を貪っていたのである。

それが今ではこうして冬の間は社から悠の家に移り住み、一日の三分の一は起きて活動するようになっていた。これは悠が風呂を焚いているのが理由の大部分を占めているだろう。

ちなみに二人が出会ってから初めて秋が来る頃、悠は慣れない敬語を止め、諏訪子は悠を下僕扱いするようになっていた。悠は対等である存在のいなかった諏訪子の曲がりなりな親しみ方だと捉えている。

「そんなんじや婿が来るまで何年かかるか」

「下僕が婿に來ないから私がこうして嫁に來てるんだよ」

「嫁なら家事の一つでもこなして見せる」

「む、そつちだつて一人じや火も熾せないくせに」

突っかかってくる諏訪子を片手で制する。法則は今だ分からないが、今の所悠の防御が崩される恐れは無い。それと悠は火を熾せない訳ではなく、火打石の扱いが村人より下手なだけである。

ちなみに悠は自称永遠の二十歳であり、諏訪子は心身ともに十歳程度だ。彼女に欲情したら人として大切な何かが崩れる。

尤も、長生きする人間が少ないためか、悠にとつての普通よりも村人達は早婚早産を貴んでいる。村人達の間では十五歳程で子を生ずるのが常識である。

だから諏訪子からしてみれば悠が自分に惹かれない方がおかしいのだが、悠にとつて諏訪子は生意気な幼子に扱いが決定していた。

あり得ないと鼻で笑った日の超局地的大地震は百年経った今なお語り継がれていたりする。

それ以降意地になつた諏訪子は度々風呂への乱入を始めとした挑発行為に出るのだが、誘惑が成功した試しは無い。その度に罰としてコメカミを拳で挟むのだが懲りる様子は無さそうだ。

尤も、悠が欲情しない事には諏訪子の性知識不足も大きく影響している。所詮は体外受精が基本の蛙である。雄からのアピールがないと性行為に至れないらしい。

そこで更に不機嫌になった諏訪子は恋愛祈願をする村人で遊び始めた。諏訪子に選ばれた人間は紆余曲折を経て結ばれる。大なり小なりの山場を越えて結ばれた彼らは非常に仲睦まじく、彼らの恋愛劇は彼女をそれなりに満足させている。

この秋にも農家の三男坊と権力者の娘の身分を越えた恋が成就している。ただ、祈りを叶える対象は身体的特徴が諏訪子に似ている娘のみとかなり偏っているが。

背丈が倍はありそうな青年の隣で微笑む少女の顔を思い出しながら木杓子で土鍋の汁を含み

「まったく、せめてお腹の子ぐらいは認知してよ」

「ブフツ!? ゲホツ、ゲホツ」

咽る。ついでに涙が出た。

滲む視界の中で諏訪子はしてやったりと言わんばかりの笑みを浮かべ、腹の辺りを撫でていた。

「待て、僕はいつどこで間違えた……!?!」

「えー、昨日の事も覚えてないの?」

けるける もとい、けらけら笑う諏訪子を余所に記憶を探る。

ちなみに前日の諏訪子は食事と風呂以外ほぼ寝ていた。間違いを犯した可能性は絶無である。

そして悠の下した結論は

「うそ、だよな?」

「ホントだよ?」

首を傾げた諏訪子に一蹴された。そのにやついた表情はしかしまぎれもなく本気である。

だが、悠にも間違いを犯した記憶など無い。そもそも悠が女性に手を出さない最大の理由は、自身が世界にとって異物であるためだ。一歩間違えれば世界を消しかねないような存在の子など、何を引き起こすか永琳にすら分からないだろう。

「ほら、この間婚儀に顔出したじゃん」

「……酔った覚えは無いぞ？」

この間とは、諏訪子が縁結びをした夫婦の婚儀が行なわれた秋の事である。諏訪子が人間の前に姿を現すなど悠と出会ってから初めてのことだった。

王が直々に婚礼を取り仕切った事とその婚儀は最終的に周囲の村を巻き込んだ大宴会となった。青年の引き攣った顔と少女が涙を流して諏訪子に感謝していたのが印象に残っている。

ちなみに、悠が酒に酔った事は無い。酔いとは酒中のエチルアルコールで脳が麻痺した状態を指すのだが、少なくとも自覚症状が出た事は無く、件の席でも悠は酔い潰れた諏訪子を横抱きにして連れ帰った筈である。断じて手を出してなどいない。

「実はね、あれって私達の婚儀だったんだよ」

「……………は？」

高速稼働させていた思考がその爆弾発言でクラッシュする。悠に出来たのは何とか喉から声を絞り出すことだけだ。

「あの二人の婚儀はもう終わってさ、安産の御利益あげる代わりに一芝居打ってもらったんだ。豊穰の祭りのついでに宴を開いて大

騒ぎしたってわけ」

「……」

開いた口が塞がらない。つまり、諏訪子は外堀から埋めにかかったのである。

確かに元々悠は近い村にしか顔を出さない。そこからの伝達は村人がやってくれるからである。

だから、周囲の村が結託して嘘を吐けば悠が真相に気付く可能性はかなり低い。それが祟りの元締めからの命令なら当然従うに決まっている。

ちなみに現在二重の堀は存在しないが、村を囲う柵の外には空堀が敷かれているので堀という概念は存在している。

「……だけど、それと子供とどう繋がってるんだ？」

「そりゃ、人間が信じたからだよ。私とあんたの子が春に生まれるって言つといたから」

そう言つと諏訪子は服の裾を捲り上げる。下着はこの国に存在しないので、彼女の鳩尾から下の全てが悠の目の前に晒される。

元々幼児体型ではあったが、気をつけて見ると腹が少々大きくなった気がしないでもない。が、通常では妊娠三ヶ月程度で外見は変化しないのでやはり分らない。

「もういい。とりあえず諏訪子に命が宿った事は信じる」

「そう？」

笑みを零しながら服を直す諏訪子に、鍋の火を小さくしてから向き直る。

今まで考えないようにはしていたが、そこまで好かれていたという事実が熱くなった。

理性を総動員して無理矢理冷静を装い、恥ずかしくて顔を背けたくなる衝動に耐える。

元々、好き嫌いに分けるなら諏訪子の事は好きなのだ。今更初々しく恋人をやれるとは思っていないが、夫婦として暮らす事も吝かではない。

ただ一つ疑問が残る。それは諏訪子 いや、神と人間との関わりについてだ。

「なあ、どうして人間が信じると子供が生まれるんだ？」

その問いに、諏訪子が腹を愛しげに撫でながらそつと目を閉じる。

「悠」

その口から紡がれた慈しみに溢れた声が胸を打つ。

神だ。

初めて会った時と方向性はまるで違っけれど、人を惹きつけ自ずから従わせる神がそこにいた。

「私は、ようやく分かった。神が人を生かしているんじゃない。神が人に生かされているんだ」

その言葉には、量る事など不可能な人間への慈愛が込められている。

神の奇跡すら打ち消す悠にも抗えぬほどの神々しさを、彼女は纏っていた。

「人の祈りが私を成す。人の想いが奇跡を創る。そして私達が人を支える。人と共にある為に、私達は生きている」

もはや初めて会った時の傲慢な面影などそこには無い。

「それを識ったときやっと分かったんだ。私の本当の力、人の奉げた祈りの力を」

静かに笑みを浮かべる彼女を、ただ美しいと感じた。

「だから、人の信じる心を以って私は命を生む。私の望む人としての性質と、人の望む神としての性質を併せ持つ、人と神の子を」

そして私と悠の子だ　そう言って笑う諏訪子は、目を灼かれるかと思うほどに眩しかった。

ふう、と小さな息を吐き、先程までの神々しさが嘘の様に消え去る。

そこにいたのは、悠よりも大人な小さい少女。

「さて、ご飯にしようか」

「　　ああ」

雰囲気を切り替えた諏訪子に促されるまま、木で出来た椀に鍋の中身をよそう。

そこには、いつも通りの彼女がいた。

いつの間にか変わっていた彼女がいた。

「というわけで、今夜は優しくしてね」

「一緒に寝るだけな」

「おおっ、言ってみるもんだね。一步前進っ」

基より人とは異なる生まれ方をした二人。人とは異なる手段で子を生じたとして何の問題があるうか。

何のことは無い。これはただ、神が己の生き方を決めただけの話である。

## 第七話 東風谷秘譚（後書き）

プロットの変更に伴い元々練っていたオリジナルの話を流用しました。おかげでしばらくは楽だろうけど、話の着地点は中々決まらないでしょう。要望があればOMAKEを復活させるかも、です。

## 第八話 とある夜、娘と共に

花弥<sup>かや</sup>。

それが、悠と諏訪子の娘の名だ。

諏訪子に祝福された夫婦の村に建てられたさして大きくはないものの豪華な屋敷。それが花弥の産まれた家であり、現在の悠達の住処である。

この地における子供の生存率は低い。

少なくとも、悠の知識において子供とは産まれ難く死に易い存在だった。

染色体異常による影響は早期流産に始まり、そもそも受精、着床が出来ない場合や早産、先天性疾患など多岐に渡る。例え無事に産まれて来ても、抵抗力も弱い幼児は軽い体調の崩れから重い病を患うことが多く、やはり死亡率は高い。それをカバーできるだけの技術が無いこの地では、子供が一年生き延びるだけでも充分祝い事なのだ。

そういう意味では、信仰により正常に産まれて来る事を約束された花弥はとても恵まれていた。

しかも、祟り神の元締めの子である。流行り病などに罹る恐れも無い。

それでも、諏訪子は神なのだ。ミシャグジを統べ人間を律する存在であるため人のカタチを持つが、人ではない。産んでしまうまでは本能に任せてどうにかなるが、彼女と悠だけで赤子を育てられる筈も無し。二人は村への移住を余儀なくされる。

元より人間としての性質を備えた子だ。人間の中で育つのが道理であるし、そもそも子供は村全体で協力して育てられるのがこの地の常識である。

幸いにして近くの村の一つが諏訪子を迎え入れるのに相應しい環境を持つていた。

そう、諏訪子の祝福によって結ばれた夫婦の住む村である。

この村の民は諏訪子の姿を知っており、また権力者の子であるその夫婦の嫁は諏訪子に恩がある。協力を取り付ける事は容易かつた。畏れ多い存在である諏訪子に平然と接する事の出来ない村人が多いため、管理が簡単な大き過ぎない程度の家が建てられ、村の女衆の介助により無事女兒が産出。屋根の建材であった茅から人を守るものとして『かや』、さらに生命を象徴する花という字を入れて花弥と名付けられた（命名：諏訪子）。

神の子の誕生ともなれば国を挙げての大騒ぎとなり、その隙に乗じようとした国外の輩が更に力を増したミシャグジ達に一蹴されるなどの小事件が相次ぐものの大事に至る事はなかった。

次いで木々の葉が瑞々しく茂る頃に件の夫婦に男児が生まれ、諏訪子によって縁ゆかりと名付けられる。

当初は花弥に対する村人達の態度はひどく畏まったものであったが、それでは人と共に歩むという諏訪子の目的の一つが達成できなくなる。まず縁の母親である少女と諏訪子が、そして縁の父親である青年と悠が打ち解ける事から始め、何とか物心付くまでに花弥は村の一員として受け入れられた。

それでも、神としての性質を持つ花弥に畏敬の念が向けられるのは避けられない。そこで諏訪子と最も親しい関係にある縁の生家を洩矢神を祀る一族と定め、縁の母である少女を祝はらいに任じた。

祝とは屠る者を指す。すなわち生贄である獣を殺す不浄の役であり、同時に洩矢神に侍る神職はの事である。つまり今までの悠の役目を少女に譲り、悠は生き神として祀られる側の存在となったのだ。尤も、悠が祀られる意味は無いが。

これによって縁の家の格を上げ、縁を敬われる側の存在に仕立て上げる事で花弥と縁を対等に付き合える間柄とした。事実上の婚約のような物だが、子を生す事が責ばれるこの時勢に恋愛という観念

は大きな意味を持たない。共に在る事を自然とする環境におけば結ばれる事を本人達も嫌がる事は無いだろう、というのが悠と諏訪子の考えであった。

己を取り巻く環境に負けず、生まれ持った神の力に決して驕る事無く、花弥は人と共に暮らし人のためにその力を振るった。

恩には恩を持って返せ

大切なものを守るために在れ

まだ言葉を覚える以前から悠が繰り返し語りかけ続けた言葉は、花弥の根幹を成す信条と成る。

良かれと思う事を実行する彼女を、悠は必要であれば叱り、上手くいった時にはこれでもかというほど褒めて育てた。

弟のように育った縁の手を引いて遊びに行き、村の一員として働き、諏訪子に力を扱う術を習う日々。

これは、そんな彼女の送る日常的一幕。

花弥が生まれて五度目の草木が芽吹く季節のある夜の出来事だった。

悠は満天の星空を眺め、残雪を踏みしめながら山道を歩む。

諏訪子の治めるこの国においても妖怪は出現する。

当然だろう。妖怪は人の恐怖より生まれ、人の想念によって形を得る。噂が一人歩きした結果として生まれる事もあれば人に害を為した獣が妖怪化する事もあるのだ。妖怪の発生は防げない。

とはいえ発生した妖怪は退治しなければならぬ。起源の通りに妖怪は人に害を為す。祀られる神がこれを退治しなければ信仰が揺らぎ神霊は弱体化してしまう。

だが、逆にこの機会を持って神の力を人に見せ付ければどうなるか。人は信仰を深め、結果として神霊は強化する。

無論、大抵の妖怪はミシャグジの祟りに恐れをなして逃げ出すが、稀に耐えて居座る輩も生まれない訳ではない。

その時こそが悠の出番だ。

当然悠に攻撃能力など皆無だ。諏訪子の加護を受けた鉄剣も悠が振るう限りにおいては只の鈍らに過ぎなくなる。

しかし、悠への攻撃は無意味となる。

人の描いたカタチ通りの異能を持つ妖怪であっても例外ではない。悠に襲い掛かり、掴まれてしまえばその時点で妖怪の敗北は決定する。

後は身動きを取れなくなった妖怪をその地に住まうミシャグジが喰らって決着だ。

こうしてミシャグジの恐ろしさと悠の絶対性を人に知らしめ、結果として悠と同格と扱われる諏訪子の格も上がる。

この日に退治された妖怪は黒い巨狼であった。

如何に大きいといえど獣は獣。開かれた口をミシャグジに裂かれ、絶叫を上げて絶命した。死体はミシャグジの依り代たる古木の養分として処理済みである。

「そつえば、ましろも妖怪だったんだな」

今更ながらに三尾の白獣の正体に思い当たり、彼女との出会いを懐かしむ。

あの出会いがあったからこそ悠は諏訪子と巡り会えた。

尤も、彼女の名を聞くことがあるとすれば相応の被害が出た後の事となるだろう。

彼女が今も森の中でひっそりと暮らしている事を祈りながら歩いてると、ふと強く風が吹いた。

「とーさまー！」

聞きなれた舌足らずの声が澄んだ寒空に響き渡る。

次いで、胸元に幼女が出現した。

夜闇の中でなお映える漆黒の髪を腰ほどまで伸ばした花弥の姿は白い着物に青い袴。

愛娘にして次代の祝、花弥である。

「こら、危ないから体当たりはしないように」

「父様ならだいじょーぶ！」

悪戯そうに笑う花弥の頭を軽くはたく。

悠に対する攻撃に込められた力は消滅する。

つまり、今のように全速で空を飛びながら体当たりをしても、反動すら消し去られるために安全といえは安全なのだ。

だが、悠への干渉が出来ない訳でもない。

今のように抱き上げていれば相応の重みを感じるし、手を繋げばきちんと感触が伝わってくる。

初めて出会った日に悠が諏訪子に揺さぶられたように、何らかの条件を満たせば悠に干渉する事は可能だ。

もし偶然条件が揃ってしまえば、両者共に大怪我をする恐れもある。

無論そんな理屈を数え六つの花弥に理解できるわけも無く、満面の笑みを浮かべる花弥の顔にはどこか誇らしさすら感じられた。

「それで、諏訪子は？」

「母様？ ねてるよ？」

幾ら悠の活躍で防御力が上がっても、諏訪子の蛙という本質が消えるわけではない。寒くなるとよく寝るのは彼女の特性だ。

「花弥も寝てたんじゃないのか？」

「んー、おきちゃった」

もう日が暮れて久しい。諏訪子はいうに及ばず、花弥もいつもは熟睡している筈の時間帯だ。

しかし、たまに夜中に目を覚ます日も無いわけではない。よくお昼寝をした日は睡眠が足りているので夜中に起きて眠れなくなることもあるのだ。

大方、眠れないところに悠が帰ってきたのを察して家を（文字通り）飛び出してきたのだろう。

ちなみに花弥は両親の居場所を何となく把握できる。別に勘などではない。二人との特別な絆を持って生まれてきたためだ。

抱き上げている腕の中でもぞもぞ動く花弥を横抱きにする。

そこで彼女は悠の右肩に頭を預け、無邪気に微笑んだ。

諏訪子の指導の成果である。諏訪子自身が悠を籠絡できた事は無いが、それでも娘にされると愛おしさが込み上げてくる。

頬をそつと触れ合わせると、花弥の顔が緩んだ。

「寒くない？」

「父様があつたかいからへーき」

それは悠が特別に温かい格好をしているためではない。そもそも悠は寒いと感じる事自体が無いので、遠出をする日は軽装を好む。むしろ花弥の服の方が特別なのだ。

海を越えて渡ってきたという布を元に作られた服は諏訪子の特別な加護を受けている。冬は温かく夏は涼しく、さらにある程度の攻撃を弾いてしまう程の防御力すら宿した、もはや神器と言っても過言では無い一品である。

「花弥。今日はいっぱい遊んだの？」

「うっん。母様としゅぎよー」

花弥は神であると同時に人間だ。神力を持つてはいるが自在に使えるわけではない。

そのため、諏訪子は特定の奇跡を起こすための秘術をこの一年ほど花弥と共に試行錯誤している。

分かったのは花弥が水の属性に特化している事と、諏訪子が土、金、水の三属性を備えている事である。

中でも、雪解けの季節と秋の収穫後は農作物の被害を考えずに水の術を試す事が出来る好機なのだ。

「今日はどんな事ができた？」

「えっと、水がぐるぐるーってなった！」

右手を回して誇らしげな笑顔を見せる花弥を見て、ふと昨年秋の惨事が脳裏をよぎった。

水の竜巻によって諏訪子が宙に舞い上げられた事件は鮮明に憶えている。諏訪子は自分の事よりも巻き上げられた蛙の事で怒っていたが。

「怒られなかった？」

「どうして？ ほめてくれたよ？」  
「そっか、よく頑張ったな」

笑いかけてから花弥の額に口付ける。

諏訪子が上手くいったと判断したのなら大丈夫だろう。

これなら当初の目標である雨を降らせる奇跡が使える日が来るのも案外近いのかもしれない。

頬をニヤつかせていると、不意に耳を引っ張られる。

「んー」

「てい」

左腕と体で花弥の体を支え、離れた右手で唇を突き出してくる娘の頭をはたく。

「むー」

むくれる花弥を再び両手で抱き直し、小さくため息を吐いた。

「母様だけずるいー」

「いや、諏訪子にもやってないだろ」

少なくとも花弥の前でやったことは無い。

そもそも唇でのキスなど、婚儀以前に諏訪子に無理矢理されたくらいのものだ。

キスという行為とその意味を諏訪子に教えたのは悠なので自業自得ではあったが。

「そういうのは夫婦がするの」

「じゃあ、父様とめおとになる！」

「ダメ」  
「ぷー」

可愛らしく頬を膨らませる花弥。

生活に余裕が生まれたためか、昔と比べて村の人間は情緒豊かになつている。花弥が甘えん坊なのも環境に恵まれたためだ。両親共に娘に甘いのも充分な理由だが。

しかし、近親婚は別に禁じられてはいない物であるが、悠の倫理観的には禁忌なのだ。

また、悠に子を生す気が無い以上、寿命を持つ花弥にとつてもそれは不幸な結末にしかない。

ついでに、そんな事になったら諏訪子が拗ねる。これ以上無いくらいに拗ねる。諏訪王国終焉の危機に発展する事請け合いだ。

「……じゃあ、ほっぺ」  
「ん」

若干むくれる花弥の頬にキスを落とし、腕の中で体を起こした花弥が悠の頬にキスをする。

諏訪子が眠りがちになる秋の末から雪解けの時期までは、花弥は悠の方に懐いている。それ以外の季節では精神年齢が近くよく遊んでくれる諏訪子の方に懐いているが。

何にせよ、まだまだ子供だという事だ。孫が出来る日は少々遠そうである。

遠い未来、諏訪子は花弥の子孫に王の座を譲り、影ながら王国を助ける存在になるだろう。

そして、いつの日かその助けすら必要でなくなる日が来るかもしれない。

その時、悠と諏訪子はどうしているだろうか。

「父様？」

「……何でもないよ」

心配そうに声をかけてくる花弥から白い月へ顔を逸らす。

きつと、変わらない。

他愛無い事で笑ったり、時々喧嘩したりしながら二人で家族として過ごすのだろう。そう、今と同じ様に。

戯れに最も明るい星へ願いをかける。

どうか、その幸せを悠自身の手で壊す日が来ないように、と。

なお、その翌日花弥に嫉妬した諏訪子が拗ねてしまい、どちらが娘だか分からない気分させられたのは完全な余談である。

第八話 とある夜、娘と共に（後書き）

特に要望は無かったのでOMAKEは無し。  
次回、遂にあの人物が……？

## 第九話 勃発！ 諏訪大戦

それは、思い返せば瞬く間であったように思われる。

花弥と縁が結ばれ、花弥が正式に祝となつてから季節が一巡りした頃に一児が出生。花弥に負けず劣らずの黒髪を持つ女兒であった。その娘が結婚と共に祝を継いだ時、悠と諏訪子は村を出て再び社に戻る事を決める。社に戻った二人の気分は孫が尋ねてくるのを待つおじいちゃんとおばあちゃん。孫は諏訪子よりも成熟していたが、花弥が逝つたのは更に祝が世代交代した頃の事だ。享年五十三。人の中では充分過ぎるほどの長生きであった。

これまでを振り返ると、祝となる強い力を持つ者は皆黒髪の際立つ女兒であつた。黒は水を象徴する色である。何らかの関わりがあるのだろう。

そして次代の祝と目される女兒が生まれた頃から、国境の辺りが騒がしくなつた。

大国『大和』の侵攻である。

強い力を持つ神霊を数多く従えて攻め入る大和の軍勢を前に周囲の国は全て併呑される結果となる。

高天原の神々曰く、国譲りに反対する者達への実力行使というのが名目ではあつた。しかしこの辺りはミシヤグジ信仰が強く、大国主命の支配下に無かつたためにその宣言は見当違いはなほだしいものだ。それでも戦前に一方的とはいえ宣戦布告を行なうなど礼を示す姿勢を見せたのは評価されるべきであつたのだろう。

しかし、諏訪王国を下すには至らない。

不意打ちじみた侵攻も、服従させられた民や神霊を捨て駒扱いにした強攻策も、人の噂を利用した謀略紛いも、その一切が通用しなかった。

他の国と同様の扱いで攻め入って来た第一次侵攻は、境の民に大きな犠牲を生みながらも大和の神霊をミシヤグジたちが駆逐した事によつて撤退した。

奴隷扱いである服従させられた人や神霊を囚にした作戦も、本命である高天原の神霊が諏訪子に圧倒的な敗北をした事で失敗に終わる。

もはや大地を司るまでになった諏訪子は数多くの鉄の輪を創造し、鈍器として投擲する事で一方的な蹂躪を可能にしたのだ。

ちなみに威力としては鉄塊の方が高いのだが、命中力と投擲の速度を優先とした結果鉄を輪状にして飛ばしたのだとか。昔に比べて諏訪子は賢くなっていた。

そして謀略。とは言つても稚拙な物で、単に大和が諏訪王国より優れているという話を商人が広めようとしただけに過ぎなかった。畏れもあるが、恩に恩で返すという思想の伝播によつて諏訪子への信仰はさらに強固なものとなっている。その程度で揺らぐ筈も無い。

そして今、八坂なる大和の軍神が諏訪子と戦闘中である。

共を連れず単騎で攻め入ってきた八坂は遙か高い空から社へ急襲。高らかに口上を述べるや否や、社を風で圧壊させた。

傍にあった悠の家も倒壊し、のんびり昔話に花を咲かせていた諏訪子と共に悠は建材の下敷きとなる。

別に戦の作法など存在しないために卑怯云々言つつもりなど無いが、流石にいきなり住処を潰されれば怒りの一つも湧くというもの。諏訪子は家の残骸を跳ね飛ばして空へ舞い、宙に浮く八坂へと神力を球状の砲弾として放出する。

そこから先を悠は正確に理解していない。

諏訪子が呼び出したミシャグジ達が祟りを引き起こした……筈なのだが八坂に効いた様子は無い。背中に負った円形の注連縄と胸元の鈍い金属板　おそらくは鏡　のどちらか、あるいは両方が防いでいるのだろうか。悠に對抗手段は存在しない。

八坂という神霊は諏訪子と渡り合うほどの実力を見せつけている。ミシャグジ達は祟り以外の手出しをしようとしていない。おそらくは諏訪子の指示だろう。直接攻撃に参加させるよりも祟る事の方が有用と判断を下したのかもしれない。

一方、八坂は諏訪子と距離を取って飛びまわりながら力の塊を撃ち出している。最初は地上に突っ立ったままの悠にも攻撃を仕掛けてきたのだが、あいにく悠には攻撃は効かないし攻撃される事も無い。巨大な柱を投げつけてくるも効果が無いと悟るやこちらを完全に無視して諏訪子との激戦に集中している。

しかし、一対一の戦いでありながらその戦いの被害は甚大の一言に尽きた。既に社の在った場所は流れ弾によって拡張された湖に呑まれている。その勢いはとどまる事を知らず、今なお湖に数多の水柱を上げ続けていた。この戦闘が終わる頃には湖の深さが激変しているだろう。

「あれ、諏訪子様の剣は？」

「ああ、ここ」

荒ぶる二柱から離れた高台で戦闘を眺めている悠は、ここまで連れて来てくれた現代の祝に諏訪子から預かった鉄剣を見せる。それは赤茶けた錆びに覆われて所々欠けていた。

「剣も鉄の輪も、八坂の持ってきた蔓でボロボロにされたよ」

「……」

絶句する祝の少女。無理も無い。一見健闘しているように見えるが、諏訪子はその力を封じられているのだ。

おそらく悠より祝の方が諏訪子の力をより深く理解しているだろう。ならば今まで絶対の存在だと思っていた諏訪子の力を制した八坂は彼女にとつてどれ程恐ろしい存在であろうか。

また、はつきり言つて能力の相性が悪い。八坂は風を使い空での戦いを有利に進め、対する諏訪子は自らの力を存分に振るえない。地を操つたところで空を舞う相手を捉える事は難しいのだ。

自らの不利は諏訪子自身も悟っているのだろう。

それでも諦めないのはこの地の民への愛着ゆえだ。先程から戦闘の舞台を湖の上に留めているのも人に被害を出さないためである。

祝は戦に向く力を持たず、ミシャグジは崇る事で手一杯。加えて諏訪子と対を成す神である筈の悠は戦闘能力皆無。諏訪子の手助けが出来る存在はここにはいない。

自らの無能さに齒噛みする。悠は己の内なる力を外に出す事は出来ないし、例え出来たとしても許されない。

悠の内側に眠るのは存在定義の根本から異質な理だ。悠という力夕チを象るソレは、ほんの僅かでも悠の外側へ侵蝕すれば世界はおろかあらゆる概念、時間軸、多重次元をも飲み込みかねない脅威であるという永琳の言葉が思い起こされる。

故に、悠は人や神、妖怪が行なうような内から外へ力を放出する術を学ぶわけにはいかなかった。

悠が扱つてよい力とは、徹頭徹尾外で発生、運用される物でなければならぬ。弓矢のように物理法則に従い効果を発する物であれば問題ないが、外界の力を取り込んでそれを再び外に出すような術式を扱うなど論外である。

諏訪子に託された剣を強く握り締める。

もし、この剣の内側に力が宿っていたら。それは、人々の祈りより生まれた信仰の力だ。未だ加工されない無垢なる祈りに神器たる剣が断ち切るといふ性質を与えたとしたら、それは悠の内か

ら生まれたものではない力だ。運用したところで世界を侵す危険は無い。

尤も、それだけの力があつたとしても、それを悠に使えるかどうかを問われたなら不可能だと答えざるを得ない。悠に出来るのは並みの人間に起こせる現象に限られる。もしその限界を超える時が来るとすれば、それは悠というカタチの外に異質なる理が作用する時に他ならない。

結局、悠には諏訪子をただ見守ることしか許されない。誰よりも特別であるが故に、誰かに影響を与える事を禁じられる。これならばなんら特別ではないただの人であつたほうが余程マシだつたらう。僅かなれどその信仰は諏訪子の支えとなれるのだから。

自らへの怒りに頭を沸騰させながら、どこか静かに自らを客観視している自分がある事に気付く。

悠は自分で思っていた以上に諏訪子の事を深く想っていたらしい。それは男女間の愛ではないにせよ、永きを共にした家族への想いである事に違いはない。

そして、だからこそ、自らと共に歩む存在の窮地に力に成れない事が口惜しい。錆びた剣を握る手に力を入れすぎたのか、剣が今まで感じた事が無いほどに熱を持ったように思え

「悠様！」

「!?!」

突然、隣に立っていた祝の少女が悠に向かって傳いた。

「どうか、どうかその御力で諏訪子様をお助けください！」

自身に向けられた言葉に啞然とする。悠は諏訪子と共に祀られているが、人の信仰を力に変える事は出来ない。名ばかりの神であり、鍛えた人間にすら劣る程度の影響力しか持たないのが悠という存在

なのだ。

そこで、いつの間にか先より更に熱を持った剣に目をやる。赤く錆びて欠けた刃で、しかし剣は振るわれる時を望むかのように存在感を発している。

錆び付いた剣をそつと掲げ、視界に捉えた八坂へと思い切り振り下ろす。

変化は、無い。

元より人間の動きなどで神秘を扱える筈が無い。ましてこの剣に秘められていたのは人の信仰から生まれた力であろう。神とは呼べない悠に扱える道理が無い。

ならば、何故諏訪子は悠に剣を託したのか。

諏訪子が振るえばおそらく八坂の蔓によって剣は朽ち果て砕けてしまっただろう。

だが、神ではない悠に預けたところで意味を成すとも思えない。神が必要だ。

諏訪子以外の、これだけの信仰の力を扱う術を持つ神がいた。

「……君が使ってくれ」

赤錆に覆われた剣を傳く少女に差し出す。

案の定、少女は目を白黒させて驚くばかりだ。

「これは、人の想いを宿した剣。現人神の君でなければ使えない」

「……………よろしいの、ですか？」

恐る恐る尋ねる少女に小さく頷いて返す。

おそらく、いや、絶対に可能だ。

諏訪子の血を引き、神の力を扱うことを可能にする高い知能と知恵を持つ存在である少女ならば、扱えない道理などある筈がない。

「ああ。大切な物を守るために、振るえ」

「はっ」

横にして差し出した剣を恭しく少女が両手で受け取る。

そして彼女は未だ水柱を上げ続ける戦場へと一步踏み出し、大きく息をはいた。

変化が起きる。

祝の証ともいえる漆黒の髪が黒いままに存在感を増し、鉄剣はその身に大きな輝を入れながら赤錆をも含めた全てを黒に染められた。少女はなんら気負う事無く右手で漆黒の剣を振り上げる。刀身には闇よりなお黒い霧が纏わり付いていた。

そこでようやく気付く。少女の目がどこか虚ろだ。剣の力に中てられたか、トランス状態に入る事で剣の力を自らの属性に染め上げたのか。

乱れ一つなくゆつくりと黒霧に包まれた剣が振り下ろされ、突風と共に剣が砂のように崩れながら霧と共に吹き飛ばされた。

同時に糸の切れた人形のように倒れこむ少女を抱きとめ その光景を目の当たりにする。

湖が黒く染まり、大勢の人間が怒号を上げたかのような轟音と共に巨大な竜巻を作り上げる。

一瞬前まで湖だった黒い渦は争う二柱の神を呑み込みうねり狂った。

漆黒の濃淡から竜巻の回転がどれほど激しい物か思い知る。

やがて竜巻は細く高く上空へ伸びていき、その上端から透明な水へと戻っていった。

そして漆黒の塔が完全に消えると同時に辺りが豪雨に包み込まれる。

スコールという単語が脳裏をよぎった。

雨の密度はあまりにも高く、先程の戦場どころか一寸先すら見通す事は不可能だ。

地を穿つ雨音は他の一切をかき消し、自らの声すら耳に届かない。幸いにも抱きとめた少女が雨に痛がる様子は無い。

そのまま服の裾で少女の雨除けとなること十数秒。ぱたりと豪雨は止まり空は快晴に。しかし湖も空を舞っていた二つの影も先程までの場所にはない。

そこで、ようやく気付く。足元にうつ伏せになった八坂と、その腹の上で仰向けに転がる諏訪子の姿に。

動く様子は無く意識は無いらしい事を確認し、祝の少女を近くの木に寄りかからせて座らせた。

諏訪子を抱き上げて少女の膝を枕に寝かせ、身体の様子を窺うも目立った傷は無し。規則正しい呼吸を確かめ安堵の息をつき、未だ倒れ伏したままの八坂へと注意を向ける。

背負う注連縄はずたずたに切り裂かれながらも一応円の形を保ってはいるものの、白い浴衣のような着物は大きく裂け、やはり下着という概念は大和にも無いのか尻が丸出しになっていた。

とりあえずひっくり返してみるも衣服の前側も大きく破れている。しかし覗く白い肌には傷一つ無く、気絶以外の異常も見られない。

この場で息の根を止めるべきか迷う事三秒。結局悠は破れた服の上に自分のTシャツを被せるに留めた。

ここで八坂を殺しても更に強い神がやって来て報復されるのは火を見るより明らかだ。それよりは消耗した八坂と交渉して最大限の譲歩を引きずり出した上で降伏するのが遥かにマシだろう。

どういふ魂胆があつたにせよ、八坂は一人で攻めてきた。おかげで現在この場で立っているのは悠一人だけであり、この戦いだけを見るなら諏訪王国の勝利である事は疑うべくもない。ここで命を取らなかつた事を踏まえれば交渉で優位に立てることは間違い無いだろう。

なお、目を覚ました三人は意識を失う直前の記憶を失っており、言い包めるのがひどく簡単であつた事を追記しておく。

**第九話 勃発！ 諏訪大戦（後書き）**

宣言よりやや遅れての投稿。次回からの投稿は完全に不定期となります。

第十話 戦後協定。そして……（前書き）

作者にも意外な展開に。何故こうなった……。

## 第十話 戦後協定。そして……

諏訪大戦。その傷痕は深いものの、戦後協定はすんなりと決まった。

降伏の意を告げられた大和の軍神、八坂神奈子は最初こそ啞然としていたものの、理由を聞くとすぐに納得してくれた。天照を始めとする主神連中に出張られたら勝ち目など無い。諏訪子も神奈子より強い神に勝てるとは思っていないようでこちらもこれを了承する。神奈子はかなりさっぱりした性格で、負けたのだからとあっさりこちらの提案を呑んでくれた。といっても、悠には特に難しい注文をつける積りもなかったので話がこじれる心配はそれほどなかったのだが。

諏訪王国の今後については大和の代表として神奈子、諏訪王国の代表として諏訪子と悠、そして民の代表として祝の少女を加えた四人によって定められた。

その協定とは以下の通りである。

一つ、諏訪子は王位を大和に譲り、悠と共に隠居生活を送る。これは面倒ないざこざが起らないようにするための予防線だ。

一つ、隠居した悠、諏訪子に危害を加えない。これは諏訪子の安全を保障する必要があるためだ。ミシャグジ達の統括役がいなくなる事は大和にとっても不都合な筈である。

一つ、この地を治める神は以後神奈子とする。これは神奈子の性格を気に入ったためだ。思慮が浅い神が送られてきて諏訪子といざこざを起こすと民が迷惑を被ってしまう。

一つ、ミシヤグジ達の管理は諏訪子に一任する。もとより諏訪子以外に従う連中ではないし、下手にちよっかいを出されて暴走させられると危険である。

一つ、祝は以後神奈子に仕える。これは大和による支配を潤滑に行なわせると同時に祝の安全を保障するものだ。子孫の行く末を案ずるのは当然だろう。

一つ、雨を降らせ湖を復活させ、これを諏訪湖と名付ける。隠居して新しい神が国を治める以上、民の世代交代と共に諏訪子への信仰が減ってしまうことは避けられない。これは諏訪子への信仰が失われるのを防ぐためである。

一つ、神奈子への供物は諏訪子と分け合う。これは諏訪子が協定に同意する最低限の条件として突きつけたものだ。本音は酒を分けるといった所だろう。

今後大和と衝突しないために考えたこの協定は、この場では問題ないように見受けられた。神奈子もここまで譲歩される事をいぶかしむものの、特に不都合が見つからないためしばらく考え込んだ上でこれを受け入れる。

諏訪子も民の安寧が保障されるならと王位を譲る事に異論は無いようだ。現在祝を通じて国を纏めてはいるものの、既に隠居同然な身のため当然といえば当然だが。

ただ、大和の支配を民が拒む可能性を祝の少女が示唆する。今回の戦争は神同士の戦いのみであり人間は蚊帳の外に置かれていたためだろうかと疑問に思うも、即座に少女がその考えを否定する。曰く、諏訪子への信仰を人は捨てられないだろうとの事。

尤も、この地での信仰の獲得は神奈子の仕事だ。諏訪子は大和への臣従を民に伝えてしまえばお役御免なので、それ以上こちらが手を貸す義理は無い。大和が諏訪の民に不当な危害を加えた場合は反

逆する事も辞さないが。

しかし、祝の少女の懸念は直ぐに現実化する。諏訪の民は大和への臣従を受け入れたものの、神奈子を祀ることを拒否したのである。その原因は祟り神への恐怖よりも諏訪子の人望にあった。諏訪の民が諏訪子に抱く畏敬と恩義の念は簡単に捨て去れる物ではなかったらしい。

諏訪子の判断ならばと民は大和への恭順の姿勢を示したが、諏訪子以外の神を信望する事は頑なに拒んだのだ。

諏訪子を裏切ることが出来ないと言を揃える長老達だが、困ったのは悠の方である。

このまま神奈子が受け入れられないなら大和からのさらなる干渉は避けられない。しかし神奈子が単独で戦ったのは、山に囲まれたこの地へ攻め入る事による人間の被害を憂いたためだ。人の手で支配を強制しようとしたならば、双方に大きな犠牲が出ることは避けられない。

とはいえ、このままでは大和の人間に示しがつかない。中央の人間より支配下の民が優遇されるなどあつてはならないのだ。

そして悠が下した結論が、諏訪子と神奈子の二柱を祀る事だった。元々この地に祀られていたのは諏訪子とその連れ合いである悠の二人。悠が諏訪子の相方としての位置を譲れば、無理なく神奈子はこの地での信仰を得る事が出来る。

かくして悠は諏訪子の眷属となり、神の座を神奈子に明け渡してこの問題は決着を見る。

悠は信仰を力に変えることは出来ない。諏訪大戦時に祝の少女が使った鉄剣の力は悠に向けられた信仰が諏訪子の力と結びついた結果である。それまで無駄になっていた信仰を神奈子が有効活用する事で、民が受ける神徳はより大きな物となった。

勿論問題が無かった訳ではない。諏訪子が表舞台に出てくることは協定によって禁じられているのだから。

そのため、神奈子は建御名方命という神をでっち上げ、国外ではこの神が神奈子に屈服されたことにした。無論諏訪王国内では引き続き諏訪子が信仰されたままである。

とはいえ、人はごまかせても神をごまかすことは難しい。神奈子は諏訪子を御していると示す必要に迫られる。

その結果、諏訪子が神奈子より大きな力をつけないように国内で祀られる神の名を洩矢から守矢へと変更。さらに神奈子が諏訪子の上であることを示すため、様々な神事を作り出した。

例えば、調子に乗った諏訪子と祝の少女の降らせた雨によって以前よりも巨大化した湖。諏訪子を象徴するこの湖の四方を御柱で囲い、諏訪子を封じた事を示す御柱祭。凍った湖を横断して諏訪子のテリトリーを牛耳って見せる御神渡。さらには冬眠した蛙を生贄に奉げる蛙狩神事。

流石にここまでされては諏訪子がキレるのも当然の事で、神遊びと称した大喧嘩が起きるのは日常茶飯事となる。ついでに疲れ果てた二柱を縛り上げるのが祝の仕事の一つとなり、その二柱に制裁の拳骨を落とすのが悠の仕事になった。

理屈は不明なのだが、悠の攻撃には神秘的な防御は通用しない。神相手でも普通の少女が受ける程度のダメージを与えられるのだ。流石に物理的な防壁は超えられないが、諏訪子達も結界などで防御はしない。そこまですると祝に本気で叱られるのである。普段大人しい人ほど怒らせると恐いという典型だろう。

そんなこんなで四年の年月が過ぎ、問題が落ち着きを見せ始めた冬のある夜。

「はああ……………」

悠は複雑な想いを吐き出すかのように大きく息をはいた。

目の前にはあられもない姿で横たわる神奈子と諏訪子。眠る二人の顔はどことなく満たされた感じを受ける。

部屋に漂うのは酒と汗より粘っこいむっとした匂い。

早い話がヤッチまったのである。

基本的に悠は性行為への関心が薄い。

だがそれは自分から女を求めないというだけの事で、誘惑されて反応しない訳ではない。

そして二人は充分に女だったのだ。

そも子を儲ける事が推奨されているこの世界では、神にとっても子作りは神事として尊重されている。むしろ彼女達からしてみれば、そういう事に興味を向けない悠の方が異常なのだ。

まして悠は二人がこの地において同格として認めている唯一の男だ。手を出さない理由が無い。

今から思うと彼女達は最初から手を組んでいたのだろう。酒で理性という枷が緩んだ二人はそれはもう大胆だった。酒の影響を受けない悠が流されてしまうほどに。

過去に諏訪子の誘惑を撥ね退けてきたのは事実だが、花弥を産んで以来諏訪子は抱きしめたり一緒に寝るだけで満足していたので問題は起きなかったのだ。例えば諏訪子は家族という形への憧れが強かったのだろう。

だが、蛙を原型とする諏訪子とはかく人を原型とする神奈子がそれで満足する筈が無い。いつものように悠の肩に寄りかかりながら酒を飲んでいた神奈子は唐突にこう切り出した。

「なあ悠。お前は何でいつまで経っても誘ってくれないんだ？」  
「は？」

目を白黒させる悠に神奈子は更に一杯酒を煽ると、赤らんだ顔を悠の目の前に寄せてくる。

「そりゃ、子作りの話だよ」  
「はい!？」

驚いて顔を僅かに引くと、神奈子はむっと口を尖らせて見せた。

「だから、お前は私との子が欲しくないのかって聞いてるんだ」  
「えっと、それは……」

少なくとも神奈子は悠にとって十分に魅力的な女性だ。メリハリのある身体に女性を感じた事がない訳でもない。

「ダメだ。僕は諏訪子の」  
「ん？ 私は気にしないよ？」

神奈子とは反対側から諏訪子が抱きついてきて悠の退路を断つ。胸は絶壁に等しいが、押し付けられる身体はフニフニとしていてとにかく柔らかい。酒を飲んでいるせいとその身体は普段より温かかった。

「ほら、妻公認なんだから問題なんて無いだろう？ さあ、誘いなよ」

「あー、いや……」

言いよどむ悠に神奈子の目つきがきつくなる。酔えない酒を一杯煽って、仕方なく女性に手を出さない理由を話した。

「はあ、なるほどね。確かに悠みたいなのが山程産まれたら大変だ」  
「ああ、それもまずいね」

ようやく棘のある視線を収めてくれた神奈子の放った言葉に頷き返す。

今まで考えていなかったが、例え世界に危機をもたらさなくても無敵という存在はそれだけで脅威だ。なにせ敵う者がいないのだから、無法を行なえば止められない。

そして、悠が好き勝手やらかさないのは拘束される事を避けるためである。永琳は悠を脅威と断じながらも、縛って土に埋めたり海に沈めたりすることなく軟禁するに留めた。つまり、悠を行動不能な状態にしてしまつと異法則が流出する条件が満たされる恐れがあるのだろう。

「でもさ、男としては辛い物があるんじゃないか？」

「あー、そうでもない」

これは事実だ。他の男がどうであるかは知らないが、悠は特に我慢してきた積もりは無い。元々そういう欲求が薄いのだから当然といえは当然だ。

つまらなそうにブーイングを上げる諏訪子の頭を撫でながら、ふと浮かんだ一つの疑問に首を傾げる。

「ねえ、神奈子。なんで僕から誘う事にそんなに拘るの？」

「いや、こういう事は男が女を誘わないと失敗するじゃないか」

なんでも、イザナギとイザナミが子作りをする際、イザナミから

誘いをかけたために不具の子が産まれたらしい。そのため大和の神の間では男の神が女の神を誘わなければならないというしきたりがあるそうなの。

ふーん、と気の無い返事を返す。すると神奈子は小さく口の端を吊り上げて、そつと悠の頬にその手を当てた。

「まあ、要は子供さえ作らなければいいんだろ？」

「んむっ!？」

言つや否や、神奈子が唇を悠のそれに重ねてくる。そのまま舌を割り入れられ、口の中を思い切り蹂躪された。口の中の水音が異様に大きく聞こえてくる。

ぼうつとする頭が熱を持ち、口付けを解いた神奈子の唇との間に唾液の橋が架かるのを呆然と眺める。

次いで諏訪子が神奈子と同じ様に悠に口付けしてくる。その間に神奈子が着物を脱いで背後から悠に抱きつき、耳たぶを唇で挟んで舌を這わせてきた。

「ま、中央で惚気話は腐るほど聞いていたんでね。別に子を生さずとも愛し合う手段はあるんだよ」

神奈子の甘い声が耳をくすぐり、悪寒に似た快感が背筋に走る。

そして諏訪子が唇を離し、衣服を脱いで悠の正面からその裸体をすり寄せてきた。

冷静さを奪われた頭が事態を理解するよりも早く、二人の手により悠は上着を捲り上げられ下着ごとズボンを下ろされ、二人の肌が直に押し付けられる。

「悠。私も愛して、ね……」

諏訪子が怯えと期待の入り混じった潤んだ目で見上げてくる。

「女から誘っているんだ。恥をかかせるなよ」

加えて耳元で囁く声も心なし揺れており、肉感的な体を非常に強く押し付けている事から神奈子も緊張しているのだと気付いた。

こうまでされて彼女達を拒絶する理由は存在せず、胸を満たすとうしようもない熱に突き動かさせるように悠は覚悟を決める。

正面の諏訪子を抱きしめて乱暴にその小さな口を貪り、次いで邪魔な衣服を脱ぎ捨てて神奈子に振り返り深い口付けを交わすのだった。

結局子を儲けるような行為こそしなかったものの、遂に女性と肉体関係を持つてしまった。

別後悔する積もりは無い。むしろ、彼女達と結ばれるのならば望むところである。

問題は、人の様に子を生せない事だ。いつかその事が彼女達を苦しめることにならないかと不安になる。

いつの間にか小さくなっていった火に薪をくべ、手近な布で二人の汗を拭った後で自らの体も拭く。

神が住んでいるためか、諏訪子と悠の家は夏は涼しく冬は暖かい。だが換気機能までは付いていないので匂いがこもっている。

とはいえ冬の凍てつくような空気を入れるわけにもいかず、とりあえず二人が冷えないように厚手の布を被せた。

とりあえず再び衣服を纏い、二人の衣類を纏めようとしてふと諏

訪子の帽子に手が伸びる。

その特徴的な大きな瞳は閉じられている。そっと触れるも目が開かれることはない。

今までの経験から、このあまりにも可愛らしい帽子は諏訪子と連動している事が分かっている。それはあくまで諏訪子の感情が反映されるだけだが、以前諏訪子が寝ている隙にこっそり被ろうとした際に帽子は悠の手から逃れようと独りでに飛び始めたことがあった。彼女が言っていた通りに帽子も諏訪子の一部という事なのだろう。

「悠……」

帽子を撫でてしていると諏訪子が薄らと目を開いていた。

帽子を枕元に置いて、諏訪子の隣に潜り込む。諏訪子はいつものように悠の胸元に頭をすり寄せ、微笑んだまま小さな寝息を立て始めた。

諏訪子の頭を撫でた後、その手を伸ばして神奈子の手にそっと重ねる。

男女の仲になったためか、目の前の二人の事がひどく愛おしく思える。それは花弥に対する感情よりも激しいのに、しかし同時に安らぎを感じる物だった。

目を覚ました後の事を思考の彼方に追いやってそっと目を閉じる。先を案じるまでもなく、三人は在るべき形に落ち着くだろう。

二人の温かさを感じながら、悠の意識は闇に溶けていった。

ちなみに仕事の少ない冬の日々がかなり爛れたものとなる事など、

今の悠が知る由もなかった。

## 第十一話 守矢の神獣（前書き）

夜中のテンションに任せて書いた為か、いつもよりやや長めになりました。これでようやく予定の人物が全員集合。後は幻想入りを果たすまでサブイベントばかりが続きます。

## 第十一話 守矢の神獸

今現在の諏訪王国における最高権力者とは誰かと問われれば、対外的には八坂神奈子である。

しかし、神は崇められ存在する事で神徳を人に与える存在である。人を直接指揮する存在は人でなければならぬ。

無論中央から統治者は送られて来ているのだが、その霊的能力は至極残念な物であった。初めて諏訪子と対面した中央から送られた男は、始終諏訪子の神威に平伏したままだったのだ。

当然といえば当然である。未だ存在する祟り神の本拠地、しかも中央から離れた険しい山を越えた先の国に送られるという事は実質左遷と同義なのだから。特別優れた能力を持たないからこそ、このような地に男は送られてしまったのである。

ミシャグジにも侮られる男を王国の民は統治者として敬うことはなく、実質的に諏訪王国を率いたのは祝の一族となった。

とはいえ祝の一族は諏訪子の血筋だ。このままでは中央から要らぬちよっかいをかけられる恐れがある。

そこで神奈子は祝を風祝と役職名を改めた。神奈子の司る風の文字を入れる事で祝を諏訪子から神奈子寄りの存在へと変えようというのだ。

また、それまで苗字を持っていなかった祝の一族に『東風谷』の氏を与えたのも神奈子である。これにも風の文字が含まれている。勿論その目的も同じだ。

尤も、祝は水の属性に特化している。それに対して神奈子の属性は木だ。

祝の持つ力の根源は信仰である。これが水の属性を持っているのは今まで雨乞いの儀を執り行ってきた事に原因があるとみた神奈子

は、風祝と役職名を変える事で祝への信仰を変えようとしたのだ。そしてその試みは東風谷に新たな女兒が生まれたときに成就する。今まで力を持つて生まれた子は皆髪の色が黒であった。しかし、その女兒の髪の色はやや緑がかっていたのである。水は木を育む。風は木に属する。新たな祝の子は風を操る素養を持つて生まれてきたのだ。

そして、長い月日が流れた。

風祝となるべくして生まれた女兒は鮮やかな翡翠の髪を持つて生まれ、神奈子と民の間を繋ぐ役割を果たし、時に風祝がどちらに懐いているかで神奈子と諏訪子が喧嘩する。

悠の後釜に座った神奈子は山の神として崇められ、諏訪子と力を合わせることで乾と坤、すなわち天地を司る事で王国に恵みをもたらし、度々喧嘩しては災害をも振りまいては風祝に叱られた。

大和の侵略が終わってから特に大きな事件もなく、悠の日常は平穏に満ちている。時々閨の事でトラブルが起き、諏訪子と神奈子が喧嘩をする度に悠が風祝に叱られる事を除いては。

結局諏訪子と神奈子はしょっちゅう喧嘩をしているのだが、決して仲が悪いわけではない。むしろ言いたいことを言い合って喧嘩した後で仲直りが出来るくらいに仲が良く、そのおかげで悠と二人の夫婦生活も概ね円満に収まっている。

しかし、何の憂いも無いと思われた時にこそ事件は起きる。かつての大和襲来のように。

「あーい、うーん！」

「むう……」

「いや、勝ち誇ってる場合じゃないから」

拗ねてそっぽを向く神奈子と小さい背でふんぞり返る諏訪子を前に悠はため息をついた。ちなみに諏訪子に外国語を教えたのは当然悠だ。

別に二人が喧嘩をした訳ではない。神奈子が勝てなかった相手に諏訪子が勝った。それだけだ。

「まあ、相性なら仕方ないよ」

「……うん」

座っている神奈子を後ろから抱きしめて頭を撫でる。後ろからでは分かり辛いが小さく神奈子が頷いて返事をした。

諏訪子だけでなく、神奈子を始めとする大和の神霊達も大概子供っぽい。なので、拗ねた時は子供の様にあやしてやれば簡単に慰められる。

神奈子の機嫌がやや上向きになってきたところで今回起きたことを頭の中で整理してみた。

事の起こりは三日前。割と質素な服装の神霊が神奈子を訪ねてきた事に始まった。

その神霊は力の弱い、中央の使いつ走りだったらしい。

恭しく神奈子に挨拶を述べると、中央からの命令を伝えて西に飛び去ったという。

風祝によると、伝えられた内容は土着の神の討伐令。

この諏訪地方から南の地にカエラズの森と呼ばれる地があり、そこに住まう神獣を片付けるとの事。

立ち入った人間が帰って来ない危険地帯。最初は妖怪の仕業と思われており、その地を任されていた神霊が退治に向かうも消息不明となる。

返り討ちに遭ったのは明らかで、今度はそれなりに強い力を持った神霊が数人がかりで乗り込むものこれも壊滅。

生き残った神霊の話によって襲って来た相手は神獣の類いであることが判り、その地に近く強力な神霊、つまり神奈子に討伐令が下されたのだ。

尤も、相手はあくまで神獣に過ぎない。獣が神格化されたモノであるならまだいいが、森に住む神に従えられて神の眷属となった獣であるなら厄介だ。その場合は神獣よりさらに強い神とも事を構える必要がある。

そして今朝、入念に装備を整えた神奈子と諏訪子が空を飛んでその地に赴いた。空を飛べない悠と足手纏いである風祝は置いていかれ、日が暮れるまで四方山話をして過ごす事になる。

特に国津神の一人が八ヶ岳を砕いたという下りにはひどく驚かれたが、それは紛れも無い事実である。しかし、それ程の力を誇った国津神も天津神に降った。名高く信仰の篤い神の力とはそれ程までに強大なのである。そして、だからこそ悠は今回の件を不自然に思った。

今や神霊の力は弱まっている。その原因は中央の人間が内部分裂して争った結果、神道派が敗れ仏教が請来された事にある。神獣の討伐を神奈子が任されたのも、この地では仏教の影響が小さい事が理由の一つとしてあるのだろう。

だが、それでも未だ国津神の力は強大だ。妖怪程度では相手にな

らず、神獣といえどマイナーな信仰の低い神に遅れを取るなどあり得ない筈である。

そして今、悠の不安は現実化した。月が高く上った頃に帰って来た神奈子と諏訪子は、その神獣を倒す事が出来なかったのだ。

尤も、二人の体どころか衣服にすら傷は見られない。それもその筈、件の神獣は空を飛べなかったのである。

だが、その神獣には二人の攻撃が全く通用しなかったのだという。諏訪子が無数の鉄の輪をぶつけても、神奈子の森ごと薙ぎ払う巨大な竜巻でさえも、怪我一つ負う事無く耐えられたのだとか。

そこで仕方なく諏訪子がちよつと無理をしてミシヤグジを召喚したところ、神獣はあっさりと逃げ出したらしい。

幸運だったのは、神獣が神に従えられた存在ではなかった事だ。森を潰しておいてその神獣より強い神が荒ぶったなら今頃二人は帰って来れなかったかもしれない。

突然逃げ出した神獣を見失いこそしたものの、祟りが有効だと知った二人は対策を立てるために一度引き返したのだ。

今の所、悠が神獣を捕まえそれを諏訪子が祟り続けて屈服させる積もりらしい。

ところが、その方法には問題がある。神獣の潜伏位置と悠の移動手段だ。神獣は見つけ次第報告が来るらしいが、悠は地を歩く事しか出来ない。神奈子が悠を抱えて飛ぶ事も不可能なため、移動に時間がかかり過ぎる。

「それなら、悠が先に南へ行っておけばいいじゃないか」

「……おお」

神奈子の発言にはっとする。悠が先に南の地で待機して神獣が見

つまり次第そこへ向かうなら、ここから急ぐより早く着ける。

「でも、アイツの名前は何なんだろう？」

「中央の連中は名前を付ける事で縛れなかったみたいだしねえ」

諏訪子の疑問に神奈子が追従する。神霊とは名前を付けられる前の存在であり、名前を付けられる事でその一側面を切り出し具現されたモノでもある。それは諏訪子や神奈子、ミシャグジたちも同じだ。

そして、神獣も神であるなら名前を付けられている筈である。天津神ですら名前が付けられない事が既に名前を付けられている証左だ。

しかし、神獣の名を知る者はいない。名付け、崇めなければ神足りえないのにも関わらず。もし名が失われたのならば神としての力を持つ訳が無い。忘れ去られた神は力を失うのが道理なのだから。そして、それ故に神獣の上に立つ神の存在が危惧されたのだ。獣が神格化されたのではないのなら、神の使いであると考えるのが当然である。

「そつえば、どんな獣だったの？」

ふと疑問に思った事を尋ねる。名前が分からない以上、未知の獣である筈だ。獣としての種類が判っているならばもうそれは妖怪へと零落していなければおかしい。

「えっと、白くて綺麗な毛の、三尾の獣だったよ。なんか木の上で待ち伏せしてた」

諏訪子が喉下に人差し指を当てて答えてくれる。

白い毛。三尾の獣。木の上。その単語に古く磨耗した記憶が呼び

覚まされた。

「もしかして、目は赤かった？」

「うーん、そうだったかも」

「なんだい、悠は知ってるのか？」

あやふやな返事を返す諏訪子と、こちらに振り返って問い返してくる神奈子。

それに対して、多分、と答えながら頭の中で仮説を構築する。

思い返されるのは白くふさふさとした毛を持つ三尾の獣。かつて悠がましろと名付けた存在。

もし、あの白い獣が悠という高次元存在に名を付けられた事で神となったのだとしたら、その異質さにも納得がいく。

悠自身は神としての力を持つ事はなかったが、かつて神として祀り上げられていた事に変わりはない。

攻撃が効かないというのも悠の特徴と酷似している。

加えて、ミシャグジを前にして逃げたという事実。かつてましろは神を恐れていた。その神がミシャグジ達だったとしたら、逃げた理由としても妥当である。

「その獣は人の言葉を使えた？」

「うん。逃げるとき悲鳴を上げてたよ」

喋る獣。これでまたましろである可能性が一つ増えた。もしかしたらましろはミシャグジ<sup>エサ</sup>神だと認識していて、諏訪子達神霊を飛べる人間程度にしか考えていなかったのかもしれない。

もし、仮に、万が一その神獣がましろであったならば、もはや悠にしかどうにも出来ない。

神の使いとしての神獣となったのであればその上に立つ存在である悠に従ってくれるだろうし、悠と同じ特性を持ってしまったのなら

らばミシャグジの祟りは効かない。それに気付いてミシャグジを恐れなくなったら厄介な事になる。

ましろとの出会いと思いついた仮説について二人に話す。話が進む内に二人の表情は険しくなっていた。

「なあ、悠。その獣の名前にどんな字を当てたんだ？」

「平仮名っていう文字でましろ。同じ音の漢字に当てはめられる文字だよ。多分僕しか知らない字だ」

真剣な問いをぶつけられて返事を返すと、神奈子が額に手の平を当てて顔をしかめる。

「魔<sup>ましろ</sup>白<sup>ましろ</sup>、真<sup>ましろ</sup>白<sup>ましろ</sup>、魔<sup>ましろ</sup>代<sup>ましろ</sup>、魔<sup>ましろ</sup>城<sup>ましろ</sup>……。もしそれが本当だとしたら、アイツの持つ特性は無数にある事になるね」

憂鬱そうに言う神奈子に無言で頷く諏訪子。悠がした事はかなり厄介な事態を呼び寄せたらしい。

悠の中にしか存在しない文字で名を構成された神。悠が内側から生み出した物を与えられた所為で、ましろは悠に似た性質を持ったのかもしれない。

「まったく。恨むよ、悠」

「ごめん。なんとかして見せる」

ジト目で見てくる神奈子に頭を下げた詫びる。諏訪の外に想う所は特に無いが、このままでは神奈子に大きな迷惑をかけてしまいかねない。

顔を上げたところで、神奈子はコツ、と拳を悠の額に当ててきた。驚き目を見張ると、神奈子は意地悪そうに口元を吊り上げる。

「じゃ、このツケは体で支払ってもらおうかね」

「んむっ!?!」

「あ、神奈子ずるい!」

言うなり悠の口に舌を割り込ませてくる神奈子と、それに対抗して悠に飛び付いて来る諏訪子。

その日の夜は、今までに無いほど長かった。

「……やあ」

「あれ、食べられない?」

結局、件の神獣はましろだった。

あの夜より十五の夜を越え、南の地で土着の神霊に教えられた森の中で悠はましろと出会ったのだ。

正確に言えば、巨木の上から襲って来たましろに頭を啜えられているのだが。完全にいつかの出会いの再現である。

「ましろ、離して」

「はい」

悠の言葉にあっさり従い、噛み付いた口を離す。取り合えず逃げられない様に三本の内真ん中の尾を掴んでおいた。

「あ、離してー！」

「ダメ」

尾を掴まれるのを嫌がったましろは逃げようと踏ん張ったり爪で引っ掻こうとしてくるのだが、全ての抵抗は無意味に終わる。そのまま尾の根元を掴み、尾骨の周りの肉を揉んでやった。

「あうあうあー！ やめてやめてー！」

体をくねらせ嫌がる素振りを見せるものの、段々力が入らなくなっているようだ。毛がやや長い巨大な犬だが猫だかの様な外観だが、この反応はどこなく猫っぽい。耳は大きな三角形だから、もしかしたら狐の原種だったりするのかもしれないが、どうせ全部ネコ目なのでどれでもいいだろう。

本気でベソをかき始めたところで揉みしだくのやめてやる。そこでましろは大きく息をつき、地面にへたり込んだ。

「あうー。ひどい」

「大丈夫だ。全部ましろが悪い」

「なんで!？」

己の蛮行の責任を全部ましろの所為にする。勿論文句は聞き流した。

ましろがああ森から出ていなかったのであれば、ただ獣として縄張りを荒らした者を襲っただけだろうから悪い事など何一つしていないのだが、こうして成敗されるのは時代の推移による摂理であり

特に悠が悪い訳でもない。強いて言うならば、ましろが可愛いのが悪いのだ。

ましろからすればどう考えても理不尽な理由を脳内で展開して自分を正当化した後で、ふと疑問に思った事を尋ねてみる。

「ねえ、ましろ。もしかして僕の事憶えてない？」

「え？ うーん……」

ましろは桃色の鼻を悠の腕に擦り付ける様に匂いを嗅ぎ、次いで腕を啜えて熱くザラザラとした舌で嘗め回した。

それから尾を掴まれたまま右に左に転がりながらうんうん唸り、そして唐突に起き上がる。

「あ！ 食べられない人間だ！」

「うん。悠って名前も憶えてくれていたら良かったんだけど」

「ユウ……？」

名前まで憶えておけるほどの記憶力はなかったらしい。いや、むしろあのましろが悠の事を思い出せただけでも凄いのか。

「で、僕はましろの神様として来たんだけど」

「神様？ 人間じゃないの？」

やはり、神霊と人間の区別も付いていないようだ。元々悠は分類不可能な存在ではあったが。

「今は神様なの。神霊じゃないけど」

「しんねー？」

もし件の神獣がましろであれば、頭が足りなすぎて説得はできな

いだろうとは思ってはいた。実際話してみても、難しい話を理解出来る気がしない。

だが、このまま放置というわけにもいかないだろう。災いの芽と成り得る以上、事前に潰せるなら潰して置くべきなのだから。

「とにかく、これからましろは僕の言う事を聞くの」

「えー」

ましろは不満そうに耳を伏せてそっぽを向く。ここで嫌だと言わない辺り、悠の言葉が何かしらの強制力を持っている可能性が高くなった。

「人間を食べなかつたら、食べ物あげるから」

「むっ……」

悩んでいる。所詮は獣。エサで飼いならすのが効果的な様だ。

「言う事聞いてくれたら、怖い神様から守ってあげるよ」

「ほんと!?!」

ぱっと頭を上げるましろ。食い付きは上々といったところか。

「僕の言う事、聞いてくれる?」

「はい!」

威勢のいい返事が返ってきたところで尾を握る手を離す。ましろは悠の前に向かって座り直し、嬉しそうに三つの尾を勢いよく上下させる。

額の辺りを掻く様に擦っていると、気持ちよさげに目を細められた。

ましろの機嫌を取りながら帰りの道程を考える。ましろの背に乗って走ってもらえば早そうだが、もし出来るならば空を飛べば今夜中に帰ることも出来るだろう。

「じゃあましろ、空を飛べる？」

「私飛べないよ？ 鳥や人間じゃないもん」

飛べるのは人間ではなく神霊の類いである。例外は風祝ぐらいなものだろう。天津神の末裔たる天皇も飛べないらしいのだから。

そこまで考えてふと気付く。ましろは人間ならば飛べると信じている事に。

「じゃあ、人間に化ければいいんじゃない？」

「ばける？」

最近の妖怪の中には人型のモノも現れ始めている。とはいえ、初めから人間の姿で生まれてきた訳ではない。その正体は別にあり、人間に化けているモノが殆どだ。例外があるとすれば人間が妖怪になった場合だろうが、今の所そのような噂は流れていない。

悠と出会う前のましろはおそらく妖怪だったのだ。ならば人間に化ける事も可能かもしれない。

いや、かもしれない、ではない。悠が信じる限り、それは実現する。

「できるよ。ましろは人間の姿になれる」

「うん！」

ましろはむー、と小さく唸りながら尻尾の毛を大きく膨らませる。その尾が強く地面に叩きつけられた瞬間、すり替わる様にましろの姿は獣から人型に切り替わった。

ましろの人としての姿は、諏訪子よりやや小さな白い少女だった。白く透き通るような腰まである長い髪と、不自然なほどに白い着物。頭には三角の白い獣耳。背には三本のふつくらとした白い尾。肌もやや白いが病的に感じるような青さは無い。例外としてその瞳と着物の帯が紅という色を持っている。

「うん。ちゃんと人間になれたよ」

「えへへー」

頭を撫でてやると、ましろは満面の笑みで尾をゆらゆらと揺らした。

手をましろの頭の上に置いたまま、悠は腰に着けた袋から手の平くらいの白銅鏡を取り出す。

「こちら悠。作戦成功。オーバー」

『おお、おめでとう！　ところで、オーバーって何だ？』

鏡に話しかけると、ややあつて神奈子の声が返ってきた。

これは神奈子の力が込められた神具、真澄鏡（麟鳳瑞花八稜鏡）の模造品だ。話しかけると、声を風に乗せる事で神奈子の胸元の鏡を通じて会話できる能力を持っている。便利だが、器たる鏡の許容量が小さい為に二月とせず壊れてしまう消耗品でもある。

「気にしないで。とりあえずましろを連れて帰るから」

『分かった。途中で人を襲わないように見張っておきなよ？』

「了解」

「なにそれ？　しゃべった？」

鏡に手を伸ばすましろを制して鏡を袋に戻す。そしてましろの脇に手を差し入れて持ち上げた。

「さあ、もう飛べるようになったよ。飛んでごらん」

「はい」

あっさり鏡への興味を無くしたましろは、耳をピンと立てる。同時に支える腕にかかっていたましろの重みが無くなり、静かに空へと上って行く。

「うわゝ、わゝ！」

訂正。地上を見下ろしてひどく騒ぎながらさらに高くへと飛んで行った。思わずはしゃいでしまうほど空を飛ぶという事が楽しいらしい。

一通り空中遊泳を楽しんだ後、ましろは悠の元に降りてきた。特に疲れた様子は無い。尻尾を揺らして見上げてくるましろの耳を掻いてやる。

「あー」

目を細めて気持ちよさそうに笑うましろ。扱い方は猫用で良いらしい。

そこで、次の段階へ移る。ましろの肩を掴んで反転させ、その肩の上から腕を回しましろを後ろから抱き寄せた。

「うー？」

「ましろ。僕を背負って飛べる？」  
「んー、たぶんー」

そう言ったましろは体重をかける悠を背負う形で浮き上がる。  
小さな女の子に背負われた青年というのはなんとも情けない姿だが、そんな事など気にしていられない。ましろは今、諏訪子や神奈子ですら不可能だった事を実現したのだから。

悠は飛べない。諏訪子や神奈子も悠に掴まれていると飛べなくなる。

しかし今、ましろは悠を負ぶって宙に浮いているのだ。やはり、ましろもまたイレギュラーな存在らしい。

「重くない？」

「ん？ へーきだよ？」

獣だった時よりもさらに幼くなった声で返事をするましろ。負ぶわれたまま浮かんでいくと、眼下には壮大な光景が広がっていた。

「凄いな」

「すごい？」

「うん。ましろは凄いよ」

耳がピクピク動き、腹に当たるましろの尾がもぞもぞと動く。褒められて嬉しいらしい。

「よし、あの山の方に向かって飛んでくれ」

「はい」

あまり風圧は感じないものの、諏訪子や神奈子よりもさらに速くましろが悠の指差した山の方に向かって飛ぶ。

これなら、日が暮れる頃には家に帰ってしまえるかもしれない。それ程ましるは速かった。

風を切る音が大した事が無いのは、悠の所為で空気の抵抗力が消え失せているからだろう。

「たのしー！」

「そうかー」

暢気な会話を交わしつつ諏訪へと空を駆ける。

心配なのはましるの食事量だが、人型であるならそれ程の量を食べる事も無いだろう。

例え獣であったとしても、それはそれで心配していなかった。獣は一度に食べる量こそ多いが人間よりも燃費が良い。狩りに失敗しても長く保つ程度に栄養を蓄えておけるのだ。まあ、だからこそ獣を飼う時は食事量の管理に注意が必要になるのだが。

その日の夜、早速問題が発生した。

食事は問題なかった。ましるは人間の調理された食べ物をいたく気に入ってしまい、食べる量も諏訪子とほぼ変わらなかったのである。

ならば問題とは何か。それは閨の事だ。

悠としてもこれ以上嫁を増やしたいとは思わないし、諏訪子や神奈子もこの上ましるまで巻き込もうとしなかった。

とはいえましるは悠にひどく懐いている。簡単には引き剥がせない。

そこで、三人はましるを酔い潰すという行為に出る。

神というのは基本的に酒好きであり、それはましるも例外ではなかった。

同時に酒豪も多いのだが、そこは小細工でカバーする。具体的には、中空の茎をストロー代わりにして酒を飲ませてみた。

効果は抜群。かなり早い段階で泥酔したましるを寝かしつけ、三人は事に及ぶ。

ただ、酒の量にも限度があるため必然的に事に至る回数は少なくなつたが、その程度では特に誰も不満を抱くことはなかった。

こうして守矢神社は新たな家族を加え、中央の喧騒を余所に平穏な日々を続けている。

遠からず中央の影響は来るだろうが、神奈子が中央への興味をなくしつつある今、この地の将来についてはそれ程心配する必要はない。

なお、可愛がられるましるに立場を奪われた風祝の娘が癪癢を起こした事で起きた一騒動は、歴史に残されないままに幕を閉じた。

## 第十一話 守矢の神獸（後書き）

\*注意 酔いつぶすことを目的として飲ませる事は犯罪です。刑法にて10年以下の懲役、30万円以下の罰金、科料と定められていますので、現実で実行しないで下さい。

## 第十二話 悠とましろの何気ない一日（前書き）

二人のほのぼのとした日常的一幕と、ちょっとした歴史の推移。  
しばらくこんな感じに進んで行くと思います。

とはいえあまりに内容が薄いので久々にOMAKEを追加。

## 第十二話 悠とましろの何気ない一日

遂に、本格的な仏教の浸透が諏訪にも訪れた。

善光寺、長谷寺といった大きな寺が建てられ、積極的な布教が始まったのだ。

それに対抗して諏訪子、神奈子を祀る人々が諏訪大社を建てたのだが、これには一つ問題が含まれていた。

それは、守矢という神を公然と祀る事が出来ないという点である。諏訪の地において諏訪子は洩矢から守矢へと名前を変えて信仰されているものの、中央ではこの地を信濃と呼び建御名方命という名の土着神が封じられている事になっている。

諏訪湖を囲む御柱の地に建てられた四つの神社の内、上社と呼ばれる二つにおいては建御名方命が、下社と呼ばれる二つにおいては八坂刀売命（神奈子の事）が祀られる事でとりあえず対外的には問題をなくす事になった。

しかし、ここで更なる問題が発生する。上社の祭神として造り上げられた建御名方命である。

例え存在しない偶像であっても、神として信仰されたなら神霊が生まれてしまう。

流石にそれはまずいので、諏訪子は上社に移り住み、神事などを通じてその存在をアピールする事で架空の神に取って代わられるのを防ぐ事を余儀なくされる。

加えて神奈子もまた下社に住み諏訪大社全体の神事を執り行う事が決定した。

だが、流石に四つもの神社を風祝一人で統括する事など不可能だ。ましてや、現人神である風祝に嫌な意味での注目が中央から寄せられ始めている事も問題である。

そこで風祝の一族から霊的素養の高い者を選抜し、それぞれの神

社を任せることになった。

同時に風祝は権力構造から完全に離れ、神奈子付きの巫女として神奈子の世話をしつつも神奈子によって守られるという構図が完成する。

ついでに、かつての社は完全に忘れ去られ、悠はましろと二人で暮らしながら押しかけてくる神様一人の面倒を見る生活を送る事になった。

ところで、仏教は死後の世界を扱う物である。

死後の裁判を恐れ善行を積んで生きる。これが基本であり、神を喜ばせる事で神からの恩恵を受ける神道と競合する事はないように思われた。

実際、死後の世界が明確に示されることによって、人は罪を犯す事を恐れるようになる。

同時に犯罪が減少し、国内の統治が比較的簡単になった。

これが、悠が仏教の伝来を問題視していなかった理由である。

だが、悠が気が付かぬ内に予想だにしていなかった二つの問題が発生していた。

一つは信仰の著しい減少。

しかし、これは仏教の問題ではない。人々は仏を敬いながらも神を崇め続けていた。

だから、これは人そのものに起きた異変に由来する現象だ。

人の技術は進歩の一途をたどり、神々に頼らずとも人間の技術で問題を未然に解決する術を編み出した。

無論、崇りへの恐れが無くなった訳ではなく、これはあくまで信

仰が減少した原因の一つでしかない。

信仰が減少した最大の原因。それは、人の霊的素養が急激に失われた事にある。

諏訪子や神奈子、ミシャグジ達神霊を感じ取る事が出来なくなつた人間が急増したのだ。

今はまだ神霊側からのアプローチによってその存在を認識できるようになるが、このままではいずれ神と対話できる存在がいなくなつてしまう恐れすらある。

この原因は、発達した技術に依存する事による人間の能力の退化にある。そう悠は推測している。

この件について焦つたのが神奈子だ。既に中央での神霊の衰退は著しい。

このまま神奈子達の力が弱体化すれば、未だ神の神徳によって守られている人間がどうなるか分からない。

諏訪王国始まって以来の危機である。

しかし、悠と諏訪子は割と達観していた。

一時的に人間が災害に晒されても、やがて彼らは自力でそれを乗り越えていくだろうと信じているのだ。

そして、神奈子が行なつたのが神遊びである。

簡潔に言つてしまえば祭りだ。

祭り以外にも祭りを行い、人と神が共に騒ぎ、共に在る事を認識させる。

この試みは成功し、神が身近に在る事を知つた人間は薄れかけた信仰を取り戻した。

加えて風祝や悠、ましろの知名度が上がつた事も大きな意味を持つ。

現人神たる風祝は信仰が失われても消える事はないが、力は大きく減少する。

ましろは信仰が失われる中で全く力を衰えさせる様子はなかつた

が、こうして悠共々存在を認知される事で奉げられる供物の量が増えた。

食べ物で飼いならしている分、ましろの食糧不足は下手をしたら人食いへと繋がりがかねないのである。

そして、もう一つの問題が妖怪の増加である。

以前とは比べ物にならない程妖怪の出現数が増え、また大きな力を持つ妖怪が現れる様になったのだ。

信仰の減少とは違い、こちらは完全に仏教の弊害である。

神の力が弱まる事によって、確かに妖怪の危険度は上がっていた。しかし、仏教の浸透と共に妖怪の出現頻度が劇的に上がったのも事実なのである。

これは、おそらく仏教の性質に由来する。

善悪併せ持つ神々と違い、仏教は完全な善性のみの存在だ。

善行を貴び、悪行を犯した者を死後において裁き、場合によっては現世であつても仏罰を下す。

これと釣り合いを取るかのようになり、人間にとって悪の存在である妖怪が増加した。

妖怪の力が増した理由は、数が増えた事によって人間により脅威として認識された為と、神威や自然への畏れが薄れ、人間の恐怖が怪異に向いた為ではないかと推測されている。

とはいえ、もはや統治を行うのは大祝と呼ばれるようになった神社の間である。

神奈子や諏訪子は神として当然の働きこそするが、今はもはや人間が主体となる時代だ。

よって、二人は過度な干渉を自重するようになった。

風祝は代を追うことに奇跡の力を強め、神奈子や諏訪子の補助と共に妖怪退治なども請け負うようになっていた。

こうなると、出番が無いのが悠とましろだ。

基本的に役立たずの悠と、頭が弱い為大した事の出来ないましろ。しかし、この地を守護する神二柱の寵愛を受けている以上、人間側も無碍に扱うことは出来ない。

かくしてかつての家の位置に守矢神社なる神社が建てられ、悠とましろはその神主と巫女になった。

無論祭神は守矢こと諏訪子である。

そんな境遇にある悠の役目は神を慰撫する事。

具体的な内容は、諏訪子の愚痴を聞いたり、神奈子の愚痴を聞いたり、風祝の報告を聞いて二人を叱ったり、ましろを酔い潰した後に二人と閨を共にする事だったりする。

だが、結局平時は暇なのである。  
少々強い妖怪が出たところで諏訪子か神奈子が飛んで行って一捻り。

神社の管理と言っても、神力で強化された本殿は人間の手では傷付ける事すら敵わない。

参拝客の対応をしようにも、大体は悠とましろも神と同列扱いだ。かしまられ過ぎて世間話など出来る筈も無い。

そんな訳で、普段は境内の掃除とましろの遊び相手で一日が潰れてしまう。

とはいえ娯楽と言う物が少ないこの時代、遊ぶ方法などそうそう無い。

難しい遊びはましろがルールを理解できないし、体を使った遊び

では文字通り人外の身体能力を誇るましろが圧勝してしまう。

そこで悠が行なったのが、ましろの能力の開発である。

空を飛ぶ事は力ある存在であれば簡単な部類に入るので、能力には数えない。実際に花弥ですら幼い頃から飛べていた。

だが、ましろも神獣である以上何らかの特殊な力を持っていても不思議ではない。

これは、単なる暇つぶし。ふとした思い付きから始めた戯れに過ぎない筈であった。

だが、この事が思いもよらぬ結果を生むことになる。

「ふは〜」

今の時代、体を清潔に保つ方法とは水浴びである。

だが、今裸で悠の太腿の上に座って気の抜けた声を上げるましろが浸かっているのは、紛れも無いお湯なのだ。

無論温泉などではない。諏訪子の作った鉄の器に直接触れないよう木で内部を覆った立派な湯船である。

本来なら、風呂に入るためには当然湯を沸かすために火炊き番が必要とされる。

だが、いま守屋の社務所にいるのは悠とましろだけだ。

ならどうやって火を炊いているのか。それが、ましろの能力の応用による物なのである。

家の外側にある、風呂釜の下に当たる火炊き場では黒い炎が上がっているだろう。

ましろの能力とは、影を司る事だった。

今ましろは影の炎を生み出してお湯の温度を調節している。

勿論、影は元となる何かから発生した物であり、無から生み出すことなどできはしない。

そのため悠が一度火を熾し、それをましろが影で塗り替える事で黒い炎を生み出したのだ。

ただし、そのような事が影の操作で出来る筈が無いのもまた事実。おそらく、ましろの能力とはもっと途方も無い物なのだ。

だが、それをましろは知らない。例え知ったとしても、使いこなせるだけの知恵が足りない。

一応悠は見当を付けているのだが、もしそれが当たっていればおそらくましろは過去現在未来全てにおいて最強の存在である。

今は最初に自分の影の形を変えられた事から『影を操る力』と称して教えており、ましろもそう信じきっている。

影の炎を使う事も悠が発案して試してみたら出来たというだけであり、ましろが他に出来るのは影の形を変えることと影を地面から空中に突き出すことぐらいな物だ。

おそらく教えたらもっと色々なことが出来るようになるだろうが、これ以上無為に力の使い方を与えても厄介な事態を招くだけではない。

永琳が悠に対して慎重に慎重を重ねて接していた頃の事をぼんやりと思い出していた時、不意に髪が引つ張られた。

下を向くと、体を捻ってこちらを見ているましろと目が合う。

「もう出ていい？」

「うん。ちゃんと体を拭いてね」

「はいー！」

湯船から出て、自分の尾を握って水を落とすましろ。そのまま風呂場の外に出て布で体を拭き始める。

風呂という物は別に体を擦らずとも、湯に浸かって手で表面の汚

れを撫でる様にして落とせばそれで済む。

特にましろは待ち伏せをして狩りをする獣だったためか、体臭が殆ど無く、体が濡れる事をあまり嫌がらない。

逆に、風呂を知ってからは自ら一緒に入る事をねだって来るほど風呂好きになっていた。

悠も湯船から出て、浮いた毛を掻き出してから湯船の横にある栓を抜く。

湯船の底の横に開いた穴から湯が流れ出て、傾斜に従い家の外へ通じる穴に流れ出ていく。

それを横目で見ながら悠も体を布で拭く。ましろはもうそこには居ない。居間に着替えに行ったのだろう。

この社務所を造る際に居間と炊事場の他に四人分の部屋と風呂場を造る様お願いした時、ひどく困惑された事を思い出す。

個室という概念自体が無いのだ。当然といえば当然だった。まして、家に風呂があるなど大和でもここだけの筈だ。

水は近くに諏訪湖があるし、湯を沸かすための火はましろに頼る事で成り立っている特殊な物ではあるが。

あらかじめ体を拭く布と同じく用意しておいた着物を被り、居間へ出る。

そこには湯気上げる粥と鍋を並べて三尾を振っているましろの姿があった。

その諏訪子より幼い外見に似合わず、ましろは料理の腕が悠より上だ。

味に五月蠅いだけでなく、終には自分で作ってしまう程にましろは調理された食べ物が好きになってしまっていた。

ちなみに粥は神奈子直伝の神の粥、鍋の味付けは風祝に習った物を自己流にアレンジした物だ。

風呂に入る前に作っておいた物を小さな炎で保温しておくのがいつもの習慣。

風呂に入る前に食べないのは、ましろが食べた直後にそのまま寝てしまいかねないためである。

ましろの隣に座ると、笑顔で器に粥と鍋をよそって差し出してくる。

受け取ってそれを膝元に置き、頭を撫でるついでに耳を搔いてやるとましろは勢い良く湿って萎んだ尾を振り回した。

「いただきます」

「いただきます」

手を合わせて粥を匙で掬う。米と小豆に適量の塩を加えて炊いた芳醇な一品だ。神事ではないので葦は入れていない。

それを口に運ぶまで、穴が開くほどにましろは悠の顔を見つめてくる。

「ん、おいしいよ」

「やたー」

感想を告げると満面の笑みを浮かべて喜ぶましろ。

守矢神社で一番女の子らしいのは実はましろである事を再確認させられる瞬間だった。

「ほら、ましろも食べなよ」

「はい」

促してやるとましろも匙を使って食べ始める。

食事に夢中になっているましろは小動物的な愛くるしさに溢れて

いる。本性の獣は大きいが。

ちなみに、人型になって以来ましろの知能は昔よりもさらに落ちた様にも感じられる。

加えて風祝の教育の成果もあって、普段のましろは素直な幼い女の子そのものだ。

逆に言えば、守矢神社で一番発言力を持つのは風祝であるとも言える。風祝は代々キレるとおっかないのであった。

そういえば、前にキレた風祝がましろの耳を思い切り抓って泣いて謝らせた事があった。とぼちりて悠も思い切り説教されたが。

どうやらましろは危害が加えられない訳ではないらしい。その辺りのルールも調べてみると面白いかもしれない。

なお、ましろの攻撃は悠には効かないが、悠からの攻撃は普通に通る。やはり悠の方が上位の存在であるらしい。

そんな事を考えながら食事を終える。と同時に食器を置いたましろが体を預けてきた。

悠の膝に頭を乗せると、あっという間に小さな寝息を立て始めるましろ。遊び疲れた日は大体こうなる。

その頭を撫でながら、ふと花弥が小さかった頃を思い出した。今やましろは守矢神社の娘兼ペットとして立派に立場を確立している。成長しないので花弥の様に嫁に行ってしまう心配も無い。

食器と鍋はいつも通り後で水に浸けておく事にして、ましろを部屋に運ぶ。

いつも通りのほのぼのとした日々。

さらに時々三人程数が増え、騒々しくも楽しい時間はあっという間に過ぎていく。

そんなある日、中央が遷都すると言う話が流れてきた。

後の奈良時代の始まりである。



## OMAKE

聖杯異変 〵〵幻想郷聖杯戦争〵〵

事の始まりは、入れた物を願い通りの味に変えてしまうという食器が守也神社にあるという噂が人里に立ったことだった。

その噂を遅まきに耳にしたレミリア・スカーレットは、究極の血を求めて従者の十六夜咲夜を連れ守矢神社に侵攻。

同夜、同じく噂を聞きつけた霧雨魔理沙、参戦。

さらに、食事には量も質もついでに酒も求める亡霊少女、西行寺幽々子が魂魄妖夢を連れて参戦。

おまけに退屈の余り珍しい物を求めた蓬莱山輝夜の要望に応えるため、師匠命令によって鈴仙・優曇華院・イナバ参戦決定。

やや不幸な者が一名含まれていたが、これだけなら普段の馬鹿騒ぎで済んでいた筈である。

この程度で異変などとは称される事などなく、まして戦争などという物騒な名前は付きはしない。

だが、外の世界から銃火器を持った人間が参戦した事で事態は一変する。

この噂が立ち始めた頃、一人の外来人が幻想郷に迷い込み、博麗神社を通過して外の世界に帰還していた。

出所不明の調査依頼を橙子から受けた黒桐幹也が博麗神社と幻想郷についての僅かな資料を発見。幹也が両儀式と共に周辺調査に出かけたところ、何の因果か妖怪の山に幻想入り。

大極の具現にして直死の魔眼所持者、両儀式参戦決定。

さらに、インターネットを通じてこの食器について知った情報を琥珀はとある人形師に調査を依頼、得られた情報をシエルにリークしていた。

冬木における聖杯は願望機であり、ならば超限定的とはいえ願望機としての機能を持ったこれも聖杯である可能性は捨てきれない。

聖杯とは神の子の血を受けた杯であり、聖堂教会としてはなんとしても確保しなければならぬ聖遺物である。

という建前を述べる至高のカレーを求めたシエルは、琥珀の要請により武装提供と引き換えにメカヒスイを連れて博麗神社に向かう。埋葬機関第七位弓のシエル、及び愉快型町内制圧兵器メカヒスイ参戦決定。

そして、その成り行きを覗き見ていたネコアルクは、情報がある特殊な存在に猫踏んじやった式圧縮言語による秘密通信を使用。

情報をリークされたセイバーライオンは至高の骨付き肉を求め、ネコアルクと同盟を組む。

さらにその通信を傍受したルビーがイリヤスフィールを言葉巧みに幻想郷に誘った。

三者三様の思惑が裏で蠢く中、戦力を揃えたネコアルクは理不尽にも隙間を引き裂いて幻想郷への入り口を作る。

ネコアルク、セイバーライオン、プリズマイリヤ、及び美遊・エ

ーデルフェルト、クロエ・フォン・アインツベルン参戦決定。

さらに、迎撃に現れた八雲紫の能力とイリヤ達の第二魔法が競合した結果、隙間内に並行世界間の捻れが生じ、そこからイリヤと美遊がかつて異空間で出会った二人の魔法少女が現れて ?

小学五年生版高町なのは、フェイト・T・ハラウン参戦決定。

この夜、幻想郷をかつて無い混沌<sup>カオス</sup>が襲う。  
果たして守矢神社は原形を保ったまま朝日を迎えることができるのか。

Moriya / stay night

始まりません。

## 第十二話 悠とましろの何気ない一日（後書き）

妄想っでするだけなら楽でいいですね。こんな実際に書くこととしたら死にますが。

なお、一次創作短編用のお題も随時募集しております。

### 第十三話 平穏な日々と流れる時代（前書き）

久々に創作意欲が湧いたので、一気に書き上げました。

が、今回内容が薄いにも関わらずOMAKEは無しです。申し訳ありません。

理由は、またさらに連載作を増やすからです。

つい思い付いて書きたくてしょうがなくなってしまったので、もはや書かずにはおれないのです。

こればかりは変人の所業だと諦めてください。

### 第十三話 平穏な日々と流れる時代

この頃、中央の動きが慌しい。

せつかく平城京に遷都したのに、天皇があつちこつち住処を変えたり、度々内輪もめしたり。

諏訪国などといって信濃国から一部独立させたりまた戻したりなどこちらにまでその余波が来た。

とはいえ、それはあくまで人間側の話。守矢神社で悠悠自適に暮らす人外組に影響はそうなかった。

懸念事があるとすれば、善光寺がかなりの信仰を集めているという事だろつか。

別にその所為で神奈子や諏訪子への信仰が薄れる事は無かったし、仏教側の神霊がちょっかいをかけてくることもなかったのだが、食料的な問題が発生したのだ。

仏教は無闇に生き物を殺める事を禁じている。

仏僧ならともかく普通の民にまで殺生を禁じている訳ではないが、それでも獣や魚を殺し過ぎてはいけないという考えが広まっていた。おかげで供物の中から肉類が減り、むしろが料理の幅が狭まったと愚痴を零すようになっていた。

尤も、まして元は獣。雑食ではあるが、狩りはお手の物である。

以前のように木の上で待ち伏せなどせずとも、獲物は空を飛んで探せばいい。

見つけ次第頭上から襲い掛かり、獲物の影を操って下から打撃を加えてから諏訪子に貰った鉄の包丁で止めを刺す。

なぜ影を使った攻撃が打撃であるかという点、影を刃物に変化させるという事をましろが考え付いていない所為である。

元々ましろ自身が異常な防御力を誇るため、過剰な攻撃手段は持たせない方がいいと判断した結果、悠達はそれを指摘する事もなかった。

しかし、最近になってここ以外の地がやや不穏な動きを始めている。

近年では今まで仏教を強く推し進めてきた事が仇となり、各地で寺社勢力が強まって問題になっていているらしい。

とはいえ未だ莫大な力を有する神が君臨するこの地では、善光寺の連中も凶に乗るわけにはいかなかった。

こちらは崇り神と軍神のコンビ。対する仏教側の神霊は欲に駆られた蛮行を許さない。

かくして守矢神社は今日も平穩そのものだ。ただし、参拝者は少ないが。

諏訪大社が信仰を集めすぎて、守矢神社の事は供物を捧げてくれる民以外には忘れ去られつつあるのが原因である。

まあ、守矢神社の祭神である諏訪子は諏訪大社の上社二つでも祀られているので悪影響は無し。むしろ近頃では国の外からも上社に信仰が寄せられ力が増している様である。

中央の開墾政策により田畑が増えたため、蛙が増えたと喜んでさえいる。

その一方で、神奈子は大いに不満そうだった。

中央の人間に興味は無いが、仏が神より優遇される外の風潮が気に入らないらしい。

実際国内でも人間の霊的素養は減少する一方で、存在の薄い新緑が弱い神霊を見えない人間は、神籬ひもろぎや磐座いわくらよりも仏像を崇める傾向があった。

とはいえ、これはもはや時代の流れであり、抗えない摂理そのものである。

人間は豊かになる程それを支える神々への感謝を忘れ、豊かになったからこそ増大した負の念より生じる妖怪を恐れるようになった。やがて人間の技術が進歩するに連れ、神の御利益が不要に成り、いずれは自らの恐怖の具現である妖怪さえも自らの手で乗り越えてしまっだろう。

神祕が駆逐され人が全ての頂点に立つ世が必ず来る。

かつての永琳達がそうであったように。

しかし、栄華を極めた後に待つのは衰退である。

永琳達は穢れ無き地とやらに旅立ち、この地には力なき人間が残された。

ならば、やがて人が力を失った時、また神々が必要とされる時代が来るのだろう。

人という種が滅ばぬ限り、万物が流転する以上これは必然である。

そうは言っても、神霊は人の信仰なくして力を振るえない。

信仰が失われた神霊は消滅こそしないものの、もはや何の力も持たず、人と関わる事が不可能な身になってしまう。

諏訪子はそれをも良しとするかもしれないが、少なくとも神奈子は納得しないだろう。

彼女もまた、人と共に在る事に喜びを見出した神である。

そのためか、彼女は祭りなど人と騒いでいる時こそ他のどんな時よりも生き生きとしていた。

だからこそ、対策を練らねばならない。

今はまだ人間と触れ合える。

それだけの力がまだ人間に残されている。

だが、それを食い留める手段が無い。

最も有効なのは人間の技術の進歩を止める事だ。

だが、それは実質的に不可能と言っている。

神の力だけで人間を統べるには、世界は広すぎた。

諏訪王国が大和王朝に敗れた事実があり、そしてその大和王朝も現在大陸の国に劣っている。

外敵がいる以上人間は現状のままでは安心できない。

例え戦う事がなかったとしても、外からの技術の流入は止められない。

必要が技術を発展させ、人間が可能とする幅を広げ、神霊に頼る事は必然的に少なくなっていく。  
ならば、どうするか。

創ればいい。

都合のいい世界を創り上げる？ 人に依存する神霊を人の代わりに支える世界の創世？

夢物語もいいところだ。元より不完全なる人の精神では完全な世界など想像できる筈が無い。必ずどこかに歪みを孕んだ歪な物しか出来ないだろう。

変えてしまえばいい。

神霊という存在からの逸脱？ 新たなる存在への変化？

自分の中に浮かんだ考えに吐き気すら覚える。

そんな事、二人が望む筈が無いし、何より二人が変貌してしまう事が怖い。

奇跡ですら条理に従った力である。

それを歪めてしまう力の行使の反動がどのような事態を招くかな

ど想像すらできない。

悠の内側に潜むのは、この世界を侵す異法則。

条理の内に生きる事を良しとする悠には決して理解できない物だ。当然、理解できない力を使おうものなら制御など出来る訳は無く、流出した異法則は自分より下位次元に属する存在を上書きする。

止める方法があるとしたら、既に汚染された次元を更なる上位次元法則を利用して破壊するしかない。

つまり、異法則に侵された世界ごと消し去る以外に無いのだ。

そしてそのような手段が取れる者はこの世界にはいない。

この次元に発生した存在がさらなる上位次元にシフトするなど、イレギュラー中のイレギュラーだ。

そして、そうなつてしまえば己を保てない。

上位次元にシフトした瞬間、己の存在をその次元の理によって変革されるからだ。

変わり果てた存在が元の目的を果たせる訳も無く、つまり上位次元の法則を利用して悠を消そうという方法は成立しない。

だが、その異法則は条理を覆す可能性の宝庫でもある。

おそろくだが、悠は既にこれを運用している。

その結果が自らに害を為す力の消去であり、食べる事も寝る事も必要としない身体の実現であり、不老不死と言えなくもない生の謳歌である。

さらに言えば、現在のましろに影響を与えているのもこの異法則だ。

しかし、意識しての運用は難しい。

現に、悠自体は空を飛ぶことも人を超えた力を振るう事も出来ない。

無自覚のままに使っている内は条理を侵さない程度の影響で済んでいるが、それも歪みが悠の目に入る範囲に発生していないだけなのかもしれないし、気付かないうちに既に過去ごと変革が終わっていたのかもしれない。

この力を利用できる可能性を持つ者は二つ。

すなわち悠に近い上位次元の力を振るうモノ　　ましる、またはこの世界に堕ちる際に現れたあのラクガキのような存在。

もしくは、もう二度と会うことは無いであろう永琳、またはそれに追従するレベルで悠の異法則を理解できる頭脳を持つ者。

前者は悠に限定的ながら干渉できる存在であり、後者は悠を思考誘導する事によって無自覚のまま力を行使させ得る存在だ。

思い返せば、永琳は会話によって悠を支配していた気がしてならない。

ならば、彼女以上の頭脳を持つ存在ならば同じく悠を利用する事も可能だろう。

そこまで思考を巡らせてから、大きいため息をつく。

結局悠が己の手だけで何かを為す事は出来ない。その事実に変わりは無い。

どうしても神奈子と諏訪子の存在を保ちたいならば、外部干渉を受けない小規模の閉鎖社会を築くのが一番現実的だ。

尤もそれは外部から見れば異端な存在であるのは間違いない。良

くてカルト教団扱いといったところである。

そんな悠の悩みを外に、目の前の神扱いされている連中は酔っ払って雑魚寝していた。

大陸の酒と地酒をチャンポンにした物を木製ストローで飲まされ、早々に酔い潰れたましろは腹を神奈子の枕にされてやや苦しげな顔で眠っている。

風祝の少女がましろの尾をに頭をうずめて眠っているのも、ましろがうなされている原因の一つだろう。

そして諏訪子はというと

「ゆび〜」

「はいはい、ここにいますよ」

悠と抱き合って眠っていた。

こちらは意識があるのか寝言なのか、しきりに悠の名を呼んでは胸に頬ずりして甘えている。

名を呼び返して抱きしめてやったり頭を撫でてやると頬を緩ませてしばらく寝付くのだが、悠が眠ろうとすると急に寂しがつて甘えてくるので寝るに寝られない。

事の発端は風祝の少女にある。

遂に善光寺の連中と一戦やらかしたらしい。

とはいえ相手は大した法力を持つわけでもない、雑魚妖怪にすら数人がかりで何とか拮抗できる程度の人間。

片やこちらは祀られる風の現人神。

もはや特別な力を使うでもなく、強化した身体能力を使い、拳でノシて終わりである。

問題だったのはその後の事だ。

あちら側はさらに作物を寄進しろと主張していたのだが、寺の荘

園で働く人間だけならともかく全ての民に命令して回ったのだ。

昨今の時勢の中で危機感を募らせるのは分かるのだが、神社に供物を奉げている民がこれ以上の搾取はごめんだと反発。

流石にここで譲っては信仰がさらに薄くなるのは確実であり、頭を悩ませる神奈子の為に風祝が暴走したのが事の実体だ。

現状中央は親仏派なので事を公にするわけにもいかず、見かねた諏訪子がミシャグジで祟った上で枕元に立ち、寺の人間を脅して何とか事なきを得た。

だが、今度は諏訪子が拗ねた。

自分の子孫である筈の風祝が完全に神奈子の方に懐いているせいだ。

ついでに暴走した事を神奈子にたしなめられた風祝も鬱屈としてしまい、神奈子が二人に酒を飲んで嫌な事は忘れようと提案。

しかし普段から人間の為にと精力的に動いている神奈子に不満が溜まっていない訳もなく、結局全員で自棄飲みする事態に発展。

理不尽に絡まれたましろは耳や尾をいじくり倒され、今やあの様である。

悠も拗ねた諏訪子の酌に付き合い、延々慰めた拳句現状に至っている。

せめて胸中の小さな愛妻を慰めようと抱きしめる。

だが、その次の瞬間

「ひゃうっ!?!」

胸に感じた熱くぬめった感触に思わず悲鳴を上げる。

見れば、寝巻き用の着物の間から覗く肌を諏訪子が舐めていた。

慌てて身を離すものの、途端にその寝顔が陰しくなる。

「ゆーっ……」

「大丈夫、ここだよ」

再び抱き寄せると彼女はにへら、と破顔して、再びその顔を胸にこすり付けてくる。

子供のような愛らしさと女性としての愛しさに胸がいっぱいになり、彼女の身体を抱き寄せて口付けを交わす。

そして胸の中の温もりをしっかりと抱きとめて目蓋を下ろした。

そして翌朝。

悠に抱き締められて眠る諏訪子に、目を覚ました神奈子が嫉妬した。

さらにそこで諏訪子が勝ち誇った笑みを浮かべたため、今度は神奈子が拗ねて迎え酒に突入。

そのままもう第何次だか分からなくなった諏訪大戦……土着神話対中央神話……が勃発した。

しかし、神の仲裁が仕事の筈の風祝は二日酔いでダウン中。

二人の喧嘩はヒートアップし、最後には疲労困憊した拳句なぜか不気味な笑みで握手を交わす謎の結果に終わる。

その夜、悠は結託した二人に搾り取られた。色々と。

そして中央では寺社勢力を厭った結果、平安京に遷都が決定される。

神霊の力が失われ、陰陽道が宮廷から全国に広まり、同時に妖怪が跋扈する時代が幕を明けた。

後に平安時代初期と呼ばれる事になるこの時期、守矢神社にも新たな変化が訪れる事を知る者はいない。

## 第十四話 神霊世界の激動（前書き）

別の作品の番外編に力を注ぎ過ぎたため、しばらくOMAKEは無しとなります。

なお、出来るだけ次話は早く上げたいと思います。

## 第十四話 神靈世界の激動

平安京たいらのみやこへの遷都が済んでから更なる時が流れ、この国の神秘の在り方は今大きな変革を迎えていた。

人の靈的資質の退化。

それに伴う信仰の低下。

さらにその事が原因の神靈の弱体化。

そこまではいいはいい。それは既に神奈子でさえも覚悟していた事だ。

例えそうなつても、形は変わるが諏訪子達が人と歩む事に変わりはなかった。

だが、想定外の事態が起きる。

その異常の発端は、やはり中央から始まった。

中央における神靈の零落は凄まじかった。

神の声を聞き届ける資質を持つ者は激減し、神の指示や恩恵は今までの様に行き渡らなくなる。

加えて、陰陽道の浸透が状況の悪化を加速度的に進行させた。

陰陽道とは、大陸より伝わった万物を陰と陽に区別する陰陽説と万物は木火土金水のどれかに属するとする五行説が、日本において大きくアレンジされたものだ。

陰と陽、さらには五行によって万象を説明しようとする陰陽五行論に加え、星や方位、場所や暦、さらには時刻によって吉凶を読み取るうとする考え。それが陰陽道である。

しかし、人が力を得て呪術や式神などを使役出来るようになるのはまだ先の話。

この時代において、現在全国に広まっている陰陽道とは後の世において風水と分類される考えにあたる。

結局何があつたのか簡潔に略すと、元々この国にあつた思想が新しい思想に上書きされてしまったという事だ。

神霊信仰が陰陽道という新興宗教に乗っ取られた、とも言える。

この結果どのような事態が引き起こされるか。

今まで神霊によって引き起こされてきた結果が陰陽道によって解釈されてしまい、神霊の力はかつてとは比べ物にならない程弱体化したのだ。

人の技術は進歩する。それは事実である。

だが、その進歩の速度は、神秘の減衰に対してあまりに遅すぎた。人々が神霊の加護によって得られた恵みは陰陽道によって解釈され、結果として人は神への信仰を失い、同時に神霊は人に恩恵を与えられなくなつた。

完全に神霊の力が無くなつた訳ではないが、その恩恵の欠落を埋める程に今の人の知識や技術は発達していない。

結果、今の平安京は、その名とは逆に安寧が失われた都となっている。

伝え聞いたところによると、その混迷ぶりは悲惨極まるものであった。

かつて陰陽道が宮廷にのみ使われていた頃に比べ、今や全ての貴

族が陰陽道による吉凶を何より優先してしまっている。

例えば、運氣が悪い日に何処かへ行く場合、一度別の場所に行つてから方角を変えて向かう方<sup>かたが</sup>違え。

その方角で行なう一切の活動が禁じられその方角に立ち入れない方<sup>かた</sup>忌み。

そのような大事<sup>おおいと</sup>でなくとも、単なる生活の中の様々な所作にも様々な呪い事が含まれている。

爪を切る日が手足別に決められていたり、徹夜をしなければならぬ日や沐浴をしなければならぬ日があるなど細々とした事に制約が付いて回っているのだ。

その人間が自分達で勝手に決めた非効率過ぎる生活は、悠達から見ればあまりにも愚かな行為に映った。

確かに、人の思いは力を生む。

人の祈りが神霊を生み出した様に、この思想も徹底すれば人自身が力を持つようになるだろう。

だが、それは思想の浸透だけでは成立しない。

人が新たな神秘を手にする程に思念が積み重ねられるには、まだまだ時間がかかる。

当然、そうなるまで人は自身の力のみで生きなければならない。

だが、そのための知識はあまりにも小さ過ぎた。

神の加護や指示が行き渡らなくなれば疫病や災害に対するの対抗手段が失われ、自然と死者は増加する。

さらに、今の都では死体は一箇所に集められて山積みになされていたり、川に流したりして処理をするらしい。

当然、疫病はその死体を喰らう動物や水によって媒介されてさらなる広がりを見せ、より多くの死体が出来上がるという悪循環を生み出している。

本来なら人に指示を出して適切な処理をさせていた神霊も、今や

ごく一部の人間にしか声を伝えられず、状況の悪化を食い止められない。

加えて陰陽道は発展途上の概念であり、様々な解釈を生み出している。

かつての人の恐怖は神々へと向けられ、それは畏れとなって神霊の力となった。

神の荒魂を敬い宥める事により災厄を減らし、また和魂を祀る事で様々な恩恵を得てきた。

ところが、今や人は自分達で生み出した迷信や噂などの実在しないモノ、また死霊など様々な存在への恐怖を募らせ、結果としてそれを利用した妖怪の成長や新種の妖怪の誕生、力を持つ怨霊を生み出してしまっている。

未だ力を持つ神霊や法力を持つ人間が抵抗しているものの、今の中央はかつて神霊が守護していた時代に比べれば、まさに魔都と呼ぶのが相応しい状況にある。

いずれ陰陽道が完全な理論として確立し、人がそれを以って怪異に立ち向かう日が来るだろう。

だが、そうやって人が力を持てば、神霊への信仰がさらに失われることは想像に容易い。

今はまだ、怪異は曖昧な存在であり、はっきりした力タチを持たない脅威で済んでいる。

だが、このまま怪異が力を増していけばその限りではない。

まだ迷信の類いである鬼や天狗という強力な存在が、現実に確かな姿を持って誕生してしまうだろう。

勿論、諏訪の地にも権力者を中心に陰陽道の思想は広まっている。人の霊的資質は失われる一方であり、信心深い者でも直接諏訪子や神奈子を認識できる資質を持つ人間は少なくなつた。

例えば法力を持つ者であっても、彼らは仏法の力を振るう者であり、神霊を視ることが出来る才を持つ者は少ない。

いや、彼らの中に神奈子や諏訪子をきちんと認識できる存在がいるのは、彼らがそういう素質を持っているためだけではなく、諏訪子と神奈子が肉を持った神霊だからである。

今この地に現れる妖怪は、存在が不安定な魑魅魍魎か、単に本来より強力になつただけの獣や怨霊ぐらいなモノで済んでいる。

諏訪子、神奈子の弱体化もそれ程進んでおらず、ましろに至つては一切力を減じていないため、それらを狩る程度は問題ない。

だが、個としては弱くとも、迷信などの広がりによる数の増加まではカバー出来ない。

結果、怪異による死者の総数は増え、かつてよりは妖怪の質も向上している。

力を持つ存在や複雑な噂や迷信、伝承が実体化するには、必要な想念が積み重ねられるまでに時間がかかるだろう。

だが、一旦そういう存在が生まれてしまったなら、完全な対処は不可能になるだろう。

生まれるまでにより多くの想念を積み重ねた存在はそれだけ強大な力を最初から持っているし、複雑な噂や迷信、伝承から生まれた妖怪はそれに従つた特殊な能力を持って生まれる可能性が高い。

実在してしまえば、彼らが自らの存在を誇示する事でさらに力を蓄え増えるのは確実だ。

それに対して、もう神霊は衰退の運命を避けられない。

遠い未来には、東風谷の縁者においてでさえ、風祝以外の者も諏訪子や神奈子を認知できなくなる時が来るかも知れない。

神は人と共に歩む事を望んだが、人は神から離れて行ってしまったのだ。

そして、今。

諏訪子たちへの信仰が根強いこの地域では、悠の持つ知識が大いに役立つている。

長らく続けている死体の土葬、及び火葬による疫病の蔓延予防。

熱を加える事などの衛生知識。

加えて諏訪子と神奈子の尽力によつて飢饉の被害も抑えられた。

それでもやはり不幸は増え続け、今までは状況の改善を求めさらなる信仰へと繋がっていた思ひは、今や怪異の温床になっている。

特に知恵を持つ獣が増え始め、中には最初に会った頃のましろの様に人語を解す獣も増加している。

これは、そんなある日の事だった。

「……………ましろ？」

自分でも怪訝に思える程奇妙な声が口から出る。

それに対し、ましろはただフルフルと首を横に振った。

二人の前に横たわっているのは、ましろが運んできた妖怪に襲われた犠牲者の死体。

妖獣を退治したましろが、それに喰われていた女性の死体を持って帰って来たのだ。

基本的に妖怪は食用にならない。

例外として物凄く美味な妖獣もいるらしいが、基本的に妖怪の肉は人間に悪影響を与えやすい。

だから妖獣を退治した場合、他の獣が食べる事で妖獣化しないよう火葬して埋める事になっている。

だが、今日は違った。

死体の処理を幼獣の退治を依頼した人間の村に頼んで、ましろはこの死体を埋葬せずに持って帰ってきた。

理由は、この死体を見れば明白だ。

腰より上の無い下半身だけのその死体は、徐々に空になっている内臓や肉、骨が再生している最中である。

この様子からまだ生きているとは推測できるが、こうなってまで人間に擬態できるような存在がいるとも思えない。

ならば、これは最初から人型で生まれた不死性の高い妖怪である可能性が高い。

もしそうなら、妖怪達は悠の想像よりさらに速く進化している。

おそらく、人型ならば会話が成立する可能性は高いだろう。

「はつきり言って気色悪いな」

「うん……」

悠の言葉にましろも全面的に同意のようで、力なく首を振る。

ましろも昔は生で人間を食べてい筈だが、死体が蠢いて再生している姿はやはり不気味らしい。

「ましろ、諏訪子と神奈子を呼んで来て。大至急」

「はい」

ましろは逃げ出すように諏訪子が今日居る筈の上社に飛んでいく。悠も出来れば蘇っている最中の死体と一緒になんてごめんだが、かといって放置しておくわけにもいかない。

とりあえず守屋の社務所へと死体を運び込む。

尤も、生きている以上死体とは呼べないのかもしれないが。

死体は四半刻ほどで首より下が再生していた。

意識を取り戻した時に裸で男と二人きりというのは気まずいので、取りあえず身体を布で覆い、後ろを向いておく。

それまでもあまり見てはいなかったが、人間の頭部が再生する様子などは特に目にしたくない。

肉体の再生がほぼ無音で行なわれているのは、不幸中の幸いだったと言えるだろう。

「ん……」

「あ、気がつい、た……？」

背後から呻き声上がり、振り向く。

視界に入ったのは、白い髪の少女が床に手を付いて上半身を起こし、同時にかけていた布がずり落ちる瞬間だった。

双方、硬直。

悠は少女の裸体を目にした気まずさから。

少女はおそらく現状を把握出来ないから。

互いに相手の顔を見つめあい

「ご、ごめん！」

「ひゃああああ！？」

即座に土下座をすると同時に少女が大きな悲鳴を上げた。

少女は人間にして十五歳程度の外見で、やや大きいが神奈子の服を着てもらった。

人間にして、というのは妖怪だから ではない。

少女は人間だった。

ただ、蓬萊の薬を飲んだせいで不老不死になってしまったそうだが、自分と同じ白い髪の少女の噂を偶然耳にして、興味を持ったため諏訪の地に立ち寄ったらしい。

その名は藤原妹紅。かつて中央で名をはせた貴族、藤原鎌足の孫であると少女は言う。

父を誑かした女が帝に送った薬を奪い、それを飲んだせいで髪は白く、瞳は赤くなってしまったそうだ。

「うん。とりあえず経緯は分かったけど まあ、なんだ。よくこんな所に来る気になったね」

「いや、私はこの髪と目で年も取らないから、ずっと隠れ住むしかなくて……」

「ああ、そういう事じゃないよ」

少女の言葉を否定する。

すると少女は不思議そうに首を傾げた。

「最も高い霊山に住む木花咲耶姫。その女神の言った八ヶ岳はここから近い所にあるんだ」

「……こそ」

「本当だよ。まあ、自分の山より高いからって理由で八ヶ<sup>アレ</sup>岳を砕いたのもその女神なだけけど」

教えられた事に呆然とする少女。

無理もない。

彼女が蓬莱の薬を飲む機会を作ってしまった女神。

そしてその女神が蓬莱の薬を処分するように言ったのが八ヶ岳なのである。

何らかの因果を感じずにはいられない。

「まあ、ゆっくりしていきなよ。君をここに連れてきたのは、多分君の探していた子だから」

「そうなんですか？」

少女が問い返したその瞬間。

社務所の引き戸がぶち壊れかねない勢いで開かれた。

「遂に人型の妖怪が出たって!？」

「さあ、表に出な! きつちり上下関係叩き込んでやるよ!」

喧嘩腰で乗り込んできたのは諏訪子と神奈子。

その後ろでにっこりと笑いながらましろが立っている。

「いや、妖怪じゃなかったから。ほら」

闘志むき出しの神二人に怯えて背に隠れた少女を前に出す。

そして三人とも少女によって来てその体をぺたぺたと触る。

あまつさえその腕を舐めているましろの白い髪 とその頭にピ  
ンと立っている獣耳を、少女はやや呆然としながら眺めていた。

「うん。妖気はないね」

「ましろ、どうだい？」

「嫌な味じゃない」

二人から警戒する様子は消える。

同時に少女を後ろから抱えて三人から遠ざけ、聞いた限りの情報を伝えた。

「ああ、あいつ見た目は良いんだけど、性格悪いからねえ」

「で、噂の子と会った感想はどうだ？」

「あ、はい。すごく綺麗な白だと思います」

当時の八ヶ岳の破壊を思い出してか呆れた様に呟く諏訪子と、構わず少女にましろの感想を求める神奈子。

少女の答えは当然だろう。ましろの毛は初めて会った時よりも、神獣となつてなお美しくなっている。

「ほめられたー」

「ああ。よかつたな」

ましろは自分の毛色を褒められて気を良くした様で尾を振り回す。その頭を撫でてやりながら、少女の方に顔を向けた。

「なあ、しばらくここに住まないか？ 僕も不老不死みたいなものだし」

「え？」

きよとん、とする少女。

だが、ここなら彼女は誰にも迷惑をかけずに済む。

そもそもここで暮らしている悠達は神の眷属扱いのため、今まで迫害されるどころか敬われてすらいた。

今更そついう存在が増えたところで文句は出ないだろうし、人ならざるモノとして恐れられる事はない。

尤も、一昔前なら少女は化物扱いではなく神扱いされていたかも

しれないが。

何にせよ、少女にこのまま一人旅をさせるわけにはいかない。

今の情勢は良くないし、妖怪も増加傾向にある。今日のように喰われていた様では危なすぎて送り出せない。

ここの事情を一通り説明すると、少女は居住まいを正して深々と頭を下げる。

「よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

こうして、守矢神社に居候ができた。

なお、風呂とは基本的に寺の施設であり、蒸し風呂だ。基本的に仏僧が身を清める他、病人の治療目的で使われるものである。

奈良時代は貴族も風呂という設備を持つてはいなかったが、少女は放浪している内に天然の温泉に入った経験もあるらしい。

それでも個人の、しかも貴族の屋敷の様に巨大でもない家に湯に浸かる方式の風呂が有る事にはやはり驚かれた。

さらに、ましろの料理を口にしたときには突然泣き出して全員があたふたする羽目になる。

自分の事を知った上で、こうして受け入れられたのは初めてで嬉しかったそうだ。

なお、居候の存在により夜の営みの機会がほぼ潰された事を、女性としての義憤から現風祝の母親によって悠が大いに叱られ、言葉で散々に心を抉られたのはまた別の話。

この時、この純真な少女　妹紅があのような変貌を遂げる未来など、誰一人想像していなかった。

## 第十四話 神霊世界の激動（後書き）

時代考証の為、主役達の出ている部分が少ないのはどうか御容赦下さい。

第十五話 運命の地への勧誘（前書き）

守矢神社の幻想入りフラグを建てる。  
ただそれだけのお話です。

## 第十五話 運命の地への勧誘

妹紅が守矢神社に居ついて五十年余りが過ぎた。

陰陽道は予想以上の浸透を見せ、今では呪術を使うことが可能な人間も現れている。

とはいえ、それらの人間 陰陽師の仕事とは、吉凶を判断し怪異の危険を避ける事に限らない。

権力者同士の抗争。すなわち人が人を呪う事態の発生である。

おかげで中央の様相はなお混沌としたものになり、怪異はさらに力を増している。

今はまだ怪異に対するの対処を法力を持つ仏僧が行なっているが、そこに陰陽師が肩を並べるにはまだ早い。

ちなみに、妹紅は陰陽道を扱う才能を持ち合わせてはいなかった。おかげで、基本的に妹紅は悠と二人で守矢神社の管理と家事を担当する事となり、特に料理スキルはましるによって悠以上に鍛えられている。

そこで、妹紅に対抗意識を燃やしたのが神奈子である。

妹紅が悠に懐いているのを察知した彼女は暇を見てはましるに料理を教わり、神の粥に代表される一部の料理の腕はもはやましるを上回るまでになった。

ちなみに寝る時は、悠を挟んで神奈子と諏訪子と一緒に寝るようになっていた。

一方妹紅はましるのモフモフな尻尾に包まれて寝るのが気に入っていたらしい。

無論今のこの国に安息日など無く、神奈子の毎日は下社の祭神と

して毎日仕事に追われている。

それでも妹紅に悠を取られまいと暇を見繕っては頑張る神奈子のいじらしさは、諏訪子と妹紅に温かい目で見守られていた。

そんなこんなで、神奈子が守矢神社の第二のお母さんのようなポジションを手に入れようとしていたある日の事。

風呂と夕飯を終えて団欒の時間を迎える筈だった守矢神社社務所では、今までにない程に空気が張り詰めていた。

横一列に座するのは緊急招集を受けた風祝を含める守矢神社一同。囲炉裏を挟んで相對するのは、華美過ぎずしかし高貴さを持った絹の着物に身を包んだ金髪の女性。

諏訪の地に初めて現れた、完全に最初から人型をしている妖怪である。

「では、改めまして。日本の各地を巡り見聞を広める一妖怪、八雲紫と申します」

帽子を脇に置き、正座からの堂に入った礼。

表面上は恭しい態度を取っているようには見える。

礼の前後もその裏が読めない笑みを崩す事がなければ、の話ではあるが。

「で、妖怪が何でわざわざ私達の所に来たんだい？」

「見聞を広げるためでございます。特にこの地には神と子を生し、未だ生き続ける古き人間が居ると聞いたものですから」

儼然とした神奈子の問いに、紫は笑みを崩す事なくすらすらと答える。

その臆す事のない様子、常に優位性を保ち続ける態度に、悠はどこか奇妙な懐かしさを感じていた。

「へえ。私達は神であんたは妖怪だ。殺されるとは考えなかったの？」

「だからこそ今なのです。本来なら噂を耳にした時からこうしてお会いしたかったのですが、あの時代では私ごとき、逃げる事すら適わなかったでしょうから」

諏訪子に好戦的な笑みを向けられて、しかしやはり笑みを隠す事なく、今なら逃げ延びられると言外に告げる紫。

だが

「嘘だな。戦いになっても皆殺しに出来ると踏んだから、こうして正面から来た。違うか？」

「はい、その通りです」

悠の毒づきに、やはり余裕の笑みを見せながら紫は答えた。

瞬間、神奈子と諏訪子、風祝の三人が殺気立つ。

「御安心を。そのような心算、こうして対面した事で失せました。

ええ、認めましょう。私では敵わない。人の形をした、人の形に固定された貴方。その正体は一体『何』でしょうか？」

「それはこっちの台詞だ。紫って言ったな、アンタ。本当に『妖怪』か？」

紫と悠の共に笑みをたたえた睨み合い。

いや、探り合いと言った方が正しいか。

共に正体不明の身にして、如何に話の主導権を握るかという水面下での争いは始まっていた。

「しかし、よく分かったな。人の形をしているだけの人外と言われるならまだしも、人の形に固定されていると理解するとは。よほど特異な力を持つと見た」

「いえ、御謙遜を。その内側に閉じ込められた異質に、恐怖を抑え切れないのが本音です。ところで、なぜ私を妖怪では無いと否定するのか、その理由をお伺いしても？」

丁寧な言葉遣いの裏で相手の正体を探り合う。

表面上は笑みを浮かべているが、この時点で二人は目の前の相手を己が敵と判断した。

「まだ妖怪の定義自体が曖昧な物だけど、アンタは伝え聞く妖怪とは根本が違う。妖怪は現象、事象、伝承に人間がカタチを与えた、人を害する存在だ。だけど、アンタは自然どころか人間からも独立している、人や妖怪よりもさらに高位の存在　違うか？」

その問いに、紫の笑みが一瞬揺らぐ。

そこに垣間見えた感情は、驚きや畏怖ではなく、どこか歓喜染みだ物の様に感じられた。

そして、彼女の笑みはさらに深くなる。

尤も、目を付けられた側の悠としてはあまり嬉しい事ではなかったが。

「さて、本質はどうあれ、この身は人に妖怪と呼ばれます。ならば、妖怪として振舞うのが筋というものでしょう？」

「まさか。在りたい様に在る。それこそが、意志を持つ生き物に許された特権だろう」

「まあ、それはとても残酷な事ですわね」

目の前の彼女の笑みは、最初とは本質ががらりと変わっていた。あの崩れぬ笑みは常に優位性を保つ為の物。

ポーカーフェイスを貫く限り、深謀遠慮な目の前の存在は決して侮られる事は無いだろう。

だが、今は違う。

彼女は純粹にこの会話を楽しんでる様に見える。

それは、彼女が人間にも理解できる存在として振舞っている事の証左だ。

「人が いえ、人でなくとも、在りたい様に在るという事は難しい。誰もが自分の為に行動している。にも関わらず、誰もが己の行動に他者への配慮を含まずにはいられない。その行動を縛る存在を、人はしがらみと呼ぶのですわ」

「 いや、参った。降参だ」

「悠!？」

両手を挙げて降伏を宣言すると、隣に座っていた神奈子が驚いたようにこちらを見る。

だが、それに対して悠は首を横に振って答える。

思考速度。深い知識。本質を見抜く目と理解の早さ。

間違いなく、目の前の存在は格上だ。

存在として高次であるのは悠の方だが、精神面においては紫の方が数段上をいつている。

「神奈子達も警戒を解いて。彼女がこの諏訪の地に迷惑をかけないと約束してくれるなら、ぜひ心行くまで話し合ってみたい」

「あら、勿論約束いたしますわ。この様な機会、滅多にありませんもの」

「悠がそう言うなら……」

「んー、じゃあ私も参加ー」

悠の申し出に紫はすぐさま応じる。  
神奈子はしぶしぶながら、諏訪子はむしろ楽しげにその提案に同意する。

「よし、決定。妹紅、お酒出してきて。ましろはつまみを頼む」

「は、はい」

「はい」

話に置いて行かれていた二人は、悠の指示を受けて台所に移動する。

展開に付いて行けなかった風祝は神奈子に説得を任せ、悠は諏訪子の方に顔を向ける。

「諏訪子はやけに素直だな」

「ま、私は悠を信頼してるからね。このまま腹の探り合いじゃ勝てないから、腹割って話し合おうって事でしょう？」

初めて会った頃と比べ、飛躍的な成長を見せた諏訪子の肩に手を回して抱き寄せる。

愛らしくも大きな帽子で頭を撫でる事が出来なかったからなのだが、何を勘違いしたのか、諏訪子は悠を抱きしめ返して頬を緩める。

「あら、仲睦まじいのですのね」

「あ、ずるいぞ諏訪子！」

紫の言葉に反応した神奈子が悠に抱きつき、自分の方に引き寄せようとする。

対する諏訪子もいつものノリで神奈子に対抗し始めた。

そうして守屋の二柱に翻弄される悠の姿を、紫は楽しそうに眺め、時には煽って場をより混沌とさせる。

そこには、酒と盃を持って戻ってきた妹紅が唾然とするほどに、始めはあれほど張り詰めていた空気が弛緩しきった、いつも通りの守矢一家の姿があった。

さて、酒も入り、完全な無礼講が始まった。

とはいえ、厄介な入れ知恵をされては困るため、ましろには早々に酔い潰れてリタイアしてもらったが。

今代の風祝の少女は酒に弱いので、こちらは酔い潰れはしないものの完全に気が緩みきっており、今は話そっちのけでましろの尻尾と戯れている。

ちなみに妹紅は、悠の昔話や諏訪子や神奈子との馴れ初めを聞くのに夢中の様子だった。

「なるほど。穢れ無き地。遙かに優れた文明。そして　八意永琳。八意思兼神といかなる繋がりがあるのかは分からないけれど、相だな知恵者のようですね」

「ああ。純粹な知恵比べだけで見るなら、多分紫より上だと思うぞ」  
「あら。ならば一度挑んでみるのも一興でしょうか」

永琳達の居所に心当たりでもあるのか、紫が今日初めて好戦的な

笑みを浮かべる。

酒の席で悠達の昔話を聞く内に、紫もやや饒舌になっていた。彼女曰く、何の気兼ねもなく飲み明かすのは久しぶりの事らしい。さもありません。誰からも侮られない在り方を選んだ彼女に、対等な友人など少なからう。

「話を伺う限りでは、人知を越えた域に達しているのは確かな様ね。貴方という存在を、質問だけで部分的にとはいえ把握できるなんて部分的に？」

「ええ。そもそも貴方は高次の存在。故にこの次元に生きる私達には欠片たりとも理解出来ない。こうして意志の疎通が成り立っているのも、その精神が人の形に整えられた結果でしかないのです」

ふと、疑問が募る。

悠は人の形に固定されていると紫は語った。

彼女の持つ異能の正体は知らないが、知恵ではなく異能によって判断した以上、それは事実なのだろう。

だが、ならば何故精神の方を整えられていると表現したのか。

「簡単な事です。もし精神まで固定されていたならば、貴方の在り方が変化する事はない。肉体ハードウェアだけでなく精神ソフトウェアまで固定されているは、決まった事を繰り返すだけの物でしかないでしょう？」

「ああ、だから永琳も拘束はしなかったんだ」

「そう見て間違いないでしょう。危険すぎるため他の情報は伏させて頂くけれど、高次の理が貴方という枠を越えて世界を侵食していない理由の一つは、貴方の精神がそれを防いでいるからでしょうね」

逆に言えば、悠の精神が崩壊すれば、高次の理は世界を侵し尽くすという事だ。

流石に石に閉じ込められて土中や海中に沈められれば、人に正気

を保つ事など出来ない。

しかし、何故軟禁するにしてもあそこまで制限がゆるかったのか。そんな事を考えていると、不意に袖が引つ張られた。

「……………」

「あれ？ どうした、神奈子」

「……………何でもない」

気が付くと、悠の服の裾を掴んだ神奈子が懽然とした顔で悠を見ている。

不機嫌さを隠さずに返事をした神奈子は、盃の酒を一気に飲み干す。

「そりゃあ、悠が紫に私達にも話した事のない昔話をするからだよ」

「あら、失礼しました」

かく言う諏訪子も少々面白くなさげな表情で、紫は口元に手をあて笑みを隠す。

まあ、今更なので恥ずかしがる事でもあるまい、と両隣の二柱の神を抱き寄せる。

「まあ、色々分析してもらうのは楽しいかったよ。でもさ、俺がずっと一緒に居たいって思ってるのは諏訪子と神奈子だ。幸せだっ感じるのは二人と一緒に居る時なんだよ」

返ってきたのは無言。

いや、紫は微笑ましい物を見るように小さく笑い、妹紅は酔っている事を抜きにしてなお真っ赤な顔でこちらを見ている。

そして、両腕の中の二人はというと

「~~~~~!」  
「へへへへー」

神奈子は悠の服に顔を押し付けている。耳まで真っ赤になっていることから、おそらく恥ずかしくて顔を直視されたくないのだろう。逆に、諏訪子は緩みきった笑顔で悠を抱き返していた。相変わらず感情表現がストレートである。

ただ、その顔が急に真面目になったかと思うと、その視線が悠と紫の顔へと代わる代わる向けられる。

「でも、意外だね」

「ん、何が？」

「いや、悠じゃなくて紫の方。そんな風に祝福されるなんて思わなかったよ」

諏訪子の言葉に反応して神奈子も顔を上げる。

妹紅を含めた四人からの視線を浴びて、紫はただ穏やかに微笑んでいた。

「大陸には神と人、妖怪と人が恋に落ちる話も数多くあります。その多くは悲恋に終わってしまうのですが、貴方達ならば、これからも幸福なままでいられる様に思っています」

その言葉は、彼女の本心の様に思えた。

彼女は心から、異なるモノ達のこうした関係を祝福している。

そしてその表情が穏やかな物から一転、至極真面目な物になった。

「ですが、このままではいずれ神霊は力を失うでしょう。いえ、それは妖怪もまた同じ。人が生み出した幻想は、他ならぬ人の手で消される定めにあります」

「……………」

絶句する。

衰退の中にある神霊がその結論に至るのは理解できる。

だが今の言葉は、これから繁栄を迎える妖怪さえもが、いずれ人によって消されると確信した上での発言だ。

「まあ、その時はその時さ。私達は私達のやり方で人と関わって行く」

「だね。この地の民が、私達の愛した子らの末裔である事は変わらない。人が自分の力で歩いて行くのなら、私達は見守るだけさ」

「そんな！」

その結末を、予想した上で受け入れると宣言する神奈子と諏訪子。それに対して妹紅が悲痛な叫びを上げる。

「納得がいきません！ 神奈子様も諏訪子様も、人間の為に頑張っているのに！」

「とは言ってもねえ……………」

「今更、祟り神として畏れを振りまく訳にもいかないし……………」

憤慨する妹紅と諦観の笑みを浮かべる守矢の二柱。

実際、色々と試行錯誤した結果が今なのだ。

他の地に比べればこの地での神霊の衰退は程度が軽い。

だが、そこまでが限度でもある。

これ以上無理に存在を誇示すれば、人が中心となった今の世に何らかの大きな歪みをもたらす事になってしまう。

そうなれば、他の地と軋轢が生まれるのは必至。

そして、その際に被害を被るのは他ならぬこの地の民なのである。

「ならば、人が神を必要としなくなった後、未だ神を必要とする人の住まう地への移住を考えてみてはどうでしょうか？」

「移住……？」

紫は語る。

人と幻想の共存。

それが自身の夢であり、いずれそれを形にする為に今は各地を巡っているのだと。

そしてその方法とは、隔絶された地で人の技術の発展を留め置き、人に物質的な豊かさでなく精神的な豊かさを求めさせるという物であった。

「んー。諏訪子、どう思う？」

「いいんじゃない？ いつまでも子離れ出来ない親つてのもなんだし、老後の余生みたいな感じで」

神奈子と諏訪子は割と乗り気なようだ。

ただ人を見守るだけの存在になる事を覚悟していた身だ。そういう未来も充分に有りだろう。

「ただ、貴方だけは例外です」

そこで紫の刺すような視線が悠に向けられる。

敵意からの物ではない。そこにあるのは危機感だ。

「ああ、そういう事か」

「いや、どついう事だよ」

一人納得していると神奈子のツッコミが入る。

神奈子はボケと突っ込みの両方が出来るいい奥さんなのであった。

ちなみに、こう見えて諏訪子は突っ込み専門である。ボケは天然のため、自力でボケる事は出来ないのだ。

「永琳という方が危惧していた通り、彼はただ知識を持つだけで危険な存在になる。ならば人がその領域に達する前に、彼を人の世から遠ざけなければならぬ」

「まあ、先にその隠れ里に移住してろって事だ」

不満そうな顔をする二人をそっと抱きしめる。

実際、そうしないと永琳から何らかの干渉を受ける可能性もある。自覚は無いが、悠が世界に対して脅威と成り得る存在である以上、周りに迷惑をかけない為の当然の予防措置だ。

「ただ、ギリギリまでは二人と一緒にいさせて欲しいんだが」

「ええ、構いません。その程度の融通は利かせましょう」

これで交渉は成立した。

どの道長く人の世の移り変わりを見守り続けて来た身だ。別離もそう長くは感じないだろう。

「あ、あの……」

話を取りあえず一段落を見せる。

そこで、躊躇いがちに妹紅が紫に声をかけた。

「あら、どうしたのかしら？」

「私も、特別な力を使えるようになっていたのですが、何か方法は無いのですか？」

それは、常々妹紅が悩んでいる事だった。

妹紅は神奈子と諏訪子以外の神霊の声を聞ける訳ではない。

また、戦う力が無い故にこの地から離れる事も出来ない。

不老不死の身ではあるが、その特徴はむしろ人間から狙われるという不自由さばかりだ。

そのため、世話をされてばかりの自分に嫌気が差しているらしい。悠から言えば、家族が何の憂いも無く笑っていてくれるだけで、充分心の支えになるのだが。

ちなみに、この考えを伝えた事が神奈子が妹紅へ対抗心を抱いた原因だったりする。

「ふむ。素質は悪くないと思うのだけれど」

「そうなんですか？」

紫の言葉に目を丸くする妹紅。

今まで神道の力も陰陽の力も扱えなかった自分に素質が有ると言われれば驚くのも当然だろう。

「神霊の鎮める富士の火山をも活性化させる程の力を持つ薬を口にしたのでしょうか？　ならば、なんらかの力が備わっていると見るべきです」

「それは、不老不死だけじゃなくて？」

「ええ。そうね……“力”と聞いて、貴女は最初に何を想像するかしら？」

紫の問いに、しばし目を瞑って考え込む妹紅。

「やっぱり、火でしょうか」

「なら、その線で行きましょう。乾坤を創造する神々と共にいながらそれを連想したのなら、きっとそちらに適正があるのです」

妹紅の答えに断言する紫。

確かに、大陸の不死鳥は炎の中から新生するという伝承を聞いた事もある。

不死である妹紅には案外適しているのかもしれない。

問題は、それを教えられる存在がこの地にはいない事であるが。

「どうせなら、火の妖術が使える人間を紹介しましょうか？」

「妖術？ 人間が？」

「ええ。大陸において、妖怪は遙か昔から存在していました。妖術とは妖怪が使うだけでなく、妖怪を真似、あるいは妖怪に教えられた人間が使う事も有ります。ここから遙か東の地にも伝わっているので、そこまで案内しましょうか？」

「お願いします！」

紫の提案に即座に返答する妹紅。

だが、その目に宿る決意は本物で、止めさせる事は難しそうだった。

「酷い事はしないでくださいよ？ 妹紅は大切な家族ですから」

「ええ、善処しますわ。いずれ創り上げる幻想の郷さと。やがてはその一角を担う程の実力者になって頂きませんと」

胡散臭い事この上ない笑みで物騒な事を呟く紫。

ここで妹紅を止めておくべきだった、と後に悠は後悔する羽目になる。

「……辛かったらいつでも帰ってきていいからな」

「大丈夫です！」

心配のあまり思わず声をかけるが、妹紅は自分の可能性を示され

た喜びに舞い上がっている。

どの道自分では彼女のコンプレックスを解消できなかったので、仕方ないと悠は小さくため息を吐く。

「じゃあ、妹紅の門出を祝って飲もう！」

「さんせー！」

そして酔った神奈子と諏訪子は先の事を心配しないので、あっさり妹紅の修行を認めてしまった。

結局楽しく飲めればいい神二柱と、それに付き合わされる信者の妹紅。

完全に寝こけるましろと、未だにその尻尾に埋もれてモフってる風祝。

いつもの風景にもう諦めた悠は、己のペースで楽しみながら飲む紫と議論を交わしながら夜を明かす。

後の世で最強の妖怪と称される八雲紫と守矢神社のファーストコンタクトはこうして終わった。

遠い未来において、平安中期と呼ばれる時代に差し掛かった頃の話である。

## 第十六話 平安中期（前書き）

書きたかったのは時代の変遷。

流石にそれだけではどうかと思ったので、動かしやすいキャラに帰っていたいただきました。

諏訪子と神奈子の二人は、真面目に神様やってると忙しすぎるんです。

## 第十六話 平安中期

妹紅が修行のために守矢神社を出てからどれ程の時が経っただろうか。

時代は今、ようやく安定の兆しを見せていた。

あれから、京へ運搬中の税の強奪など野盗が横行し、従来の軍団制ではそれを抑止する事が適わなくなつた時代が来た。

そのため中央はその鎮圧のため、軍事を得意とする貴族を東国を始めとした各地に派遣し、彼らに軍事力を運用する権限を与える事を決定。

しかし、軍事力を手にした者達はそれぞれで抗争を始め、遂には後の世にも残される事になる天慶の乱が発生する。

天慶の乱とは、平将門が関東で新皇を自称し独立国を築こうとした平将門の乱、瀬戸内で海賊討伐の任に当たっていた藤原純友が海賊の頭目となり、略奪を繰り返した藤原純友の乱の総称だ。

結果、この乱を治めた者達は正当な武芸の家系とされ、後の武士となる。

そして藤原一門による摂関政治が始まり、中央はようやく安定した。

世情が安定すれば自然と死人が減り、同時にそれは世への嘆き、恨み辛みの減少へと繋がる。

そのおかげで中央における怪異の増加もとりあえずの落ち着きを見せ、段々とその退治の仕方も確立されている。

ようやく陰陽師も怪異の撃退に十分な力を付け、京にはその名通りの平安が訪れる　　わけがない。

外敵を排除して国が落ち着けば、今度は内側が荒れるのは当然の帰結。

すなわち、水面下での権力闘争の激化であり、陰陽師の呪術、式神を使った暗殺の横行である。

まあ、それが貴族達による陰陽道という呪術宗教への傾倒を深め、陰陽術を発展させる結果になっているのだが。

なにはともあれ、中央とも関東とも関係の無い山脈地帯にある諏訪の地において、ましてや知る守矢神社に影響などあるわけもなく、悠は一人のんびりと神社の境内の掃除をしていた。

ちなみにましろは諏訪子と共に諏訪大社の上社で、神奈子は代替わりした風祝と共に下社で働いている。

「まあ、暇なのはいい事だ」

掃き集めた落ち葉などを土に埋めてそう呟く。

悠が忙しくなるとしたら、その時点で既に大変な事態が起きた後である。

平穩無事こそが一番望ましい。

変わり映えのしない毎日に感謝を奉げ、拝殿に向かって二礼二拍一礼する。

祭神は諏訪子なので本殿は留守なのだが、気分の問題だ。

そうして拝殿から振り向いた悠の目に映ったのは、ちょうど白髪の少女が境内に墜落する姿だった。

「がふっ!?!」

墜落した少女は背中を強打し、肺腑の底から全ての空気を吐き出すような声を上げる。

その特徴的な長い白髪と赤いリボン。白い上着と赤いダボダボのスボン。

間違いなく、修行に出た筈の妹紅その人である。

「くそっ! 次は誰が相手だっ!?!」

両足を上げ、振り下ろす勢いで一気に立ち上がる妹紅。

その両手に紅蓮の炎を猛らせ こちらと視線が合い、動きが停止する。

「あー、その、なんだ。久しぶりだな、妹紅」

「……………あ」

彼女の硬直が解けるまでにかかった時間は数秒。

その両手の炎は一瞬にして消え失せ、同時に人とは思えない程の跳躍力を発揮してこちらに跳び付いてきた。

一撃で常人の意識を刈り取りそうなタツクル。

しかし、悠に触れた瞬間その運動エネルギーは消失し、少女の顔が胸に押し付けられる。

「 お帰り」

「……………ただいま」

押し殺されるように発された妹紅の言葉は、僅かに涙声だった。

とりあえず、悠は落ち着くまで彼女の頭をなで続ける。

彼女が目の周りをほんのり赤くして顔を見せてくれたのは、それからややあつての事だった。

妹紅を社務所に招き入れ、風呂に入れて一服する。

とは言つても、その風呂を沸かす火は彼女の習得した炎術による物だったが。

「それで、今までどうしてたんだ？」

「火の妖術を教わつて、空を飛べる様になつてからは実践の毎日でしたね。今の日本には強い妖怪がないからって大陸に飛ばされて、色んな化物と戦つてたんです。で、今日も紫のやつに空間の切れ目から落とされて、次の敵かと思つたら目の前に悠さんが居たんです」

敵意むき出しの時と比べて、妹紅の雰囲気は丸つきり違つていた。いや、この神社で過ごしていた頃に戻つたと言つべきか。

流石に元は貴族の娘。礼を尽くすべき相手にはきちん敬意を示すのである。

「おかげで、今ならどんな妖怪だつて倒せますよ」

自信たっぷり宣言する妹紅。

大陸の伝説に登場する妖怪は、未だ確かなカタチを持たないこの国の魑魅魍魎と比べて年季が違い過ぎる。

まさに化物と呼ぶに相応しい連中と渡り合つてきたであろう彼女

には、今この地に存在する妖怪程度では敵うまい。

例外はせいぜい紫ぐらいな者だろう。

他に危険なのは亡霊、怨霊の類のだが、こちらは神様の得意分野だ。妹紅が出張るより速やかに片を付けるだろう。

だが

「すまん。意気込んでるところ悪いんだが、今の所敵らしい敵がい  
ないんだ」

「へ？」

そう、この地域の怪異は微妙な状況にある。

日の本でも有数の神社、諏訪大社の守護するこの地に外部から侵  
攻をかける怪異はいない。

深い山が多いので年を経た獣が妖怪化する事は多いのだが、これ  
がまた最近事情が変化してきたのだ。

妖怪の被害が増加しているのは確かなのだが、現在は退治する前  
に情報を集める事が必要になっている。

大蜘蛛や大熊が家畜や人を襲うのは、単に退治してしまえば済む  
話だ。

だが、人を化かす古狸などが始めてから事情が複雑になった。

特に人を脅かすだけの妖怪は、退治してはいけない場合がある。

今の所、人に飼われ恩義を感じた獣がその人の没後その墓を守っ  
ていたり、もしくは飼い主に仇為した人間に報復するケースが確認  
されている。

明らかに被害者側の人間に非が有る場合、または人間の為に行動  
している妖怪は、基本的にやってはいけない事を教えた上で放置す  
るのが今の決まりである。

ちなみにこの件を悠が提案した時、諏訪子は素直に賛成した。神  
奈子は基本話し合いはぶちのめしてからという主義のため反対はし  
たが、最終的に善良な人間のためになると説得が成功。

結果、見逃す妖怪と退治する妖怪の区別が必要になったため、妖怪は目に付いた端から退治という昔ながらのやり方をさせるわけにはいかなかったのであった。

「そう、ですか……」

「そう落ち込まないで。家族が無事帰って来てくれただけでも嬉しいんだから」

「あ、はい！」

暗い顔をする妹紅の頭を撫でてやると、嬉しそうにはにかまれた。よほど人の愛情に飢えていたと見える。

まあ、紫が外で優しい態度を人に見せるとは思えないし、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

「そう言えば、妹紅のお父さんって藤原不比等だよな」

「はい、そうですけど？」

「今の京では、その子孫の藤原氏が政治の中枢にいるらしいぞ」

「え、ほ、本当ですか!？」

妹紅の表情が驚きに染まる。

藤原北家が摂政、関白の地位に就いていると聞いて、中央の情報を教えてくれている神霊について調べてもらった確かな情報だ。

下賤な身分のかぐや姫によって父親が酷く恥をかかされた事が妹紅の復讐の動機だったが、その父親はきっちり権力を手にする事に成功し、さらにその子孫は名誉や地位を確立していたのである。

「……はあ」

「岩笠の事を気にしているのか？」

「はっ」

喜びから一転顔を暗くしてため息を吐く妹紅に、以前聞いた話から推測して尋ねてみると、小さく頷かれた。

つぎのいわかさ  
調岩笠。

不老不死の薬、蓬萊の薬を時の帝より供養する事を命じられた人間。

かぐや姫への復讐のため薬の入った壺を奪おうと追った妹紅を逆に助けた恩人であり、魔が差した彼女に蹴落とされ死んでしまった人間だ。

彼女は今も、その罪に苛まれている。

「何度も言うけど、過去は覆らない。死者には何も償えない。罪を犯した人間は、その罪を背負って生きていくしかない。背負った罪を、誰も代わりに背負う事なんて出来ない」

「うん……」

「だけど、疲れたら、倒れそうになったら投げかければいいんだ。僕達は家族なんだから」

繰り返して伝えた言葉。

それでも彼女の顔が晴れる事は無い。

ただ、今回は少々違った。

「私は、生きているのかな」

ぼつり、と零れたその言葉は、彼女がずっと胸の内に留めていた弱音なのだろう。

一度決壊した堰は、もうその内側から出る物を止められない。

「あの薬を口にして、私は死なくなかった。飢えても死なない。病にも罹らない。生きるための行動が必要ない。生きている者は必ず死ぬのなら、死なない私は生きているの？」

「当たり前だ」

妹紅の問いを一蹴する。

即座に答えを返された彼女は驚きのあまりぽかんと口を開けていた。

「妹紅は誰かの助けになれる。誰かを救うことが出来る。こうして一緒に居るだけで、家族の僕達を支えてくれる。何かを為す事が出来るなら、それは生きているって事だ。他の誰が何て言おうと、妹紅は人間だ」

少々恥ずかしい思いをしながら言葉を連ねる。

とはいえ、これは悠が真実だと思っっている事をそのまま口にしていただけなのだが。

まあ、妹紅も悠の事がある程度理解しているので、馬鹿にされる事はあるまい。

「それとも、僕達とここで暮らした事は不幸だった？」

「そんな事無い！」

その問いに、彼女はそれこそ必死な勢いで否定の言葉を返す。

その答えが、悠には嬉しくてたまらなかった。

「なら、僕はその過去を否定出来ない。妹紅がここにいる今を嬉しく思ってるから。その、岩笠って人には悪いけど」

「……はい」

嬉しそうにも、今にも泣きそうにも見える表情で彼女は頷き返す。過去の事は、彼女が自分の手で折り合いをつけなければならぬ。だが、その手伝いぐらいはしてやれる。

彼女が前を向くために。

これからを笑って生きていられるように。

彼女は、この守矢神社の一員なのだから。

「さて、とりあえず料理の下ごしらえを手伝ってもらえるか？ 家族が帰ってきたんだ。皆で盛大に祝わないと。特にましろは喜ぶだろうしね」

「分かりました！」

強がりの部分も多いが、精一杯の笑みを見せてくれる妹紅。

それに笑い返して、一緒に炊事場に向かう。

彼女といると、ずっと昔、花弥がいた頃を思い出す。

きつと、悠にとって彼女は娘みたいな存在なのだろう。

そう思うと、いつの間にか悠の手は彼女の頭をなでていた。

「 どうしました？ 」

「 いや、後で髪を梳いてあげようかなって思ってたさ 」

「 自分で出来ます！ もう、子供扱いしないで下さい 」

不思議そうな顔で振り返った彼女にそう言うと、拗ねた様にそっぽを向かれた。

ずっと昔に在った光景が、今また似たような形で目の前にある。

それがどうにも可笑しくてノ幸せで、どうしても笑みを抑えることが出来なかった。

尤も、それがさらに彼女を不機嫌にさせてしまったが。

なお、その夜の妹紅の帰還を祝う会で酔った諏訪子と神奈子が大いに羽目を外す。

暴走した彼女達に酒を飲まされた妹紅は、かなりワイルドだった。それはもう、面通しに来た今代の風祝が引く程に。

以降、風祝の一族が妹紅に決して酒を飲ませ過ぎてはいけないと家訓を持つのは、また別の話である。

## 第十七話 武士の時代への先駆け（前書き）

歴史の流れと日本妖怪の誕生を追うだけの話。  
ついでに、〳〳程度の能力という呼称の誕生。

幻想入りしないとはっちゃけられないのが痛い……。  
下手な真似したらその時点で歴史改変が起きて展開が大変な事になるし。

## 第十七話 武士の時代への先駆け

世情は移ろう。

中央の権力争いによって、動乱の時代が訪れた。

藤原氏による摂関政治も藤原道長の代を最盛期として衰退し、院政の開始によって大きく衰退したと言っている。

やがてその院政も政争を三百数十年ぶりの武力解決によって功を上げた平清盛が大きく出世し、平氏政権を打ち立てるに至る。

だが、この初めての武家政権には反発が大きく、各地で不穏な動きが見られるようになった。

世の乱れは同時に陰<sup>かげ</sup>の躍進へと繋がる。

都は今や方々に何千何万という死体が山積みとなり、水葬にされた死体が川を塞ぎ止める事すらあると言われている。

神霊の加護が弱くなった今、干ばつや飢饉、疫病により人々は明日をも知れぬ生活を送っている。

そして人々は怨霊や悪霊、妖怪という存在しない筈のモノに恐怖を抱き、全ての元凶として不幸を押し付ける事によって僅かな心の平穏を保っていた。

その結果、今まで明確な力タチを持たなかった妖怪は具体的な姿を手に入れ、ついには鬼や天狗といった伝説上の存在までもが明確な個を獲得して姿を現した。

陰陽道は未だ盛んだが、最も優れた陰陽師であると言われた安倍晴明も既に亡く、力持つ陰陽師は増加したものの突き抜けた実力の持ち主はいないらしい。

今はまだ人が妖怪を退治出来ているものの、世の乱れは加速を続

けている。

やがてこのパワーバランスは狂い、これから妖怪の全盛期が始まると見ていいだろう。

とはいえ、諏訪子や加奈子が守護するこの地に妖怪が跋扈できるわけがなかった。

中央から追い払われた妖怪が流れ着く事もままあるが、大抵の場合中央に居た頃と同じ様に無法を働いて即座に粛清された。

守矢神社の戦力は、今の中央の陰陽師の力などとは比べ物にならない。

祟りによって弱体化した妖怪を一捻りにする諏訪子。

圧倒的な一撃で有無を言わず相手を瞬殺してのける神奈子。

一切の攻撃が通じず、人並み外れた力で首を折り身体を引き裂くましろ。

大陸の妖怪とは比べ物にならないと嘲笑い、炎の妖術で相手を灰塵と化す妹紅。

上の四人には敵わぬものの、そこらの霊能者とは比較にならない程強い力を持つ風祝。

現在の日の本において、もはや最強の勢力と呼んで差し支えないだろう集団がここに居た。

一度はこの地に百鬼夜行が攻め入るといふ大事件も起きたのだが、

その末路たるや悲惨極まりない物だった。

実際の数は百もいかなかったが、鬼という伝説上の存在が群れて侵攻してきたのは事実。

その情報がミシャグジによって伝達されるや否や、守矢神社一同は初の連携戦術を取る事になった。

戦術は神奈子が担当し、見せしめも兼ねた殲滅を選択。

百鬼夜行が現れた夜、待ち受けていた神奈子が御柱を四方に四本ずつ突き立て結界と簡易神域を作成して逃げられなくする。

次いで諏訪子がミシャグジ総出で鬼どもを祟り、大地に縛り付け飛び上がる事を許さない。

そして、実際の殲滅作業を行なうのが残りの三人だ。

悠に物理学的な知識を吹き込まれた妹紅の扱う炎は、赤や橙を通り越して黄色に発光する程の莫大な熱量を有し、それにましろが手を加えることで概念的な攻撃性を高めた漆黒の炎が出来上がる。

それが鬼の群れに叩き込まれると同時に、風祝が小規模の竜巻を生み出すことで黒炎の竜巻が結界内を蹂躪し、想定外の威力を叩き出した合体攻撃に神奈子と諏訪子は結界の維持に全力を注ぎ込む羽目になる。

一度生み出された黒炎はましろの管理下におかれ、彼女が意識的に消さない限り消える事は無い。

かくして百鬼夜行は血の一滴すら残さず殲滅され、後に残ったのは焦げた八本の御柱と高熱によって硝子化した大地のみ。

事の顛末を見届けていた妖鳥どもは神奈子の一睨みで逃げ出し、この地における怪異への脅威を周囲に知らしめる結果となる。

この結果に神奈子と諏訪子は妹紅の成長を喜び、同時にその力を見誤っていた事を知って以後の合体攻撃を禁止した。

かくして外からこの地へちよっかいをかける妖怪は激滅し、たまに現れる無謀な挑戦者は見せしめとして無残極まりない死体を晒される事になる。

これが強い妖怪がこの地に訪れない理由となり、後の世で長野が妖怪後進国となる原因でもあった。

とまあ、守矢一家の武勇伝が一つ増えたところで日常に影響はない。

なぜなら、一夜にして起きたワンサイドゲーム一方的な殺戮は普通の人が知るところではなく、噂を聞いて力を求めやって来た霊能者にしてやれる事など、せいぜい諏訪子や神奈子が加護を授ける程度だった。

それは、守矢神社の者達の力が他者に教えられる物ではないのが最大の理由だろう。

神として生まれ持った力を振るう諏訪子、神奈子、風祝達。

悠が意図せず与えた力を持ち、自分でもその力を全く把握できていないましろ。

言葉通り死を乗り越え、鍛えに鍛え続けた妖術を使う妹紅。

そして、この次元の者には理解出来ない高次の理を内包する悠。

圧倒的な力を持ちながら、それを広める事が出来ない者ばかりだった。

個々の戦闘能力は著しく高いが、広い国内全てを怪異から守るには人手不足にも程がある。

よって、守矢神社は陰陽師や社会的に勢力を増した仏僧の協力を得ながら、この地の守護に奔走するのであった。

しかし、単独では役に立たないのが悠という存在である。

空は飛べない。霊弾、術の一つも使えない。ましろに乗せて飛んでもらう分には別だが、それはましろ単独では解決出来ない知恵が必要な場合だけだ。

よって、現在の悠の役割は専ら家事と戦闘手段の確立である。守矢神社の家事は当然の事として、悠に特殊な力を扱う事は出来ない。

そして試行錯誤した結果が、他人の力を借りればいいという物であった。

神奈子に与えられた神器の中には、相手の本性を曝け出す真澄鏡・改を始めとした強力な物もある。

七年に一度行なわれる御柱祭の度に取り替えられる古い御柱も所有権を移されているが、流石に悠一人では武器として使う以前に動かす事も至難な物で、守矢神社の裏に山積みされている。雨ざらしではあるが神器であるため虫害や腐る心配はない。

ちなみに現在の悠の武装は、神奈子と共同制作した真澄鏡・改（銅鏡に純銀のメッキ）、諏訪子の作った鉄剣、及び各種護符である。神器は神力により錆びたり黒ずんだりする事なく、弱小妖怪なら充分に追い払える程度の力を有している。

問題は護符の方だ。

その防御力、込められた神力になんら不満はないのだが、出来るのは自動防御のみ。

なぜなら、御札の力を起動させるための切欠となる力を悠が持ち合わせていないため、攻撃用の護符を使用出来ないのだ。

妖獣ならまだしも妖怪は空を飛べる輩が多い。

ましろに頼らない限り空を飛べず、狩りはましろの専門である以上悠に出番は無い。

とはいえ、諏訪子や神奈子が悠を連れては飛べない時点で陰陽道その他に頼るのは諦めている。

残された手段。

それはましろの力を使用した神器の作成だ。

ましろの力は悠から派生した物。

故に悠にも使える可能性はあるし、出来なくとも何らかの副産物が手に入れば御の字だ。

ましろの力を紫と相談し、陰陽道的見地から出した答え。

それが 太陰を司る能力。

万物が陰と陽から成り立っているという考えの中で、この世、宇宙のありとあらゆる全てを一つとして捉えるならば、さらにそれを大きく二つに属性分けしたものが太陰と太陽である。

すなわち、ましろは万物の内包する陰性を自在に変化させる事が出来るのだ。

その気になれば、宇宙全てを陰で塗り潰して消滅させる事も可能な筈だ。

万物が陰と陽のバランスで成り立っているのなら、一方が無くなればもう一方も無いのと同じ事になる。

尤も、ましろには太陰という概念を理解できるだけの知能が無いので、余計な知恵を与えなければ大した脅威にはならないと放置されているが。

だが、もしましろの力の一端を、悠の知識で扱えたならどうなるか。

それはあまりにも大きな可能性だった。飛行を可能にする程度の事では済まないぐらいに。

しかし、話が上手く運ぶ事などある筈がない。

「あれ？」

「触れないな」

剣に力を込めさせればただ黒く見えるだけの影になり

「あー！ 言う事聞かないー！？」

「せいこう？」

「いや、失敗だから」

鉄の輪に力を含めさせてみれば、勝手に飛び回り始めて諏訪子にも操れない物騒な武器になり

「きゅう……………」

「神奈子ー！？」

「あれ？」

神奈子製の簡易的な鏡に手を加えれば、試しに自分の顔を映した神奈子が失神する危険物となった。

ちなみに、影になった剣はましろに消させ、鉄の輪と鏡は妹紅とましろの黒炎で消滅させて事無きを得た。  
そして、肝心のお札だったが

「……………反応無し」

「同じく」

「私事です」

「私も……………」

お札を諏訪子、神奈子、風祝の少女、妹紅が掲げるが何の反応も無し。

『そらをとび』

この時代の少し特殊な平仮名でそう書かれたお札は、神奈子と諏訪子がましろに一ヶ月かけて教え込んだ努力の結晶だ。

しかし、これは想定範囲内。

ましろの特殊すぎる力を最初からこの次元の存在が使える確率は低かった。

勿論、暴走を危惧して一番最初に試させられたのはましろ本人。彼女は今、とんでもない速度で飛行を楽しんでいる。

普段以上の飛行速度と慣性を無視した動きが出来るのが利点と言ったところか。

前進から何ら負荷のかかる様子なく即座に後退するその姿は、端から見ていて違和感だらけだったが。

そして最後が悠の番。

他の面々は既に悠から遥かに距離を取っている。

両手でお札をしっかりと持ち、お札の中に込められた力を感じ取る。

悠が力を加える必要は無い。

元よりそれは出来ないし、決してしてはならない事でもある。

故に、感じ取った力を共振させる。

鐘の音が内側で幾度も響く様に。

器を揺らす事で中の液体の振幅を大きくする様に。

大雑把なイメージだったが、お札の中の力はそれで増幅され、効果を発揮した。

いや、暴発したと言った方が正しいのだろう。

なぜなら、悠はましろと比べるのも馬鹿らしい程の速度で宙へと飛翔したからだ。

流れゆく景色は、遙か後方へ吹き飛ばされているかの様。

空気抵抗が打ち消されているのか、風圧も感じる事なくただひたすら真上に加速する。

もし悠の身体が常人の物だったなら、既に大気摩擦で燃え上がっているだろう。

遙か上空の雲海を突き抜けるまでに要した時間は三秒にも満たない。

このままでは大気圏を突破しそうだった。

最初から暴発に備えていた事が功を奏したか、悠は迅速かつ適切な判断を下す事に成功する。

とっさにお札を握る手を開いたのだ。

同時に悠の手から離れたお札はさらに上へと加速し、あつという間に赤い空気に包まれ燃え尽きる。

しかし悠の上昇する勢いは簡単には止まらず、しばらく上昇を続けた後に停止し、緩やかに落下を始める。

飛ぶ時と同様に落下にもまた空気抵抗が無く、落下速度は加速する一方だ。

雲に視界が遮られ目を瞑って数秒後、悠は背中に物が当たっている感触を感じた。

目を開けば見慣れた守矢神社の本殿裏側。

着地の衝撃も無く、悠は地面に仰向けで寝転がっていた。

「は、ははははっ」

思いもよらぬ成功に笑いが止まらない。

失敗を前提にしていただけあって、暴発と言えど“空を飛ぶ”事には成功したのだ。嬉しくない筈がない。

失点が有るとすれば、ましろの力を過小評価し過ぎていた事か。

暴走に備え、お札に加える力は小さくさせた筈だった。

それこそ、宙に浮かぶ事が出来れば上々くらいの積もりで。

しかし、それでなおあの力。

紫が宇宙全てを塗り潰せると言ったのも納得がいくポテンシャル基礎性能。

これからの研究次第では、悠でも充分な戦力になれる武装を生み

出せるだろう。

問題は、ましてに余分な知識を与える事なく神器を作れるかという点だ。

下手に自分の力の使い方を認識してしまえば、ましてという存在の危険度は跳ね上がる。

そして、そのましてに攻撃が通じるのは現在悠以外にいない。

上を見れば、当のましてがこちらへ飛んで来ていた。

慌てて立ち上がり、特に衝撃もなく受け止める。

「せいこうした？」

「失敗だ。もっと力を弱くしないと駄目だな」

「……はい」

口を尖らせて残念がるまして頭をなで、その体を横抱きにして神社の表へ回る。

焦る必要はない。

丁寧に、適切に、最悪の失敗に繋がらない様慎重に慎重を重ねて実験を繰り返し返せば良いだけの話なのだから。

慌てて駆けつけて来る他の面々にかける言葉を考えながら、悠は小さく口元をほころばせた。

「いえ、それは無理でしょう」

「ああ、やっぱり？」

その夜。

この地では手に入らない海の幸を土産に現れた紫に、事の顛末を話して聞かせると本気で呆れられた。

ちなみにいつも通りましろは泥酔。妹紅と風祝は最近やや大きくなつたましろの三尾にモフっている。

一方、塩漬けではない海産物を肴に酒をたらふく飲んだ諏訪子と神奈子は、今現在悠に膝枕を強要し頭をなでさせていた。

紫が守矢神社を定期的に訪れるのは、一応悠とましろの監視という名目である。

だというのに、祭神二柱は威厳もへつたくれもない有様を晒していた。

そこにあるのは紫に対する信頼だ。

彼女達は紫を自らに比肩する者として認め、付き合いを続ける内に一定の信頼関係を築いている。

とは言え、親しき仲にも礼儀あり。

酔った時の自制心ぐらい、この二人は紫を見習って欲しいと悠は心底恥じる。

基本、神霊は酒好きだが、酔い癖の悪い連中が多い。

それに比べると、紫は酔いを楽しみながらも礼節を弁える立派な淑女だった。

まあ、だからと言って悠が二人より紫を優先する事など有り得ないのだが。

「そうやって嫁を可愛がる前に、話を先に進めるわよ」

「アイ、ママ」

余計な事を考えている事が分かったのか、声色まで心底呆れた物に変わってきたので即座に従う。

無論、二人の頭をなでる手は止めないが。

「ましてでは複雑な術式を組めない。そこは能力で補<sup>スベック</sup>えるけど、それを本人にやらせるわけにはいかない」

「だよな。全能に近い分、それを理解されたら抑えきれない」

「ええ。だから彼女の力はいくまで力の供給源に留めるか、もしくは補助的なものに制限すべきでしょう」

太陰を司る能力とは、万能に近しい能力である。<sup>チカラ</sup>

ましろの想像力があまりに残念なためその真価は発揮されないが、他人の入れ知恵でやり方を覚えてしまったらやっかいだ。

悠の言う事は聞くし、今までの教育は無意味ではない。

だが、良くも悪くもましろは思慮が足りない。

野性だった頃に比べ、あまりに無鉄砲過ぎる。

「でも、言葉で制限を付けるのも難しいぞ」

「分かっています。だから、私としてはこれ以上余計な事をしないで欲しいのだけど」

紫は諦めた様にため息を吐く。

だが、実際これからの事を考えると、悠単独では何も出来ない現状は改善されるべきだ。

神が幻想となる世になれば、悠の後ろ盾はない。

それ程までに人が力を持つ世において、悠は何らかの自衛手段を持つ必要がある。

一切の干渉を無効化できる悠も、拘束されれば何も出来ないのだ

から。

「まあ、他人の力で自在に空を飛ぶのは難しそうだって事は分かった」

「ついでに言わせてもらおうなら、あの子の力を攻撃に利用しようなんて考えは止めておきなさい。そう簡単に転用できる力ではないし、分かり易過ぎる使い方ではあの子が理解してしまう」

紫の言う事も尤もだった。

銃のような直接的過ぎる力の使い方はましろでも理解出来ないとは言いい切れない。

だが、複雑な機構を組むためには新しく力の使い方を教える必要があるだろう。

流石にそれはリスクが高すぎた。

「となると、ブースト系が一番かな。目標は僕以外の人が使えない事で」

「……オチが見えましたわ」

結果得た結論を述べると、紫がもはや悟りの境地に立ったかのようなため息を吐く。

実はこの時、悠にもオチは何となく分かってはいたのだが、それでも実行に躊躇いを覚えなかった。

おそらく、酒の席のグダグダな空気に流されたせいだろう。

もしこの時悠が自重していれば、後に大量の犠牲者が出るのは避けられたのかもしれない。

「まあ、貴方がロケットよろしく打ち上がる様は見えたかったけれど」「あれ、判断がもう五秒遅かったら大気圏突破してたかもしれないんだが」

「その時は助けてさしあげますわ。だからどんな目に遭っても絶対に諦めないでくださいね」

宇宙空間までどうやって助けに来るのかと疑問を抱いたが、紫は空間に裂け目を作って遠距離を一瞬で移動する。

彼女ならば可能だと思ふ反面、彼女の限界はどこにあるのかふと疑問を浮かべる。

「限界？ そうね、誰にでも限界はあります。妖怪も神霊も人の願いから生まれたモノ。故に何らかに特化した能力チカラを有してはいるものの、それ故に増長し易い」

「人にも特別な能力持ちが生まれる事もあるみたいだけどね」

「ええ。その増長を防ぐためにも、制限を設けましょう」

「制限？」

首を傾げて見せると、紫は妖しく微笑む。

これは、彼女が意地の悪い事を考える時の癖みたいなものだ。

「そう。全ての者の能力を『〜』程度の能力』と名付けてしまうのです」

「うわ、それは……」

確かに、それは効き目があるだろう。

自認せずとも、他者からそう呼称される時点で既に己の限界を突き付けられてしまう。

また、ましろや悠の力を自分で制限するにも適している。

問題は、その呼び方を広める時点で多くの敵を作ってしまう所だろうか。

尤も、ようやくカタチを手に入れた程度の妖怪に、目の前の存在が負けるなど想像もつかないが。

その時、なでられるままに寝転がって話を聞いていた神奈子が身をよじる。

「紫ー。私達の場合はどんな名前になるんだい？」

「あ、それ私も気になるー」

諏訪子が神奈子に続けて声を上げた。

その様子に苦笑しながら、紫はそつと目を閉じてしばし考え込む。

「そうですね。お二柱ふたりの場合は『乾を創造する程度の能力』、『坤を創造する程度の能力』、悠の場合は『加えられた力を無にする程度の能力』と言ったところでしょうか」

「あれ？　なんか変わらなくない？」

諏訪子の疑問も尤もだ。

名によって限界を決めると言うならば、評価を小さくしてしまえばいい。

元より人の想念により生まれしモノ。

人の想念によって在り方を捻じ曲げられるのは道理である。

まして、人の信仰を己が力とする神霊にとっては尚更だ。

「私は事実を捻じ曲げる積もりはありません。これは、過剰な自信による暴走を防ぐための制限です。どれ程の力を誇ろうと、人の幻想から生まれたモノは人の手により消え去る。悪目立ちすれば、他ならぬ人の手により死おわりを迎えるだけでしょう」

元より彼女の理想は人と幻想の共存。

故に、この案も幻想が早々に消えてしまつのを惜しんでの事なのだらう。

「でも、悠の能力は名前で縛れるのかい？」

神奈子から正鵠を得た問いが飛ぶ。

対し、紫は小さく首を横に振った。

「ましろなら名前で簡単に自分で能力に制限を加えるでしょう。だけど、悠はそうはいきません。自身がどれだけ特異であるかを理解する十分な知恵を持ち、その可能性は誰にも推し測れないのですから」

「それでも、例外を作るよりマシだつてことだよ。限度を知るという事が一番大事なわけだし、僕単体で人の領域を超える事はほぼ在り得ないから」

紫の言葉に追加の説明を入れると、神奈子も納得した様に頷く。

だが、いずれ神奈子達が力を失うとするならば、この呼称が力を復元する鍵となる。

程度と括られてはいるが、その名が示す力は絶大だ。

失われた信仰が回復する際、元と同じ力を取り戻すために人の思念を誘導するには非常に有効だろう。

これは、彼女なりの親切心の表れでもあるのだ。

「まあ、貴女達に限ってはその心配は無用でしょう」

「そうなのかい？」

「ええ。悠の信仰を受け続ける限り、貴女達はある程度までしか弱体化しない。それほど、悠の認識には深い意味があるのです」

故に、諏訪子や神奈子が姿を消すのは、信仰の消失ではなく人の世の摂理によるものだと言は語らる。

しかし、その意味を正確に知るには人への理解が足らなかったのだと、後の世において悠は自身を振り返る事になる。

紫の言葉の真意を図りかねる悠の前に、彼女は空間の切れ目から大きな瓶かめを取り出した。

「さて、これは東国で作られた新しいお酒です。かなり強いですが、味は中々ですよ」

「「飲むっ！！」」

その言葉と同時に諏訪子と神奈子が飛び起きた。

彼女達はすぐに瓶の蓋を開け、中身を盃に酌み始める。

世は荒れども、この地はやはり平穏なままだった。

## 第十八話 鎌倉時代の始まりと神霊世界の変化（前書き）

おおまかな流れと最初と最後を決めておけば話を完結まで持つていける、という考えは間違っていたとは思いません。

ですが、初期プロット（守矢一家VSネコアルク）を破棄した時点で幻想入りまで話を飛ばしたほうが良かったかと今更ながらに思ったり。

主人公が幻想入りまで守矢神社で暮らすという部分は最初からの決定事項でした。

しかし、主人公が原作に与える影響をきちんと書くと、同時に詳細な歴史考察と妖怪や宗教関連の変遷についての説明が多くなり、幻想入りまではつちやけた真似が出来ないため話として面白いのかどうか不安です。

ここが良い、ここが悪いなどの感想を（作者はコミュニケーション能力不全のため、できれば分かりやすい論拠付きで）頂ければモチベーションアップに繋がりますので、手間で無ければ是非感想をお願いします。

## 第十八話 鎌倉時代の始まりと神霊世界の変化

源平の合戦を経て、政治の実権は源頼朝の手に渡り、国の中心は京から鎌倉へと移った。

源氏による武家政権の始まりである。

天皇による全国を統べたわけではなく、武士の頂点たる「鎌倉殿」頼朝の知行国及び御家人を支配下に置いただけであり、名目上は征夷大將軍という役割に任じられ一応は天皇の臣下である。

だが、鎌倉に比類する武家は全て滅ぼされ、武力において源氏を止められる者は最早いない。

こうして、国家の在り方を変える内乱は終幕を告げた。

とはいえ、その被害は凄まじい。

戦の被害は戦う者のみならず、略奪の横行、飢饉、疫病、及び戦のための税など、むしろ戦う いや、抗う力のない弱者にこそ多くの犠牲を強いた。

加えて、世の乱れに乗じて霊的な被害も増加する。

怨霊は言うに及ばず、妖怪などの怪異が跋扈し、その噂がさらに新たな怪異の温床となる。

そして、この期に乗じて勢力を広げたのが陰陽道と仏教だ。

陰陽師は安倍清明の様な規格外の存在こそ生まれてはいないものの、その占いや吉凶の判断は民衆にまで深く根付き、今では強い霊力を持つ陰陽師が妖怪退治の一角を担っている。

それに対し、今まで国家鎮護のために存在しきびしい戒律や学問、寄進を要求してきた仏教の中から新しい宗派が誕生した。

浄土宗を始めとするこれらは、出家せず在俗のままでも、ただ信仰によって救いにあずかれると説き、武士や農民に圧倒的な支持を得ることに成功する。

さらに、それらの思想の変化は神霊への影響も大きかった。

それは、神仏習合への影響が大きいためだ。

元々神霊は穢れを嫌う物だが、仏教の浄土思想の普及はそれを極端化させて来た。

さらに陰陽道の影響によって、人間は穢れを被う事より物忌みに重点をおく様になっている。

そして、穢れから根本的に解脱できる仏教は穢れを忌避する神道に優位性を持つ事になり、これが人の中で神霊の格を本来のソレより貶める結果と成った。

しかし、政権が東国に移ろうと、経済や物流、文化の在り方までは急変しない。

経済や文化の中心は未だ平安京やその周辺の公家にあり、怪異の主流もやはり平安京である。

妖怪の世界では鬼や天狗の天下であり、雑多な有象無象の妖怪が日々生まれているという。

そして、それはやはり諏訪の地からでは遠い出来事に過ぎない。

陰陽道の浸透と共に怪異は増加する一方だが、この地で強力な妖怪が生まれる事もない。

仏教は死後を扱うことが専門で、神道は今を生きる人間を支える事が専門だ。

密教、陰陽道によってその境界は大きく食い込まれはしたものの、強い神霊はそれだけ信仰を保ちやすい。

弱小妖怪が増えようと、それに伴い人もまた霊的な力を付けつつある今、諏訪子達の負担はそう増える事はなかった。

むしろ、突然紫に妹紅が連れ去られた今でも、その影響が出ないぐらいに安定している。

これはそんな、ある夜の会話である。

「はー。なんか最近神の扱いが雑じゃない？」

やや疲れた声を出して、悠の肩にしなだれかかってくる神奈子。

その手には飲み干したばかりの盃。

濁った雑な味の酒なのだが、その酒気帯びている筈の吐息は妙に甘ったるい香りがする。

普段から女性的な彼女は、酔って僅かに赤みの差した顔が色気をかもし出している。

「だよねー。祟りと穢れは違う物なのに、物忌みだけじゃなくてちゃんと祓いをしないのはどうなんだろう?」

そう昨今の人間への愚痴を零しながら盃を傾け、悠からやや離れてとつくに酔い潰れて寝ているましろの大きな三尾に倒れこむ諏訪子。

妹紅が連れ去られて夜の営みが増えたためか、酔っている時の彼女は様々な動作が艶っぽく感じられる。

……見た目は子供が産める年には見えないが、これでも一児の母である。

その大きくなった腹を見た事があるせいか、悠に対して閨においては、諏訪子の方が神奈子より優位に立つことが多い。

とはいえ、悠と彼女達は人と同じ営みをするわけではないので、神奈子の方は未だ処女であつたりする。

基本神という存在は百発百中というか、人より遥かに孕み易いので迂闊な事は出来ないのだ。

彼女達も安産、子宝の神徳は持っているが、避妊は出来ない。

彼女達と永きを共に暮らせる悠の人でありながら人ならざる存在も、この制約ばかりは恨めしかった。

「僕は今頃妹紅がどうしてるか心配だよ」

「親馬鹿だねえ」

小さくため息を吐いて囲炉に薪をくべると、諏訪子が小さく笑いながら呆れ声を出す。

「そんなに似てたのか？」

「うーん、どうだろう。似てたというか、親みたいに甘えられるのが懐かしいというか」

神奈子の問いにその頭を撫で返しながら答えた。

嬉しそうに目を細める彼女が愛しくて、そつとその頬に口付ける。そこで頬の赤みが増す辺り、三人の内で一番初心なのは神奈子だと再確認した。

ちなみに、似ているというのは悠と諏訪子の娘である花弥の事だ。その子孫である風祝にも面影がないわけではないが、立場的にか見た目的にか、近代の風祝達は神奈子に甘えたがる。

諏訪子や悠は遠いご先祖という認識はあるものの、本質が神奈子に近付けられているため仕方のない事ではあるが、やはり寂しい。というか羨ましい。

ちなみに、ましろは幼い妹といったポジションで甘えてくるので、妹紅とは少し接し方が違っている。

「そついえば紫のやつ、何であの子を連れて行つたんだっけ？」

「たしか、友人が元気になった記念じゃなかった？」

「いや、閻魔との戦いに駆り出されたんだよ。死んで元気になるのもどうかと思うけど」

神奈子と諏訪子のとぼけた答えに訂正を入れる。

紫の友人とは、鎌倉に仕えた武士で出家し歌人となった人の娘らしい。

幽霊と縁があるのか、半人半霊の武士が仕えている上、自身も霊に関する異能を持っていたという。

その能力のため生前は悩みが多かったらしいが、死後は生前の記憶を失った亡霊と化して明るい性格になったそうだ。

だが、亡霊は亡霊。

死者が現世に残り続ける事は、本来害しか及ぼさない。

しかし、紫がその亡骸を供養出来なくしてしまったため、輪廻転生に戻る事も出来ないという。

幸いだっただのは、その友人が仏教を受け入れていたことだろう。

黄泉比良坂に逝く身であれば、悠達も紫の味方は出来ない。

だが、彼女の逝く先は彼岸であり、神道側の存在が干渉しようとしまいと勝手である。

神仏習合以来、神は仏の仮の姿であるなどとされているが、信仰を集めて亡霊が神になった存在ならともかく、肉の身を持つ神はその存在まで歪められる事は無い。

元は別の存在、別の宗教、別の概念に属する存在である以上、仏教を否定し完全に神道である人間を仏法で裁くことは出来ない。

対立すれば当然仏敵認定だが、死なない妹紅を死後を扱う現在の仏教では扱えない。

よって、友人を守るため閻魔や死神と対立した紫は、戦力として妹紅を連れ去っていったのである。

「まあ、相手の閻魔は成りたての元地蔵らしいけど」

「仏教あつちが扱う死者が増えて、手が足らなくなっただっけ？」

「らしいね。たしか元々閻魔は地蔵菩薩と一緒にだった筈なんだけど」

妹紅の相手について思い出しながら口にする、諏訪子が疑問の声を上げたのでそれに返答する。

日本に伝わった段階で、仏教における閻魔は地蔵菩薩と同一視されていた。

しかし、当時は現世利益優先の思想だったため広まらなかったのだ。

だが、時代の荒みのため末法思想が広がった結果、仏教が貧困層にも多く広がり、結果閻魔に委ねられる死者の数が圧倒的に増加した。

この最初に伝来した閻魔が現在の閻魔十王であり、今は人手不足解消のため、賽の神と同一視され地蔵菩薩像に宿った存在が閻魔にスカウトされているという。

そついう点では紫は非常に運が良かった。

友人の霊が新米の閻魔のあずかりにならなければ

神道の

条理にせよ閻魔十王にせよ、よほど厄介な相手をする事になっただろつ。

その点、神道に身を委ねた妹紅はまさに適役。

仏教と神道の概念のぶつかり合いになれば、閻魔は妹紅を一方的に裁けない。

残るは当人同士の実力の差だが、軍神に鍛えられた妹紅が新米の閻魔に負けるわけがない。

尤も、倒してしまうと後々面倒な事になるが、その辺りは紫が上手くやるだろう。

「ましろの符が出来てれば　いや、その方がまずいか」

「だな。これ以上攻撃力上げてどうするのさ」

妹紅は死なないが、戦えば疲れる。

故にましろの神器が完成していればより有利になると思ったのだが、下手に相手を倒してしまうと大陸から仏の大本がやって来かねない。

隣で呆れ声を上げながら、神奈子が再び酒を口にした。

なお、ましろの符の実用性はかなり低い。

可能になったのは影への属性変化なのだが、そもそも悠には変化させる元になる特別な力が無いのである。

遠距離攻撃が出来ない以上、近接武器を強化する必要性は全く無い。

今はもう自分の強化は諦めて、代わりに妹紅が使える様に色々弄くっている最中であつた。

「昔はよかつたねー。人は和魂を崇め荒魂を宥め、神は人に神徳を授け災厄より守る。好き勝手にしても互いに共存できたんだ」

「それが今じゃ、世が乱れる度に信仰が強くなる。疫病や飢饉なら

喜んで手を貸すが、人同士の争いに首を突っ込むのもな」  
「軍神の辛いところだね」

諏訪子がかつて人と共に在りし日を懐かしみ、神奈子がつまらな  
そうな声で今の人の在り方を嘆く。

そんな二人に、悠は上手い言葉をかけられることは出来なかった。  
人は神より自ら離れ、内乱から末法思想が広がり仏教に傾倒する。  
かつて土着神と中央の神が戦場に出張り、それに人が続いた時代  
はとうに幕を下ろした。

神が末裔を導いた戦乱の世は既に遠く、今や人は自ら争いを起こ  
し自身が無辜の民への災厄となっている。

流転は定めにして変える事あたわず。

というか、流転を拒む事は固定を望む事であり、生きていないも  
同義になる。

神、あるいは人の範疇を超えたモノが動くというのならこちらも  
動かざるを得ないが、度を過ぎた事をしでかさない限り人の世の移  
ろいを見守るのが今の神の役割だろう。

せいぜい、信者やこの地の民に無法を働く者共へ、荒魂としての  
側面を見せつける事が関の山か。

「それに、私達が視える人間が陰陽師ばかりつても気に入らない  
ね」

「まあ、陰陽道は神仏の力を借りたり怒らせないようにするのが基  
本だから」

口を尖らせて明らかに不満そうな諏訪子に苦笑する。

すると、頭を神奈子に拳で軽くつつかれた。

「そうじゃなくて、諏訪子は大祝にも自分が見えなくなったのが寂  
しいのよ」

現在、上社を統べる大祝は諏訪氏、下社を統べる大祝は金刺氏と  
いい、どちらも東風谷の分家には違いない。

だが、世間的には大祝が現人神と言われているものの、実際に現  
人神としての力を持つのは決して表に出ない東風谷の風祝のみ。

今や大祝は直接諏訪子や神奈子と会話する事すらできず、先の源  
平合戦の際も仕方なく神奈子が夢枕に立つことで源氏に付き、幕府  
御家人になることが出来たのだ。

とはいえ、自らの霊的資質の欠如に憤りを持っているのか、彼ら  
は昔はしきりに東風谷からの血を入れようと積極的になっていた。

だが、それも無駄な事だ。

彼らの間違いは、資質を持つ者でなく嫡子を大祝にした事に始ま  
っている。

また、風祝の子らは総じてそれなりの霊的資質を持つが、だから  
こそ今の政治に関わらせたくないというのが風祝と守矢神社の総意  
である。

どの道、風祝の資質は一子相伝。

代を重ねる度に風祝の力が上がるのも、風祝という称号を継いで  
来た事が大きい。

諏訪子の血を引く事は現人神たる資格に過ぎない。

風祝は神であると共に人だ。

代を重ねる度、継がれた称号が力を蓄える。

これは信仰に依存する諏訪子や神奈子と違い、称号が引き継がれ  
る際に先代の力的一端が称号に宿るためだ。

当然、風祝自体を引き込もうとする輩が居ないわけではなかった  
だが、武力で訴えるには人の身はあまりに弱い。

故に社会的な地位、権力を利用した手段に訴えるのが殆どだった  
が、それは同時に守矢一家を敵に回す事と同義である。

中でも影の炎に身を包んだ妹紅が出向いた時に、元凶を発狂寸前  
まで追い詰めたのも今ではいい思い出である。

尤も、現在の諏訪氏や氏子達は源平の合戦の際に夢の啓示を受けた事に恩義を感じたためか、その夢で神奈子が使ったという梶の葉を家紋としている。

そんな彼らは東風谷宗家に敬意を払い、身勝手な干渉をすることは無い。

ちなみに、基本身分を重視した御見合いが主流の世において、東風谷家では身分に拘らない恋愛結婚が推奨されている。

それは守矢神社の家族愛であり、特に目をかけられている風祝の子らは必ず幸福な家庭を築いてきた。

その影には、邪な思いで近付いた輩へのミシヤグジによる祟りの暗躍があったりするのだが、まあこれは余談であろう。

「でも、昔みたいに遊び歩けばいいんだけど」

「まあ、それは次の祭りの時でいいんじゃない？」

そう言った神奈子は遠いどこかを眺める様に視線を宙空に向け、諏訪子もどこか慈しむ様な声でそれを慰める。

昔、神と人が触れ合い共に歩んでいた頃の話。

ただ共に騒ぎ、遊び、困難に力を合わせ立ち向かう人間へ助力をしていた頃。

今の崇められ神徳を与えるこちらからの一方通行に近い有様でなく、本当の意味で人と共に生きていた頃の思い出。

現在は神事に力を振るい信仰を集め、祭りに紛れ込んで勝手に騒いで遊び、無聊を慰めるのがここに限らず神霊の在り方における主流だ。

さらに言うならば、彼女達の場合鬱憤晴らしにはさらに幾らか方法が有ったりもするが。

「よし、そろそろ閨に行こうか」

「おー！」

神奈子が妖艶な笑みを浮かべて悠の腕を抱きしめ、諏訪子がましろの尾から体を起こし、そのひたすらに柔らかい身体を背中から押し付けてくる。

どうやら、今宵も悠は色々と搾り取られることは確定の様だった。

## 第十九話 ある一つの転換期（前書き）

時代を追うばかりで全く幻想入り出来ないのが辛いです。

一箇所に根を張っていると時代考証が面倒でたまらない。

そろそろ一度はっちゃんけるべきでしょうか。

## 第十九話 ある一つの転換期

「んん……」

悠の太腿を枕に眠り、諏訪子に頬をつつかれていやいやと小さく首を振る白髪の少女。

閻魔との戦いを終え、無事紫から返却された藤原妹紅その人である。

蓬莱の薬によって病まず飢えず眠る必要すらない身となった彼女であるが、当然疲れは蓄積する。

溜まった疲労によってやや幼児退行気味になっていた彼女は、帰還を祝う宴の後こうして悠に甘えるように寝入ってしまったのだ。

閻魔は部下である死神や地獄の鬼を引き連れており、流石の妹紅もそう簡単に敵う相手ではなかったらしい。

だが、死んでも無限に蘇るのが蓬莱人たる妹紅の強み。

相討ち前提の戦法を繰り返す事により、敵戦力と士気に大きなダメージを与える事に成功したという。

そこで紫が閻魔を交渉の場に引きずり込み、亡霊となった友人は幽霊の管理を条件に閻魔から冥界の永住権を手に入れたらしい。

「寝ていると年相応に可愛いのにね」

穏やかに眠る妹紅の寝顔を覗き込み、悠の隣に座る神奈子が小さく呟く。

ましろはいつも通り寝入っており、ここ守矢神社の社務所で起き

ているのは三人のみ。

ようやく休みくつろげる様になった妹紅に、変に不安を抱かせるわけにはいかない。

だからこそ、こうして彼女が深く寝入っている事を確認してから、ようやく本題に入ることが出来る。

それ即ち、大きく変化した世に対する守矢一同の姿勢だ。

後鳥羽上皇が諸国の御家人、守護、地頭らに義時追討の院宣を発し、鎌倉に対して挙兵を行なった。

後に承久の乱と呼ばれるこの戦は鎌倉側の勝利に終わる。

上皇、天皇、そして朝廷側の貴族・武士が処罰されたこの事態に驚いたのが民衆だ。

朝廷の威信が地に落ち、社会における価値観が正反対に転換したと言ってもいい事態である。

そして鎌倉の武家政権は西国をも支配下に置き、この国の頂点に立った。

だが、ここである問題が浮上する。

すなわち、守矢一同がこれからどういうスタンスで人に接していくべきか、という事である。

この国の民に対して諏訪子達はどのような立ち位置を示すべきか。それぞれ現状を確認した後、三人はすぐに決断を下した。

人の世は人の手に任せるべきである、と。

これは、もう既に国内が一枚岩として動かない事が最大の要因となっている。

同じ大祝でも、上社の諏訪氏と下社の金刺氏では主義主張が異なり、この時代では両家に格差も生じているのだ。

特に、この国の多数の地頭となっている北条氏の諏訪信仰は政治的にも重要な意味を持ち、上社の大祝である諏訪氏が北条氏の御家人として重要視されている事が大きい。

この結果、全国に諏訪神社が建立される事になり、信仰も大きく増加しているためだ。

こうなれば、神霊側もこの国のみに固執する事は出来ない。

この国から外へ広がっていった血筋もある。

この国の外にも諏訪子や神奈子に信仰をささげる人間もいる。

諏訪子、神奈子はもはやこの一地域だけを守護する神ではなく、信仰を奉げ仕える人間全てを見なければならぬ立場になったのだ。

そして、絶対に譲れない一線として定められたのが風祝だ。

守屋が鼻肩にするのは風祝とその縁者のみ。

それ以外の人間に対しては、等しく妖怪を始めとする怪異、霊的な厄災から守り、神徳を授ける。

それが神の役割であり、上社や下社の人間が自らの意志で道を選んだならば、神は無闇に干渉するべきではない。

上社と下社の間には確執も生まれている。

まして、両社の大祝達は社会的な地位、武力を有している。

権力者として彼らが争うならば、その結末がどうなるうとも神はただ見守るだけだ。

「結局我関せず、か」

「ま、神様なんてそんなもんだよ。祈りに応え、人を見守って、一

緒に騒げればそれでいいじゃん」

神奈子のぼやきに諏訪子が苦笑する。

信仰の増加によって力が増したのはいいが、自由気ままに振るえないのが現状なのだ。

昔のように奇跡を使い放題というわけにはいかない。

神霊世界の移り変わりの激しい昨今、神といえど人の害となると判断されたならば、他の神の力を借りた人間に調伏されてしまうだろう。

もしくは、他の神を刺激する事が結果的に守るべき人間へ害を為しかねない。

それは、神奈子や諏訪子の望むところではないのだ。

「ま、この国の中でぐらい仲良くして欲しいものだけど」

諏訪子はそうぼやきながら、妹紅の枕になっている悠の代わりに囲炉裏へ薪をくべる。

この国の中で、とはこの地に昔から住まう民の事だ。

人間の対立は上社と下社だけではない。

鎌倉から土地を与えられ、その土地の民を治めている地頭などの権力者にも派閥はある。

大和によって諏訪王国は終焉を迎え、その流れを汲む朝廷も今や武士に牛耳られた。

終わらない物など無い。

神の中には不変、不死を司るモノもいる。妹紅の肉体も不変と定義される一種だ。

だが、永遠にだって終わりはある。

真に不滅たるモノは無い。

それは、悠であっても同じ事だろう。

だから、この国に住まう人間、同じ様に諏訪子達を信仰する者同

士での争いも充分に起き得る。

そこに神の関与する余地は殆ど無い。

あるとすれば、増長しつつある妖怪などの怪異の介入、人の呪詛などを相手にするぐらいのものだろう。

「いずれ、神も妖怪も幻想になる　　か」

「紫の言ってた言葉かい？」

悠の漏らした小さな呟きに神奈子が反応する。

それに小さく頷きながら、妹紅の髪を手櫛で梳いてやった。

にへら、とだらしなく頬を緩める少女に胸の奥を温めながら、今まで抱いていた不安を言葉という形にする。

「これだけ大きな基盤が出来た以上、神奈子や諏訪子はそう簡単に消えたりしない。だけど、人は人自身の手で為し得る事象を増やしている。もし、今確かに在る神や妖怪が否定される時代が来たら、その時僕や妹紅、ましろはどうなるのかな」

不死と無敵。

今はまだ神秘を扱うものの手によって守られているが、人の関心はそれなりに向けられている。

人智が神秘を駆逐した時、人は必ず悠達へ手を出してくるだろう。

「人の移り変わりは早い。短い生だからこそ、人は目まぐるしく成長する。そんな未来を予測出来るのは、あの紫ぐらいなモノさ」

「神奈子？」

憂いを全く含まないその言葉に、隣に座る神奈子の目を見る。

その瞳の奥には、ブレる事のない確かな意志があった。

「私達は私達なりに出来る限り手を尽くすだけだ。今のままでは私達が人に敗れるというならば、人と同じ様に私達も前に進めばいいだけの事。迷い、恐れ、それを抱えて前に進めばいい。精一杯の事をやって負けたのなら、きつとその敗北も受け入れられる」

諭すような穏やかな口調で語りかけてくる神奈子。

柔らかい笑みを浮かべる彼女には、強さと優しさが溢れていた。

「それに、私だって負けたけど、今はこうして幸せだ」

そう言って悠の肩に寄りかかる神奈子。

さっきまでの堂々とした態度とは打って変わって、顔をやや下に向けている。

その耳が真っ赤になっているのはきつと酒のせいだけでは無いだろう。

真っ直ぐに愛情を表現するのが苦手な彼女は、ずっと抱きしめていたい程愛くるしかった。

諏訪大戦において敗れ、その結果悠の伴侶となった彼女が今を幸せだと言う。

それが、どうしようもない大きさの嬉しさとして悠の心を埋め尽くす。

ならば、例え人の世に敗北しようとも、それが必ずしも不幸に繋がるとは限らない。

だから、先を憂う事よりも、今手にしている幸せを大切にすることを優先する事を悠は誓った。

「ま、せっかくこの子も帰って来たんだし、また湯治にでも行って

みない？」

妹紅を抱きしめながら横になった諏訪子がそう提案する。

妹紅とは反対側の悠の太腿を枕にしているのだが、諏訪子の方が小さすぎて、諏訪子が妹紅を抱擁しているというより、妹紅に諏訪子がしがみ付いているような様子ではあったが。

「ああ、いいねえ。骨休めには温泉が一番だ」

同意の声を上げる神奈子。

神に休みは無いが、同時に労働の義務も無い。

今でこそ信仰維持のため積極的に動いているが、元々彼女達は自由気ままに活動するのが常だった。

乾と坤を創造できるため、なまじ出来ることが多いからこそ彼女達は多忙なのだが、他の神霊は大抵もつと専門に特化していて暇な時は暇なのである。

例えば休暇中に何か起きてても、よほどの大事でない限り問題は無い。むしろ、神の恩恵を人が忘れないためには、神が人に尽くす様に動くのではいけないのだ。

「人が生活するためだけなら、二人が休んだって問題ないからね」

そう言って、寄り添う神奈子を抱き寄せながら、諏訪子の頭を撫でる。

災いを退け、豊作をもたらし、病を鎮める。

そういった事は祭りや儀式を以って彼女達が定期的に行なっている。

問題があるとすれば妖怪の類いだが、こちらもそう気にする程のモノはいない。

まず、この地の外からやってくる妖怪は大抵小物である。

というか、ある程度知能を持った妖怪はこの地に挑む様な愚かな真似はしないのだ。

かつて力試しに訪れていた大妖の類いは、殺し過ぎたためかもうやって来ない。

また、この地に生まれた人を襲う妖怪であつても、その活動はひどく細々としている。

人が霊的な力を強めた現在、目立つ行動をする妖怪は速やかに討伐されてしまったためだ。

そんな時、神奈子や諏訪子は参拝する退治屋に加護を授けるだけで済んでしまう。

昔の様に神が自ら力を示す必要性もなくなった。

つまるところ、無駄に目立ちさえしなければ、神は自由気ままに過ごせるのである。

「じゃあ、明日行こう！」

威勢のいい声をあげる諏訪子に反対する者は誰もいない。

思い付きで行動した方がいい事も多々ある事を三人は知っているし、他の面々は振り回されることに慣れている。

問題が有るとすれば問答無用で拉致される風祝だが、そこら辺は諦めてもらうしかない。

最後に笑って思い返せるような思い出が作ればそれでいいのだ。

「土産はどうする？」

「この間奉納された酒でいいんじゃない？」

「諏訪子、鉄とか忘れるなよー」

明日への思いに期待を膨らませ、わいのわいのと準備について騒

ぎながら話し合う。

守矢神社の一日の終わりは、大抵こうして賑やかに締めくくられるのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1810t/>

---

東方神異譚

2011年7月27日02時13分発行